

支那國名稱 西天竺指唐爲支那

佛祖統紀卷四十三

宋太平興國七年 成都沙門光遠遊西天還、詣闕進西天竺王子沒徒囊表佛頂印貝多葉菩提樹葉、詔三藏施護譯其表曰、伏聞支那國 注
西竺、指大唐爲支那、今因舊以爲稱也 本有大天子、至聖至神富貴自在、自慚福薄無由朝謁、遠蒙皇恩賜金剛座釋迦如來袈裟一領、
卽已披挂供養、伏願支那皇帝、福慧圓滿壽命延長、一切有情度諸沈溺、謹以釋迦舍利附沙門光遠以進、注奉金剛佛袈裟、兩朝未見遺
送之實、今詳乾德四年行動等應詔、西天求法、諸國並賜詔書、應以此年附獻也、

二、支那古代の天文

(一)、支那古來天文家の事態及び方士唐都天部分定に就て

支那振古以來漢代に至り、天數を傳ふる者亦多し、高辛の前に重黎あり、唐虞に義和、夏に昆吾、殷商
に巫咸、周に史佚蓑弘あり、諸侯に在りては宋に子章、魯に梓慎、晋に卜偃(晉書)、鄭に裨竈、齊に甘
德、楚に唐昧、趙に尹臯、魏に石申あり。
漢代に入りては星は則ち唐都、季尋の徒あり(隋書)氣は則ち王朔、占歲は則ち魏鮮、歷算は則ち落下闔
あり。

抑も是等諸家の天星に對する觀測の精粗及び理想の如き、今に至りて尋ね難しと雖、然れども史漢並に
記載する所に據れば、日月五星中外列宿の外に、國皇・昭明・五殘・六賊・司危・獄漢・地維四填咸光・燭・天鼓・
天狗・格澤・旬始・枉矢等の諸星ありて、時ありて現はると爲し、并せて其現はるる所の方位時機狀態等を
詳述せり、而して解する者は、是れを五星の散變して形を現す者と爲せり史記天官書、漢書天文志、豈當時是等の想定
の如き、亦觀象、實測の間に交々行はれし耶、易に曰く天垂象示吉凶と、抑此語是等鑿天附會の想定を駟
致せし耶、之を要するに、是等の説行るるものは、古代觀測不精確の結果たるや可知耳。

蓋し如上の諸家、各々其見る所に由りて天數を言ふと雖、其論説は多難不經空理のみ、故に其星天部別
の如きも亦、武帝の時に至るまで猶ほ未だ定まらず、是に於て武帝、方士唐都をして始めて天部を定し
め、又落下闔をして歷書を編せしめたり、而して星度未だ定まらざるを以て、尋て天下に廣延宣問して
以て星度を理せしむ、然り而して星名の如き亦秦漢の間に定る者多きに似たり。

校定史記評林卷之二十六

歷書第四

中至今上卽位、招致方士唐都、分其天部、漢書音義曰、謂分部而落下闔運算轉歷、○索隱曰、姚氏案益部書舊傳云、闔字長公、明曉天文、隱於落
略中不然後日辰之度、與夏正同、乃改元、更官號、封太山、因詔御史曰、乃者有司言星度之未定也、廣延宣問、以理星度、未能贊也、
受也○索隱曰、漢書作贊、雖卽傳也、韋昭云、贊、比校也、鄭德云、相應爲贊也、略 十一月甲子朔且冬至巳詹、其更以七年爲太初元年、○索隱曰、改元封七年爲太初元
年、韋昭云、漢興至此百二歲
古今圖書集成乾象典星辰部
天星總論

天星雖總于魏之陳卓、星名似定於秦漢之間、而其在物在野在朝之天象人事則自堯舜相沿以至今日、天示人人法天之大義也、
 今天官家所傳星名皆起于甘德石申如郎將羽林三代以下之官、左更右更三代以下之爵、王良造父三代以下之人、巴蜀河間三代以下之國
春秋時無此名也 古今圖書集成六十二卷
 乾象與星辰部雜錄
 又漸臺輦道俱在武帝宮闕中 武本記

蓋し唐虞夏商周以來の政體、秦皇の大改革ありて爆然として破壊せらる、此の改革は青天の霹靂なりき、幾許もなく秦亡び漢興れり、乃ち漢興れりと雖、高祖は撥亂偃武他事を顧る暇なく、纔に亂雲を排除して以て太平の曙光を開きしのみにして、爾來百餘年間、文武兩帝の時に至りて、凡一切の文物典章の新組織始めて緒に就けり、惟ふに如此き更始維新の時に當りて、維才大略の武帝は、必ずしも初めよりして天測の精細を期せしにあらざ、且帝は神仙を好み方士を信仰せり、因て唐都を召して天部大體を定しめしもののみ。

豈史記天官書星天部別紀事の如き、唐都の指定に多少據りし所あらざる無きを得ん耶、乃ち遷が父司馬談の唐都に學びし天官なる者亦、恐くは是れ等のことに非ざるなき耶、然り而して、司馬遷報任安書、粗々當時武帝が方都に天部分定を命ぜし事情を窺ふべき者あり、曰く、僕之先人非有剖符丹書之功、文史星歷近乎卜祝之間、固主上所戲弄。

と、見るべし當時剖符丹書の事は功勞とせられ、星歷の事の如きは戲弄的の意を以て迎へられ居りしことを、故に此の天部分定なる者は、武帝が時勢焦眉の急に應じて、方士唐都をして天部大體を定めし者なることを決すべきなり、而も此の科學を戲弄的に輕侮せし者、是れ支那數百千年の久しきに亘りて、眞理實學(乃ち科學)の發達を遅々たらしめし一の原因として見るべきものなり。
 史記歷書天部分定に關する紀事委しからず。
 曰至今上即位、招致方士唐都、分其天部、而落下閔運算轉歷、然後日辰之度、與夏正同、乃改元、と、如此耳、寔に稽古者の惜む所なり。

附載 漢代方士の業體

司馬遷史記方士唐都の爲に本傳を立てず、又歷書唐都が武帝の命を受けて天部を定めし紀事亦極めて簡略なること前項所記の如し、故に唐都の天文數術に關する事蹟、遂に得て尋ねべからず、今姑らく左の數條を擧げて以て、方士の多くは、奈何なる業體を事とせしものなる耶を概想するの資と爲さんと欲す。

史記論文卷之十二
 孝武本紀補 孝武皇帝初即位、尤敬鬼神之祀、
此下俱封禪書全文 李少君、亦以祠、壺、穀、道、卻、老、方見上、上尊之、少君資好方、善爲巧發奇中、少君言於上曰、祠壺則致物、致物而丹砂可化爲黃金、黃金成以爲飲食器、則益壽、益壽而海中蓬萊僊者可見、見之以封禪則不死、
 公孫卿曰、僊人可見、而上往常遽、以故不見、今陛下可爲觀如緱氏城、置脯棗、神人宜可致且僊人好樓居、於是上令長安則作蜚廉桂觀

甘泉則作益延壽觀、使卿持節設具、而候神人、乃作通天臺、置祠具其下、將招來神僊之屬、於是甘泉更置前殿、始廣諸宮室、夏有芝生殿防內中、天子爲塞河、興通天臺、岩有光云乃下詔曰甘泉防書作生芝九莖救天下、

十一月乙酉、栢梁殿、方士多言古帝王有都甘泉者、其後天子又朝諸侯甘泉、甘泉作諸侯邸、勇之乃曰、越俗有火戕、復起屋、必以大、用勝服之、於是作建章宮、度爲千門萬戶、前殿度高未央、其東、則鳳闕、高二千餘丈、其西、則唐中數十里、虎圈、其北、治大池、漸臺高二十餘丈、名曰泰液池、中有蓬萊方丈瀛洲靈梁、象海中神山龜魚之屬、其南、有玉堂壁門大鳥之屬、乃立神明臺、井幹樓、度五十餘丈、輦道相屬焉、

方士之候祠神人、入海求蓬萊、終無有驗、而公孫卿之候神者、猶以大人跡爲解、無其效、天子益意厭方士之怪迂語矣、然終禱靡弗絕、冀遇其真、自此之後、方士言祠神者彌衆、

以上の諸條を通觀せば、看者自ら方士なる者の業體如何を推知することを得ると俱に、唐都が武帝の神仙好尙の意氣を迎て其信任を厚ふせる所以にも亦自ら想到せむ。

(二) 司馬氏の天文の傳來及び史記天官書著作竝に二十八宿星象觀支那傳來の
經路に就て

粵に支那古代天文本題に入るに當りて先づ司馬氏の天文の傳來、司馬談天官を唐都に學び、子遷が史記天官書を編述するに至りし因由等を概叙して以て参考に供す。

案ずるに遷其先周の司馬氏に出づ、司馬氏は世々周史を典り、曾祖無澤漢の市長と爲り、父談太史公と

爲り天官を方士唐都に學べり、蓋し司馬氏は上世より天官の事を典りしかど、後世其事中絶し、此に至りて談更に之を唐都に學び、遷又之を又談より相傳せり、談遷に遺命して史を著すことを勉めしめ、遷因りて發憤して史記を著し、五帝以來漢代に至る記傳及び他の書表と俱に天官書を作れり(征和二年(西紀)元前九一年)是より先き遷天下を周游して歸り、尋て仕へて郎中と爲り、使を奉じて巴蜀功侷昆明を征し還りて報命し、是に於て父談に河洛の間に見え、因りて此の遺命を受けし者なり、是れ談遷父子の天文傳來及び遷が史記天官書を作るに至りし概要なり。

遷修天官書例を擧げて曰く、
星氣之書多雜祿祥不經、推其文考其意、不殊比集、論其行事、驗于軌度、以次作天官書、
と、乃ち遷は父談より相傳せし外、尙ほ多くの星氣書即ち天文書に據りて、敢て其荒唐不經の説に比周せずして、遷一家の識見を立てて以て之を斷じ、星名に基づきて其行事を論じ、方位に由りて其軌度を驗し、部署次第して各星宿を配し、以て天官書を作りしものなり。

而して二十八宿の出處、遂に明かならず。
蓋し支那は明に二十八宿の出所を記せざるなり、然り而して、二十八宿の支那傳來に關しては、列宿獸帶編に於て論じたるを以て今贅せず。

而れども、其中印度と蒙古と二十八宿名目を同うし、支那と蒙古と二十八宿頭文字聲音を同うするを以

て之を観れば、印度の星象觀の支那に傳來せし經路に就きては、中央亞細亞西域匈奴接觸の情勢亦攷ふべきなり、今左に支那匈奴の關係及び周代邊裔交通の概要を擧げて以て參考に供す。

(三)、匈奴の關係

校訂史記評林卷之一百十

匈奴列傳第五十

匈奴、其先祖夏后氏之苗裔也、曰淳維、唐虞以上、有山戎、居北蠻畜牧而轉移、中逐水草遷移、母城部常處耕田之業、然亦各有分地、中略、夏道衰而公劉失其稷官、變于西戎、邑于豳其後三百有餘歲、中戎狄攻大王亶父、亶父止走岐下而豳人悉從亶父而邑焉、作周、中索隱曰、按謂其後百有餘歲周西伯昌伐畎夷氏後十有餘年、武王伐紂而營維中維、復居于鄆部、放逐戎夷經洛之北、以時入貢、命曰荒服、始作周國也、其後二百有餘年周道衰、而穆王伐犬戎得四白狼四白鹿以歸、自是之後、荒服不至、於周遂作甫刑之辟穆王之後二百有餘年、周幽王寵姬褒姒之故與申侯有卻、申侯怒而與犬戎共攻殺周幽王于驪山之下、遂取周之焦穫、而居于涇渭之間侵襲中國、秦襄公救周、於是周平王去鄆部而東徙維中維當是之時秦襄公伐戎至岐、始列爲諸侯是後六十有五年而山戎越燕而伐齊、齊釐公與戰于齊郊、其後四十四年、而山戎伐燕、燕告急于齊、齊桓公北伐山戎山戎走、其後二十有餘年、而戎狄至洛邑伐周襄王襄王奔于鄭之汜邑、中於是戎狄或居于陸渾、東至於衛、侵盜暴虐中國中國疾之、故詩人歌之曰、戎狄是應薄伐儉狁、至於太原、出與彭彭、城彼朔方、周襄王既居外四年、乃使使告急于晉、晉文公初立欲修霸業乃與師伐逐戎翟誅子帶、迎內周襄王、居于維中維、當是之時秦晉爲鄰國晉文公攘戎翟居于河西圍洛之間、號曰赤翟白翟、秦穆公得由余、西戎八國服於秦、中略、各分散居谿谷、自有君長、往往而聚者、百有餘戎、然莫能相一、自是之後、百有餘年、晉悼公使魏絳和戎翟、戎翟朝晉、後百有餘年、趙襄子踰句注、而破并代、以臨胡貉、其後既與韓魏共滅智伯、分晉地而有之、則趙有代句注之北、魏有河西上郡以與戎界邊、其後義渠之戎、築城郭以自守、而秦稍蠶食、至於惠王、遂拔義渠二十五城惠王擊魏、

清曰試に本文に由り計算すれば、自邑于豳至此、一千四百四十三年となる。

清云、將下恐脫三字

魏盡入西河及上郡于秦、中略、於是秦有隴西北地上郡、築長城以拒胡、而趙武靈王亦變俗胡服習騎射、北破林胡樓煩、築長城、自代並陰山、下至高闕爲塞、而置雲中雁門代郡、其後燕有賢將秦開、爲質於胡、胡甚信之、歸而襲破走東胡、東胡卻于餘里、與荆軻刺秦王、秦舞陽者開之孫也、燕亦築長城、自造陽至襄平、置上谷漁陽右北平遼東郡以拒胡、當是之時、冠帶戰國七、而三國邊於匈奴中索隱曰案三其後趙將李牧時匈奴不敢越邊、後秦滅六國、而始皇帝使蒙恬將十萬之衆北擊胡、悉收河南地、因河爲塞、築四十四縣城臨河、徙適戍以充之、而通直道、自九原至雲陽、因邊山險、瀍谿谷、可繕者治之、起臨洮至遼東萬餘里、又度河據陽山北假中、當是之時、東胡強而月氏盛、匈奴單于曰頭曼、頭曼不勝秦、北徙十餘年而蒙恬死、諸侯畔秦、中國擾亂、諸秦所徙適戍邊者皆復去、於是匈奴得寬復稍度河南與中國界於故塞、

(四)、周代邊裔の交通

蓋し支那の交通は武王十四年、九夷八蠻に達する道路を開通し、西旅來りて葵を獻し、大に諸侯を成周に會し、北夷貢を入れたる等に由て其端緒を見る、而して遠人を柔け賓待の禮を厚ふすることは上代の支那の志なりき、是の故に支那は夙に官を設けて遠客のことを掌らしむ。

武王十有四年通道於九夷八蠻西旅獻葵 按書經旅旅惟克商遂通道于九夷八蠻西旅獻葵

成王七年大會諸侯于成周四夷入貢作王會 古今圖書集成禮記典

禮記王制 東方曰夷被髮文身有不火食者矣南方曰蠻雕題交趾有不火食者矣西方曰狄被髮衣皮有不粒食者矣北方曰狄衣羽毛穴居有不粒食者矣

周禮 懷方氏掌來遠方之民致方貢致遠物而送逆之以節治其委積館舍飲食 臣按成周設官以待外夷之來朝貢者達之以節

中庸 孔子曰凡為天下國家有九經其八曰柔遠人也又曰柔遠人則四方歸之送往迎來嘉善而矜不能所以柔遠人也
漢承秦制置典客及典屬以待歸義蠻夷後並屬大鴻臚 按漢書百官表典客掌諸歸義蠻夷有承景帝中六年更名大行令武帝太初元年更名大鴻臚

然るに周德衰へて邊防の事起り、胡界の諸侯燕趙秦は毎に攻戰に驚せ、秦遂に周に代りて天下に王たるに至りぬ。

古今治平略 周秦邊防 中國之大戒無急於邊防 周德既衰天子不能守在四鄰於是諸侯務於戰攻而燕趙秦以與胡界乃始各築長城以拒胡以上匈奴の關係及び周代邊裔の交通の如きは、古の研究者の西東星象觀相傳に就きて亦、一考すべき者と爲す。

三、四禽星象典據

龍龜虎鳳四禽星象の由來亦久し、曲禮に於ては四禽を旗に畫きて軍陣の前後左右を標せし古式を録し、天官書に於ては四禽星宮の方位を説けり、下擧ぐる所の各天文家の四禽に關する星象說亦其胚胎する所遠きを知るべし。

(一)、禮記曲禮

曲禮曰史載筆、士載言、前有水則載青旌、前有塵埃則載鳴鳶、前有車騎則載飛鴻、前有士師則載虎皮、前有擊獸則載貔貅、行前朱鳥而後玄武、左青龍而右白虎、招搖在上急繕其怒、進退有度左右有局、各司其局、

十三經註疏 至孔子歿後、七十二之徒、共撰所聞以爲此記、或錄舊禮之義、或錄變禮所由、或兼記體履、或雜序得失、故編而錄之、以爲記也、
十三經註疏 行、前朱鳥而後玄武、左青龍而右白虎者、明軍行象天文而作陣法也、前南後北、左東西、朱雀玄武青龍白虎四方宿名也、鄭註畫此四獸於旌旗、以標左右前後之軍陣也、

(二)、史記天官書

漢の司馬遷史記天官書に於て、東北西南四禽宮名及び星名星象を綜攷し、繼て張衡辰曜の本源及び星象を論じ、宋の黃裳二十八宿は四禽の體象なることを道破せり、今三氏の星象說を摘録して以て、恒星繪

圖星象紀事の由る所を徴す。

三垣 四禽

中宮 天極星、其一明者太一常居也、環之匡衛十二星藩臣、皆曰紫宮○紫垣

東宮蒼龍、東北曲□十二星曰旗、旗中□星曰天市○天市垣、左角李、右角將、尾爲九子角李尾龍體、尾有龍尾體之象

南宮朱鳥 太微○太微垣、三光之廷、匡衛十二星藩臣、翼爲羽翮翼有鳳體之象

西宮咸池 參爲白虎參有虎體之象

北宮玄武 虛、危虛危有龜體之象

三垣四禽の名目星象、敘し得て始て分明なり。

二十八宿

二十八宿環北辰、三十幅共一較、運行無窮、輔拂股肱之臣配焉、忠信行道、以奉主上、太史公自序

東宮蒼龍 左角李、右角將、亢爲疏廟、主疾、氏爲天根、主疫、房爲天府、曰天駟、心爲明堂、尾爲九子、曰君臣斥絕不和、箕爲敖客、后妃之府、曰口舌、南宮朱鳥 東井爲水事、輿鬼祠事、中白者爲質、柳爲鳥注、主本草、七星、頸爲員官、主急事、張素爲厨主觴客、翼爲羽翮、主遠客、軫爲車、主風、西宮咸池素隱曰、文禮曰、西宮白帝、其精白虎、奎爲封豨、爲溝瀆、婁爲聚衆、胃爲天倉、昂爲髦頭、胡星也、爲白衣會、畢曰罕車、爲邊兵、主弋獵、參爲白虎、三星隅置曰觜觿、爲虎首、主葆旅事、北宮玄武 南斗爲廟、牽牛爲犧牲、務女、虛爲哭泣之事、危爲蓋屋、營室爲清廟、曰離宮、東壁二十八宿を摘録すること右の如しと雖、今其文章前後の關係を明にするが爲に、天官書全文を左に登載して以て參照に供す。

校訂史記評林卷之二十七

天官書第五

中宮 天極星、其一明者太一常居也、旁三星三公、或曰子屬、後四星未大星正妃、餘三星後宮之屬也、環之匡衛十二星藩臣、皆曰紫宮、前列直斗口三星、隨北端銳、若見若不、曰陰德、或曰天一、紫宮左三星曰天棓、右五星曰天棓、後六星、絕漢抵營室、曰閣道、北斗七星、所謂璇璣玉衡、以齊七政、杓攜龍角、衡殷南斗、魁枕參首、用昏建者杓、杓自華以西南、夜半建者衡、衡殷中州河濟之間、平旦建者魁、魁、海岱以東北也、斗爲帝車、運于中央、臨制四鄉、分陰陽、建四時、均五行、移節度、定諸紀、皆繫於斗、斗魁戴匡六星曰文昌宮、一曰上將、二曰次將、三曰貴相、四曰司命、五曰司中、六曰司祿、在斗魁中貴

人之牢、魁下六星、兩兩相比、名曰三能、三能色齊、君臣和、不齊爲乖戾、輔星相近、輔臣親暱、斥小疏弱、杓端有兩星、一內爲牙、招搖、一外爲盾、天鋒、有句闔十五星、屬杓、曰賤人之牢、其牢中星實則因多、虛則開出、天一、槍、楛、牙、盾、動搖、角大兵起、

東宮蒼龍、房、心、心爲明堂、大星、天王、前後星、子屬、不欲直、直則王失計、房爲天府、曰天駟、其陰右驂、旁有兩星、曰鈴、鈴北一星曰轄、東北曲十二星曰旗、旗中四星曰天市、中六星曰市樓、天市中星衆者實、其中虛則耗、房南衆星曰騎官、左角李、右角將、大角者、天王帝坐廷、其兩旁各有三星、鼎足、句之曰攝提、攝提者、直斗杓所指以建時節、故曰攝提格、尤爲疏廟、主疾、其南北兩大星曰南門、氏爲天根、主疫、尾爲九子、曰君臣斥絕不和、箕爲敖客、后妃之府、曰口舌、火犯守角、則有戰、房、心、王者惡之、

南宮朱鳥、權、衡、衡、大微、三光之廷、筐匡衛十二星、藩臣、西將、東相、南四星、執法、中端門、門、左右掖門、掖門內六星、諸候、其內五星、五帝座、後聚一十五星蔚然、曰郎位、傍一大星、將位也、月五星順入軌道、司其出所守、天子所誅也、其逆入若不軌道、以所犯命之、中坐成形、皆羣下不從謀也、金火尤甚、廷藩西有階星五、曰少微、士大夫、權、軒輶、軒輶黃龍體、前大星、女主象、旁小星御者、後宮屬、月五星守犯者、如衛占、東井爲水事、其火入之、一星居其左右、天子且以火爲敗、東井西曲星、曰鉞、鉞北、北河、南、南河、兩河天闕間、爲關梁、輿鬼、鬼祠事、中白者爲質、火守南北河二兵起、發不登、故德成、觀成、漢、傷成、鉞、禍成、井、誅成、質、柳爲鳥注、主木草、七星、頸爲員官、主急事、張、素爲尉、主鷹客、翼爲羽翮、主遠客、轸爲車、主風、其旁有一小星、曰長沙星、星不欲明、明與四星等、若五星入轸星中、兵大起、軫南衆星曰天庫樓、庫有五車、車星角若益衆、及不具、無處車馬、

西宮咸池、曰天潢、五潢、五帝車舍、火、入、旱、金、兵、水、水、中有三柱、柱不具兵起、奎曰封豕、爲溝瀆、婁爲聚衆、因爲天倉、其南衆星曰積積、昴曰鬣頭、胡星也、爲白衣會、畢曰牽車、爲邊兵、主弋獵、其大星旁小星爲附耳、附耳搖動、有讒亂臣在側、昴畢間爲天街、其陰陰國、陽陽國、參爲白虎、三星直者、是爲衡石、下有三星、銳、曰罰、爲斬艾事、其外四星、左右股也、小三星隅置曰觜觿、爲虎首、主葆旅事、其南有四星、曰天廁、天廁下一星曰天矢、矢黃則吉、青白黑凶、其西有勾曲九星、三處羅列、一曰天旗、二曰天苑、三曰九游、其東有大星、曰狼、狼角變色多盜賊、下有四星、曰弧、直、狼、狼比地有大星、

曰南極老人、老人見治安、不見兵起、常以秋分時、候之于南郊、

北宮玄武、虛、危、危爲蓋屋、虛爲哭泣之事、其南有衆星、曰羽林天軍、軍西爲壘、或曰鉞、旁有一大星、爲北落、北落若微、亡軍、星動、角益希、及五星犯北落、入軍、軍起、火、金、水、尤甚、火入軍憂、水、水、患、木、土、軍吉、危東六星、兩兩相比、曰司空、營室爲清廟、曰離宮、閣道、漢中四星曰天駟、旁一星曰王良、王良策馬、車騎滿野、旁有八星、絕漢曰天潢、天潢旁、江星、江星動、以人涉水、杓白四星、在危南、匏瓜、有青黑星守之、魚鹽貴、南斗爲廟、其北建星、建星者族也、牽牛爲犧牲、其北河鼓、河鼓大星、上將、左右左右將、婺女、其北織女、織女、天女孫也、

司馬氏は、顓頊の命を受けて天文を司りし南正重の業を繼承して、井井焉として由來在ること、遷が自序に詳述する所の如くにして、又支那最古の天文紀事の正しき者、遷の天官書を以て冠と爲す、蓋し遷の天官書は、上世の遺聞を網羅し、之を紀綱して以て、範を後昆に垂れし者にして、支那の天文学界に於ける遷が功勞亦大なり、遷化せし後ち是の書世に出づ、宣帝の時に至りて遷が外孫楊惲是の書を祖述して遂に宣布す、地節乃至神爵年間、西紀元前六九乃至六一年の頃王莽の時に至りて遷の後裔を求め封じて史通子と爲すといふ。

太史公自序(即ち司馬遷自敘傳)

史記評林卷之一百三十に出づ

司馬遷傳

漢書評林卷之六十二に出づ

(三) 靈 憲

張衡に就て

張衡は章帝の建初乃至順帝の永和年間西紀七六乃至一三七年の人にして靈憲天文本及び算罔論天地を網羅計算せを著し、渾天儀・地動儀地震計を作れり、衡歿して後ち、友人崔瑗、衡の碑文を撰して曰、衡數術窮天地、製作倖造化、と、衡又詩賦文章に長ず、齊の沈約、宋書謝靈運傳・論贊中、衡に論及して曰、若夫平子、艷發文、以情變、絕唱高蹤、久無嗣響、と、唐の李淳風、隋書天文志に紀して曰、張衡爲太史令、鑄渾天儀、總序經星、謂之靈憲、而衡所鑄之圖、遇亂湮滅、星官名數、今亦不存、と、然り而して、衡の集、算罔論の如き亦載せず、蓋し俱に湮滅せし者なり、惜哉。

辰曜の本源 道根 道幹 道實

大素之前 幽こく、すみかたりて、無色、おく、ふかく、し、かして、無動、ひつそり、さびしくして、無言、みらるべきものなく、不見、まかるべきことなく、不聞、清きよ 玄くろ 靜しず 寂しやく 冥めい 默もく 不可爲象。
厥中惟靈。厥外惟無。如是者永久焉。斯謂溟溟。蓋乃道之根也。道根既建。自無生有。大素始萌。萌而未兆。并あはせ氣同色。渾にこりて、まろくして池不分。故道志之言云。有物渾成。先天地生。其氣體。固未可得而形。其遲

速。固未可得而紀也。如是者又永久焉。斯謂厖鴻。蓋乃道之幹也。道幹既育。有物成體。於是元氣剖判。剛柔始分。清濁異位。天成於外。地定於内。天體於陽。故圓以動。地體於陰。故平以靜。動以行施。靜以合化。堙鬱構精。時育庶物。斯謂太元。蓋乃道之實也。

兩儀道中に儼ふ

天有兩儀。以儼道中。其可觀。樞星是也。謂之北極。在南者不著。天致其動。稟氣舒光。地致其靜。承施候明。天以順動。不失其中。地以靈靜。

四禽三垣を繞る

紫宮爲皇極之居。太微爲五帝之廷。明堂之房。大角有席。天市有坐。蒼龍連蜷於左。白虎猛據於右。朱雀奮翼於前。靈龜蜷首於後。

龍龜虎鳳、三垣の周圍に儼ふの態、乃ち二十八宿布列の狀、説き得て恰も適切なり。靈憲全文は則ち左の如し。

梁の劉昭、靈憲を引用して續漢書天文志を註補し、謂て曰。臣昭以、張衡天文之妙、冠絕一代、所著靈憲渾儀略具辰耀之本、今寫載以備其理焉。欽定廿四史續漢書と。

靈憲曰、昔在先王、將步天路、用之靈軌、尋緒本元、先準之於渾儀、是爲正儀立度、而皇極有適建也、樞運有適稽也、乃建乃稽、斯經天常、聖人無心、因茲以生心、故靈憲作輿、曰、大素之前、幽清之靜、寂寞冥默、不可爲象、厥中惟靈、厥外惟無、如是者永久焉、斯謂深澤、蓋乃道之根也、道根既建、自無生有、大素始萌、萌而未兆、并氣同色、渾沌不分、故道志之言云、有物渾成、先天地生、其氣體、固未可得而形、其運速、固未可得而紀也、如是者又永久焉、斯謂鴻鴻、蓋乃道之幹也、道幹既育、有物成體、於是元氣剖判、剛柔始分、清濁異位、天成於外、地定於內、天體於陽、故圓以動、地體於陰、故平以靜、動以行施、靜以合化、彈鬪構精、時育庶類、斯謂太元、蓋乃道之實也、在天成象、在地成形、天有九位、地有三九域、天有三辰、地有三形、有象可效、有形可度、情性萬殊、旁通感薄、自然相生、莫之能紀、於是人之精者作、聖、實始紀綱而經緯之、八極之維、徑二億二萬二千三百里、南北則短減千里、東西則廣增千里、自地至天、半於八極、則地之深亦如之、通而度之、則是渾已將覆其數、用重胸股、懸天之景、薄地之義、皆移千里而差一寸得之、過此而往者、未之或知也、未之或知者、宇宙之謂也、宇之表無極、宙之端無窮、天有兩儀、以御道中、其可觀、樞星是也、謂之北極、在南者不著、故聖人弗之名焉、其世之遠、九分而減二、陽道左廻、故天運左行、有驗於物、則人氣左羸、形左微也、天以陽廻、地以陰停、是故天致其動、稟氣舒光、地致其靜、承施候明、天以順動、不失其中、則四序順至、寒暑不減、致生有節、故品物用生、地以靈靜、作合承天、清化致養、四時而後育、故品物用成、凡至大莫如天、至厚莫如地、地至質者曰地而已、至多莫如水、精爲漢、漢用於天而無列焉、思次質也、地有三山嶽、以宣其氣、精種爲星、星也者體生於地、精成於天、列居錯峙、各有道屬、紫宮爲皇極之居、太微爲五帝之廷、明堂之房、大角有席、蒼龍連蟻於左、白虎猛據於右、朱雀奮翼於前、靈龜蟠首於後、黃神軒轅於中、擾既畜、而狼蛇魚鼈、罔有不具、在野象物、在朝象官、在人象事、於是備矣、懸象著明、無大乎日月、其徑當天周七百三十六分之一、地廣二百四十二分之一、日者陽精之宗、積而成鳥象、鳥而有三趾、陽之類其數奇、月者陰精之宗、積而成獸象、兔陰之類、其數耦、其後有憑焉者、擊請無死之樂於西王母、姮娥竊之以奔月、將往枚筮之於有

黃、有黃鏡之曰、吉、翩翩歸妹、獨將西行、逢天晦芒、母驚母恐、後具大昌、姮娥遂託身於月、是爲蟾蜍、夫日譬猶火、月譬猶水、火則外光、水則含景、故月光生於日之所照、魄生於日之所蔽、當日則光盈、就日則光盡也、衆星被耀、因水轉光、當日之衝、光常不合者、蔽於他也、是謂闇虛、在星星微、月過則食、日之薄地其明也、繇暗視明、明無所屈、是以望之、若火、方於中天、天地同明、繇明瞻暗、暗還自奪、故望之若水、火當夜揚光、在晝則不明也、月之於夜與日同、而差微、星則不然、強弱之差也、衆星列布、其以神著、有五列焉、是爲三十五名、一居中央、謂之北斗、動變挺占、實司王命、四布於方、爲二十八宿、日月運行、歷示吉凶、五緯經次、用告禍福、則天心於是見矣、中外之官、常明者百有二十四、可名者三百二十、爲星二千五百、而海人之占未存焉、微星之數、蓋萬一千五百二十、庶物蠢蠢、咸得繫命、不然何以愆而理諸、夫三光同形、有似珠玉、神守精存、麗其職而宣其明、及其衰神歇精散、於是乎有隕星、然則、奔星之所墜至則石、文曜麗乎天、其動者七、日月五星是也、周旋右回、天道者貴順也、近天則遲、遠天則速、行則屈、屈則留、留則逆、逆則遲、遲於天也、行遲者觀于東、觀于東屬陽、行速者觀于西、觀于西屬陰、日與月、此配合也、攝提、熒惑、地侯、見晨、附于日也、太白、辰星、見昏、附于月也、二陰三陽、參天兩地、故男女取焉、方星巡鎮、必因常度、苟或盈縮不逾於次、故有列司作使、曰老子四星、周伯、王逢芮、各一、錯乎五緯之間、其見無期、其行無度、寔妖經星之所、然後吉凶宣周、其詳可盡、

又渾儀及び漏水轉渾天儀制左の如し。

張衡の渾儀及び漏水轉渾天儀制 玉海山房輯佚 書卷七十六

渾儀 赤道橫帶渾天之腹、去極九十一度十九分之五、御覽有黃道斜帶其腹、出赤道表裏各二十四度、故夏至去極六十七度而強、冬至去極百一十五度亦強也、然則黃道斜截赤道者、則春分分二字、秋分之分去極九十度、今此春分去極九十一度、秋分去極九十一度、御覽作九 御覽少者、就夏歷御覽作景去極之法、以爲率也、上頭橫行第一行者、黃道進退之數也、本當以銅儀、日月度之則可知也、以儀一歲乃竟、而中間又有陰雨難卒成也、是以作小渾、蓋赤道黃道、乃各調賦三百六十五度四分之一、從冬至所、在始起令之相當值也、取北極及衡各誠琢之爲軸、取薄竹篾穿其兩端、令兩穿中間與渾半等、以貫之、令之察之與渾相切摩也、乃從減半起以爲三十二度八分之五、盡衡減之半焉、又中分其度、拘去其半、令其半之際正直與兩端減半相直分、度半之際、從冬至

清曰、案夾注、覽下恐脫歷字、

起一度一移之視履之半際夕多黃赤道幾也、其所多少則進退之數也、從北極數之則元極之度也、各分赤道黃道爲三千四氣、一氣相去十五度十六分之七、每一氣者黃道進退一度焉、所以然者黃道直時去南北極、近其處地小而橫行與赤道且等、故以履度之於赤道多也、設一氣令十六日皆常率四日、差少也、令一氣十五日不能半耳、故使中道三日之中若少半也、三氣一節故四十六日而差令三度也、至于差三之時而五日同率者一、其實節之間不能四十六日也、令殘日居其策、故五日同率也、其率雖同先之皆強後之皆弱、不可勝計取至於三而復有進退者黃道少斜于橫行不得度故也、春分秋分所以退者黃道始起更斜矣於橫行不得度故也、亦每一氣一度焉、三氣一節亦差三度也、至三氣之後稍遠而直、故橫行得度而稍進也、立春立秋橫行稍退矣、而度猶進者以其所退減其所進、猶有盈餘未盡故也、立夏立冬橫行稍進矣、而度猶退者以其所進增其所退、猶有不足未畢故也、以此論之、日行非有進退而以赤道重廣黃道使之然也、本二十八宿相去度數以赤道爲強耳、故於黃道亦進退也、冬至在二十二度少半最遠時也、而此歷斗十度俱百一十五強矣、冬至宜與之同率焉、夏至在二井二十一度半強最近時也、而此歷井二十三度俱六十七度強矣、夏至宜與之同率焉、後漢書律曆志章懷太子注、太平御覽卷二引至率也、漏水轉渾天儀制以銅爲器、再疊差置、實以清水、下各開孔、以玉乳叶漏水入兩壺、左爲夜右爲晝、徐堅初學記、卷二十五、蓋上又鑄金銅仙人居左壺、爲胥徒居右壺、皆以左手抱箭右手指刻、以別天時早晚、劉涓子、李善注、

張衡傳

後漢書卷第四十九に出づ。

張平子碑文

友人崔瑗の作に係り、數術窮天地制作侔造化の句を以て知らる、而れども、予多年搜索の後ち、始めて之を函海に於て見るを得たり、仍て特に左に掲載して以て同好者に示すといふ。

河間相張平子碑

河間相張君南陽西鄂人、諱衡、字平子、其先出自張老、爲晉大夫、納規趙武而反其侈、傳美之、君天姿淑哲、敏而好學、如川之逝、不舍晝夜、是以道德漫流、文章雲浮、數術窮天地、制作侔造化、瓌辭麗說、奇技偉藝、磊落煥炳、與神合契、然而體性溫良聲容芬芳、仁愛篤密、與世無傷、可謂淑人君子者矣、初舉孝廉爲尚書侍郎、遷太司令、實掌重黎歷紀之度、亦能燔燻敦大天明也德光照有漢、遷公車司馬令侍中、遂相河間、政以禮成、民是用息、遭命不永、聞忽喪祖、朝失良臣、民隕令君、天淚斯道、世喪斯文、凡百君子靡不傷焉、乃銘斯表以旌厥問、其辭曰、
於維張居、資質懿豐、德茂材義、高明顯融、焉所不學、亦何不師、盈科而逝、成章乃達、一物不知、實以爲耻、聞一善言、不勝其喜、包羅品類、稟授無形、酌焉不竭、冲而復盈、慶慶其庶、應應其幾、膺數命世、紹聖作師、苟華必實、令德惟恭、柔嘉伊則、孝友祇容、允出在茲、維帝念功、往才女諧、化洽民離、愍而不弔、降此咎、哲人其萎、罔不時、惘紀于銘、勒永終譽兮、死而不朽、芳烈著兮、

附載 光武帝地震善後に關する制詔後漢書光武帝紀第一下

張衡、地動儀(即ち地震計)を造りしは自ら仔細あり、开は是より先き八十七年、即ち光武帝の建武二十二年、西紀四十六年九月、衡が郷里南陽に、大地震ありて慘を極め、古老時に當時の狀を説く、是れ衡が、此機械を製作せし動機ならむ。又此の地震の時、光武帝の發したる制詔は左の如し。亦附載して以て參照に供す。

建武二十二年、九月戊辰、地震裂、制詔曰、日者地震、南陽尤甚、夫地者、任物至重、靜而不動者也、而今震裂、咎在君上、鬼神不順、無德、突殃將及、吏人、朕甚懼焉、其令南陽勿輸今年田租芻粟、遣調者二案行、其死罪繫囚、在戊辰以前、減死罪一等、徒皆施解、解、衣絲絮、法在徒役者、不得衣絲絮、今赦許之、賜郡中居人歷死者棺錢、人三千、其口賦、逋稅、而廬宅尤破壞者、勿收黃、田租世、欠吏人死亡、或在壞垣毀屋之下、而家羸弱不能收拾者、以見錢穀取備、為尋求之、

(四)、天文圖說

黄裳に就て

黄裳は、高宗の紹興乃至、寧宗の慶元年間西紀一、一四八、一四九、一五〇、一五一、一五二、一五三、一五四、一五五、一五六、一五七、一五八、一五九、一六〇、一六一、一六二、一六三、一六四、一六五、一六六、一六七、一六八、一六九、一七〇、一七一、一七二、一七三、一七四、一七五、一七六、一七七、一七八、一七九、一八〇、一八一、一八二、一八三、一八四、一八五、一八六、一八七、一八八、一八九、一九〇、一九一、一九二、一九三、一九四、一九五、一九六、一九七、一九八、一九九、二〇〇の人のして、張衡を距る大約一千年後の道學者なり、光宗登極、除太學博士進祕書郎、遷嘉王府翊善、作八圖以て獻す、曰太極、曰三才本性、曰皇帝王伯學術、曰九流學術、曰帝王紹運、曰百官、曰地理、曰天文、(左に掲載するもの即ち此天文圖說なり) 寧宗即ち嘉王即位、改禮部尙書尋兼侍讀、卒年四十九、所著有王府春秋講義及兼山集。黄裳傳

宋史新編卷一百四十八に出づ。

二十八宿は四禽の體なり

二十八舍。東方七宿角亢氐房心尾箕。爲蒼龍之體。北方七宿斗牛女虚危室壁。爲靈龜之體。西方七宿奎婁胃昂畢觜參。爲白虎之體。南方七宿井鬼柳星張翼軫。爲朱雀之體。

此に至りて、二十八宿は、龍龜虎鳳の體たることを、分明に道破せり、

上來所記は星天四宮、及び辰曜本源、三垣・二十八宿星象等に關する司馬・張・黄三氏論說の概要なり、右天文圖說全文は則ち次に掲載する所の如し。

宋の黄裳の天文圖に就て

此の天文圖拓本は、明治四十年、北京京師學堂植物學教官たりし理學士小野孝太郎氏之を蘇州聖廟に得て、理學博士柴田桂太氏に寄贈せし者に係れり。

碑は同聖廟内に在り、淳祐七丁未の年西一、一四七、一四八、一四九、一五〇、一五一、一五二、一五三、一五四、一五五、一五六、一五七、一五八、一五九、一六〇、一六一、一六二、一六三、一六四、一六五、一六六、一六七、一六八、一六九、一七〇、一七一、一七二、一七三、一七四、一七五、一七六、一七七、一七八、一七九、一八〇、一八一、一八二、一八三、一八四、一八五、一八六、一八七、一八八、一八九、一九〇、一九一、一九二、一九三、一九四、一九五、一九六、一九七、一九八、一九九、二〇〇東嘉王致遠の建る所、縦我曲尺六尺一寸五分、横三尺五

寸、星圖直徑三尺〇三分、上に天文圖と題し、下に圖説を掲ぐ、地理圖の碑亦同所に在り、體制同一なり（但し地圖をば方形に顯はせり）地理圖に左の附記あり、以て建碑の顛末を知るべし、

右四圖、兼山黃公、爲嘉邸翊善、自所進也、致遠舊得此本於蜀、司臬右浙、因摹刻以永其傳、淳祐丁未仲冬東嘉王致遠書、

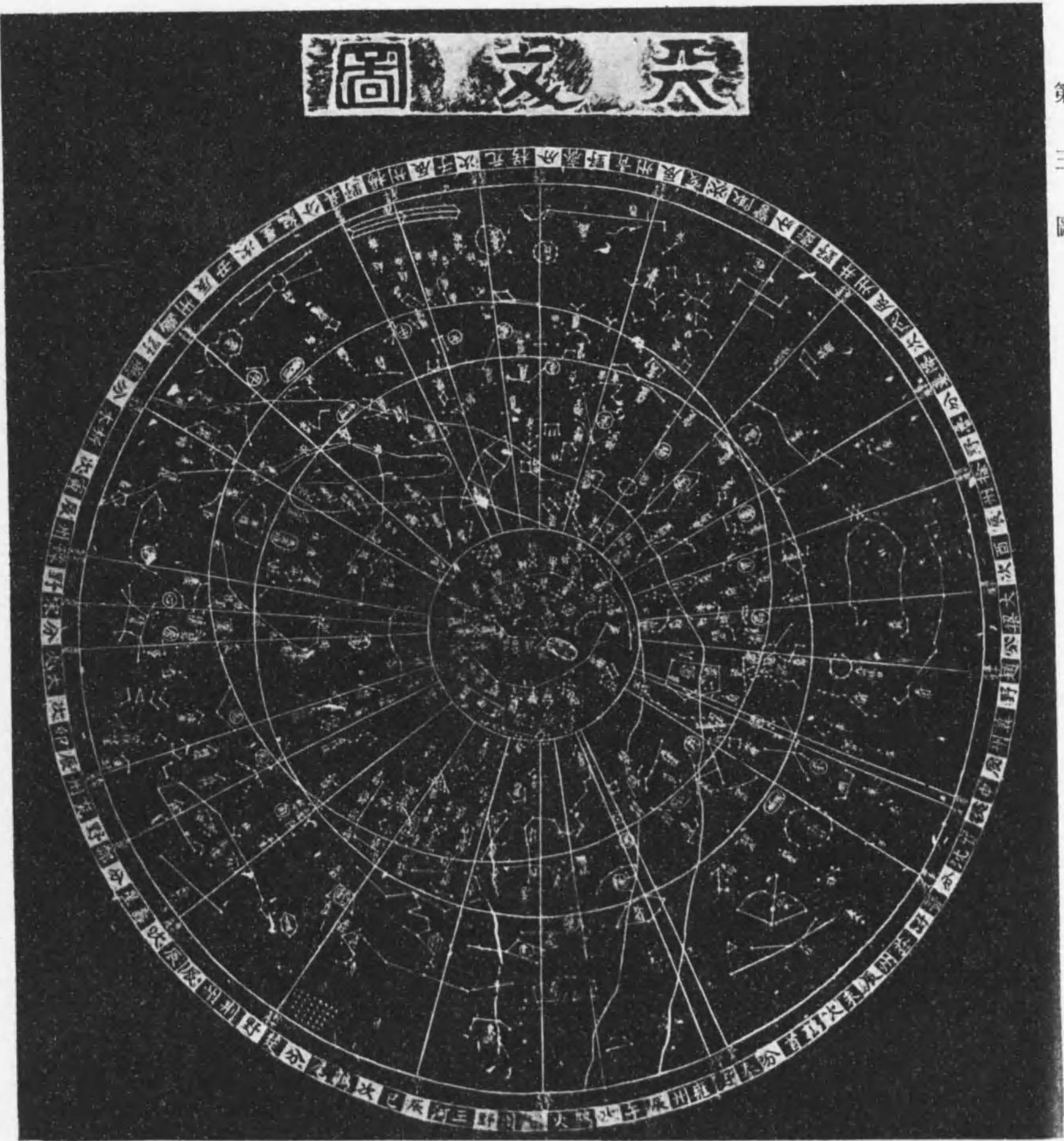
右致遠の附記に由れば、天文地理の外猶ほ二圖の碑あり、而も其二圖は、裳が所作の八圖中の何物を顯はせしや、其碑の存否と俱に今得て知る能はずといふ、惜哉、

蘇州は、往歲長髮賊の亂に遇ひ、古碑多くは破壊せられ、斷碑今猶ほ聖廟近傍に累積せりとぞ、蓋し他の二圖の如きも此の厄に罹りて其所在を失せしものならむ、

圖説は則ち左の如し。

太極未判、天地人三才函於其中、謂之混沌、云者言天地人渾然而未分也、太極既判、輕清者爲天、重濁者爲地、清濁混者爲人、輕清者氣也、重濁者形也、形氣合者人也、故凡氣之發見於天者、皆太極中自然之理、運而爲日月、分而爲五星、列而爲二十八舍、會而爲斗極、莫不皆有常理、與入道相應、可以理而知也、今略舉其梗概、列之于下、天體圓、地體方、圓者動、方者靜、天包地、地依天、天體周圍皆三百六十五度四分度之一、徑一百二十一度四分度之三、凡一度、爲百分四分度之一、即百分中二十五分也、四分度之三、即百分中七十五分也、天左旋、東出地上西入地下、動而不息、一晝一夜行三百六十六度四分度之一、緣東行一度、故天左旋三百六十六度、然後日復出於東方、地體徑二十四度、其厚半之、勢傾東南、其西北之高不過一度、邵雍謂、水火土石合而爲地、今所謂徑二十四度者、乃土石之體爾、土石之外、水接於天、皆爲地體、地之徑亦得一百二十一度四分度之三也、兩極南北上下極是也、北高而南下、自地上觀之北極出地上三十五度有餘、南極入地下亦三十五度有餘、兩極之中皆去九十一度三分度之一、謂

第三圖



之赤道、橫絡天腹、以紀二十八宿相距之度、大抵兩極正居南北之中、是爲天心、中氣存焉、其動有常、不疾、不徐、晝夜循環、天運自東而西、分爲四時、寒暑所以平、陰陽所以和、此後天之太極也、先天之太極、造天地於無形、後天之太極、運天地於有形、三才妙用盡在是矣、日太陽之精、主生養恩德、人君之象也、人君有道則日五色、失道則日露其惡譴、告人主而儆戒之、如史志所載、日有食之、日中烏見、日中黑子、日色赤、日無光、或變爲彗星、夜見中天、光芒四射之類是也、日體徑一度半、自西而東、一日行一度、一歲一周天、所行之路謂之黃道、與赤道相交、半出赤道外、半入赤道內、冬至之日、黃道出赤道外二十四度、去北極最遠、日出辰、日入申、故時寒晝短而夜長、夏至之日、黃道入赤道內二十四度、去北極最近、日出寅、日入戌、故時暑晝長而夜短、春分秋分、黃道與赤道相交當兩極之中、日出卯、日入酉、故時和而晝夜均焉、月太陰之精、主刑罰威權、大臣之象、大臣有德能盡輔相之道、則月行當度、或大臣擅權貴威官用事、則月露其惡而變異生焉、如史志所載、月有食之、月掩五星、五星入月、月光晝見、或變爲彗星、陵犯紫宮、侵掃列舍之類是也、月體徑一度半、一日行十三度百分度之三十七、二十七日有餘一周天、所行之路謂之白道、與黃道相交、半出黃道外、半入黃道內、出入不過六度、如黃道出入赤道二十四度也、陽精猶火、陰精猶水、火則有光、水則會影、故月光生於日之所照、魄生於日之所不照、當日則光明、就日則光盡、與日同度謂之朔、月行潛於日、週一週三謂之弦、分天體爲四分、謂初八日、及二十三日、月行近日一分故半明半魄、如弓張絃、上絃昏見、下與日會也、週一週三謂之望、謂十五日之昏、日入西月出、光盡體伏謂之晦、謂三十日、月行近於白道與故光在西北、下絃且見、故光在東也、衡分天中謂之望、謂十五日之昏、日入西月出、光盡體伏謂之晦、謂三十日、月行近於白道與黃道正交之處、在朔則日食、在望則月食、日食者月體掩日光也、月食者月入暗虛不受日光也、暗虛者日經星三垣、二十八舍、中外官星是也、計二百八十三官、一千五百六十五星、其星不動、三垣、紫微、太微、天市垣也、二十八舍、東方七宿、角亢房心尾箕、爲蒼龍之體、北方七宿、斗牛女虛危室壁、爲靈龜之體、西方七宿、奎婁胃躄畢嘴參、爲白虎之體、南方七宿、井鬼柳星張翼軫、爲朱雀之體、中外官星、在朝象官、如三台、諸侯、九卿、騎官、羽林之類是也、在野象物、如雞、狗、狼、魚、龜、鼈之類是也、在人象事、如離宮、閣道、華蓋、五車之類是也、其餘因義制名、觀其名則可知其義也、經星皆守常位、隨天運轉、譬如百官萬民、各守其職業、而聽命於七政、七政之行至其所居之次、或有進退不常、變異失序、則災祥之應如影響、然可占而知也、緯星五行之精、木曰歲星、火曰熒惑、土曰填星、金曰太白、水曰辰星、併日月而謂之七政、皆麗于天、天行速、七政行遲、遲爲速所帶、故與天與東出西入也、五星轉在日月、斡旋五氣、如大官分職而治、號令天下、利害安危由斯而出、

至治之世、人事有常、則各守其常度而行、其或君侵臣職、臣專君權、政令錯繆、風教陵遲、乖氣所感、則變化多端、非復常理、如史志所載、熒惑入於匏瓜一夕不見、匏瓜在黃道北三十餘度、或勾己而行、光芒震曜如五斗器、太白忽犯狼星、狼星在黃道南四十餘度、或晝見經天與日爭明、甚者變為妖星、歲星之精變為攬槍、熒惑之精變為蚩尤之旗、填星之精變為天賊、太白之精變為天狗、辰星之精變為枉矢之類、如日之精變為彗、月之精變為彗、政教失於此、變異見於彼、故為政者尤謹候焉、天漢四瀆之精也、起於鶉火、經西方之宿、而過北方、至於箕尾而人地下、二十四氣本一氣也、以一歲言之、則一氣耳、以三時言之、則一氣分為三氣、以十二月言之、則一氣分為六氣、故六陰六陽為三十二氣、又於六陰六陽之中、每一氣分為三初、則又裂而為二十四氣、二十四氣之中、每一氣有三應、故又分而為三候、是為七十二候、原其本始實一氣耳、自一而為四、自四而為十二、自十二而為二十四、自二十四而為七十二、皆一氣之節也、十二辰乃十二月斗綱所指之地也、斗綱所指之辰、即一月元氣所在、正月指寅、二月指卯、三月指辰、四月指巳、五月指午、六月指未、七月指申、八月指酉、九月指戌、十月指亥、十一月指子、十二月指丑、謂之月建、天之元氣無形可見、觀斗綱所指之辰、即可知矣、斗有三七星、第一星曰魁、第五星曰衡、第七星曰杓、此三星謂之斗綱、假如建寅之月、昏則杓指寅、夜半衡指寅、平旦魁指寅、他月倣此、十二次乃日月所會之處、凡日月一歲十二會、故有十二次、建子之月次名鶉尾、建丑之月次名星紀、建寅之月次名析木、建卯之月次名大火、建辰之月次名壽星、建巳之月次名鶉尾、建午之月次名鶉首、建申之月次名實沈、建酉之月次名大梁、建戌之月次名降婁、建亥之月次名臨訢、十二分野即辰次所臨之地也、在天為十二辰、十二次、在地為十二國、十二州、凡日月之交食、星辰之變異、以所臨分野占之、或吉、或凶、各有當之者矣、

四、辰曜 四禽 星名 宮名

備考

一本表は、日月星辰、龍龜虎鳳、宮名等の、經史等に見はれし次第を見ると俱に、古の人の、是等の事物に思ひを寄せし様をも、併せて看取せむが爲に調製せり、
 一本表は、易經乃至淮南子に見ゆる、日月星辰、龍龜虎鳳、宮名等を、大抵網羅せし者なり、但し、重複するものは省きし者あり、今製表上の都合に因り、別ちて甲乙二表と爲し、中央宮、及び龍龜虎鳳四宮に關する者は、甲表に掲げ、二十八宿、十二宮名等の如きは、乙表に載す、

雀	朱	虎	白
飛鳥遺之音、下、不 <small>飛鳥遺之音、下、不</small>	飛鳥遺之音、下、不 <small>飛鳥遺之音、下、不</small>	大人虎變、其文炳也、象 <small>大人虎變、其文炳也、象</small>	履虎尾、不噬人、經 <small>履虎尾、不噬人、經</small>
小過、有飛鳥之象焉、上逆而下順也、象 <small>小過、有飛鳥之象焉、上逆而下順也、象</small>	儀、益、稷 <small>儀、益、稷</small>	大人虎變、未占有字、經 <small>大人虎變、未占有字、經</small>	最哉、夫子、尙桓桓如虎如龍、如王奮厥武、如震如怒、進厥虎臣、闢如虺、大
織文鳥章、白旆夾央、小 <small>織文鳥章、白旆夾央、小</small>	織文鳥章、白旆夾央、小 <small>織文鳥章、白旆夾央、小</small>	大人虎變、未占有字、經 <small>大人虎變、未占有字、經</small>	碩人侯侯、有力如虎、邛桓如虎如龍、如王奮厥武、如震如怒、進厥虎臣、闢如虺、大
鳴矣、于彼高岡、梧桐生矣、于彼朝陽、雅 <small>鳴矣、于彼高岡、梧桐生矣、于彼朝陽、雅</small>	鳴矣、于彼高岡、梧桐生矣、于彼朝陽、雅 <small>鳴矣、于彼高岡、梧桐生矣、于彼朝陽、雅</small>	大人虎變、未占有字、經 <small>大人虎變、未占有字、經</small>	碩人侯侯、有力如虎、邛桓如虎如龍、如王奮厥武、如震如怒、進厥虎臣、闢如虺、大
行、前采 <small>行、前采</small>	行、前采 <small>行、前采</small>	大人虎變、未占有字、經 <small>大人虎變、未占有字、經</small>	碩人侯侯、有力如虎、邛桓如虎如龍、如王奮厥武、如震如怒、進厥虎臣、闢如虺、大
不出園、吾已矣夫、空 <small>不出園、吾已矣夫、空</small>	不出園、吾已矣夫、空 <small>不出園、吾已矣夫、空</small>	大人虎變、未占有字、經 <small>大人虎變、未占有字、經</small>	碩人侯侯、有力如虎、邛桓如虎如龍、如王奮厥武、如震如怒、進厥虎臣、闢如虺、大
衰、往者不可追、來者猶可追、微 <small>衰、往者不可追、來者猶可追、微</small>	衰、往者不可追、來者猶可追、微 <small>衰、往者不可追、來者猶可追、微</small>	大人虎變、未占有字、經 <small>大人虎變、未占有字、經</small>	碩人侯侯、有力如虎、邛桓如虎如龍、如王奮厥武、如震如怒、進厥虎臣、闢如虺、大
丑、公孫 <small>丑、公孫</small>	丑、公孫 <small>丑、公孫</small>	大人虎變、未占有字、經 <small>大人虎變、未占有字、經</small>	碩人侯侯、有力如虎、邛桓如虎如龍、如王奮厥武、如震如怒、進厥虎臣、闢如虺、大
南方火也、其帝炎帝、其佐朱朝、執衡而治、夏、其神爲炎、感、其獸爲朱鳥、其音徵、其日丙丁、	南方火也、其帝炎帝、其佐朱朝、執衡而治、夏、其神爲炎、感、其獸爲朱鳥、其音徵、其日丙丁、	大人虎變、未占有字、經 <small>大人虎變、未占有字、經</small>	碩人侯侯、有力如虎、邛桓如虎如龍、如王奮厥武、如震如怒、進厥虎臣、闢如虺、大

備考

一本表は、日月星辰、龍龜虎鳳、宮名等の、經史等に見はれし次第を見たと俱に、古の人の、是等の事物に思ひを寄せし様をも、併せて看取せむが爲に調製せり、
 一本表は、易經乃至淮南子に見ゆる、日月星辰、龍龜虎鳳、宮名等を、大抵網羅せし者なり、但し、重複するものは省きし者あり、今製表上の都合に因り、別ちて
 甲乙二表と爲し、中央宮、及び龍龜虎鳳四宮に關する者は、甲表に掲げ、二十八宿、十二宮名等の如きは、乙表に載す、
 一星名、及び龍龜虎鳳宮名、十二宮名等の、經史等に見はれし世代前後、本表に由りて、看者自ら概知すべし、今是等經史等の中、重複せる者、及び疑義の存する
 者に就きて、一二左に贅す、亦聊か看表者の參照に資せむとするの微意のみ、
 (甲表) 禮記曲禮、至孔子歿後、七十二之徒、共撰所聞、以爲此記、或錄舊禮之義、或錄二變禮所由、或錄記禮廢、或雜序得失、故編而錄之、以爲記
 也、十三經註疏

(乙表) 禮記月令、名曰月令者、以其記十二月政之所行也、本呂氏春秋十二月紀之首章也、以家禮好事抄合之、後人因題之、名曰禮記、言周公所
 作、案呂不韋、集諸儒所著、爲十二月紀十餘萬言、名爲呂氏春秋、篇首皆有月令、與此文同、是一證也、十三經註疏
 爾雅、正義序曰、元聖周公、始作爾雅、以觀政辨言、と、然れども、學者之を疑へり、或は以て先秦の遺書と爲すと云ふ、

一、本表、龍龜虎鳳に屬せざる者は、總て始らく中央宮の下に收む、
 一中央宮の條、詩經、東有啓明は、晨の明星、西有長庚は、昏の明星にして、共に太白星乃ち金星なり、
 又禮記、招搖星は、北斗第七瑞光星、即ち破軍星にして、爾雅、赤星は、流星なり、
 一龍龜虎鳳四宮の條、禮記、行、前朱雀而後玄武、左青龍而右白虎者、明軍象天文、而作陳法也、前南後北、左東右西、朱雀、玄武、青龍、白虎、
 四方宿名也、鄭註、畫此四獸於旌旗、以標左右前後之軍陳也、十三經註疏
 玄武龜也、龜有甲、能禦侮用也、十三經註疏 朱鳥朱雀也、淮南子天文訓疏 玄鸞孔雀、編建校儀疏 鸞、神鳥也、赤神之精、鳳凰之佐、色備五彩、鳴
 中五音、正鳳 鸞見則天下安寧、山海經 鸞衡曰、多赤色者鸞、多青色者鸞、治國記 鳳、神鳥也、說文 鳳爲火精、生於丹穴、非梧桐不棲、
 非竹實不食、非醴泉不飲、身備五色、鳴中五音、有道則見、飛則羣鳥從之、孔安國 師曠禽經、青鳳謂之鸞、赤鳳謂之鸞、白鳳謂之鸞、紫鳳謂之
 鸞、蓋鳳生於丹穴、鸞又鳳之赤者、故南方取象焉、漢書天文志註
 龍、鱗蟲之長、說文 龜、甲蟲之長、爾雅 虎、山獸之君、說文 鳳、羽蟲三百六十、鳳爲之長、大戴禮 何胤曰、如鳥之翔、如龜之毒、龍龜虎鸞、
 無能敵此四物、十三經註疏

經籍に見る辰曜四禽名目表 (甲)第十表

宮名	易	書	詩	春秋	禮記	論語	中庸	孟子	子	爾雅	淮南子
中	見龍在田、飛龍在天、經、時乘六龍以御天、象、龍蛇之蟄、以存身也、辭、龍、言、文、雲從龍、龍、言、文	日月星辰山龍華蟲作會、稷、稷	既見君子、爲龍光、雅、載見辟王、曰求厥章、龍旂陽陽、和鈴央央、頌、周公之孫、莊公之子、龍旂承祀、六轉耳耳、頌、武丁孫子、武王辟不、龍旂十乘、大禧是承、頌	有星字、招搖在星、急、如北辰居天、其、所、而、衆、星、共、進、退、有、之、政、度、左、右、有、局、各、司、其、局、一、	左青龍、	爲政以德、譬、如北辰居天、其、所、而、衆、星、共、進、退、有、之、政、度、左、右、有、局、各、司、其、局、一、	今其水、一、勺、之、多、及、其、不、調、龍、龜、魚、龍、生、焉、	至誠之、道、可、以、前、知、見、三、手、著、龜、動、乎、四、體、	周公相武王、滅、國者五十、驅、虎豹犀象而遠、之、天下大悅、	北極謂之、北辰、何、誠、謂之、率、謂之、牽、謂之、星、其、神、爲、黃、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、	中央土也、其帝、黃帝、其佐后土、執繩而制四方、其神爲、牛、其音、黃、龍、其、神、爲、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、
著	龍龜之蟄、以存身也、辭、龍、言、文、雲從龍、龍、言、文	官占、惟先、蔽志、昆命于元龜、鬼神、其依、龜策協從、大禹、其依、龜策協從、九江納錫大龜、禹、寧王遺我大寶龜、紹天明、即命、大	既見君子、爲龍光、雅、載見辟王、曰求厥章、龍旂陽陽、和鈴央央、頌、周公之孫、莊公之子、龍旂承祀、六轉耳耳、頌、武丁孫子、武王辟不、龍旂十乘、大禧是承、頌	左青龍、	爲政以德、譬、如北辰居天、其、所、而、衆、星、共、進、退、有、之、政、度、左、右、有、局、各、司、其、局、一、	今其水、一、勺、之、多、及、其、不、調、龍、龜、魚、龍、生、焉、	至誠之、道、可、以、前、知、見、三、手、著、龜、動、乎、四、體、	周公相武王、滅、國者五十、驅、虎豹犀象而遠、之、天下大悅、	北極謂之、北辰、何、誠、謂之、率、謂之、牽、謂之、星、其、神、爲、黃、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、	中央土也、其帝、黃帝、其佐后土、執繩而制四方、其神爲、牛、其音、黃、龍、其、神、爲、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、	中央土也、其帝、黃帝、其佐后土、執繩而制四方、其神爲、牛、其音、黃、龍、其、神、爲、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、
立	龍龜之蟄、以存身也、辭、龍、言、文、雲從龍、龍、言、文	官占、惟先、蔽志、昆命于元龜、鬼神、其依、龜策協從、大禹、其依、龜策協從、九江納錫大龜、禹、寧王遺我大寶龜、紹天明、即命、大	既見君子、爲龍光、雅、載見辟王、曰求厥章、龍旂陽陽、和鈴央央、頌、周公之孫、莊公之子、龍旂承祀、六轉耳耳、頌、武丁孫子、武王辟不、龍旂十乘、大禧是承、頌	左青龍、	爲政以德、譬、如北辰居天、其、所、而、衆、星、共、進、退、有、之、政、度、左、右、有、局、各、司、其、局、一、	今其水、一、勺、之、多、及、其、不、調、龍、龜、魚、龍、生、焉、	至誠之、道、可、以、前、知、見、三、手、著、龜、動、乎、四、體、	周公相武王、滅、國者五十、驅、虎豹犀象而遠、之、天下大悅、	北極謂之、北辰、何、誠、謂之、率、謂之、牽、謂之、星、其、神、爲、黃、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、	中央土也、其帝、黃帝、其佐后土、執繩而制四方、其神爲、牛、其音、黃、龍、其、神、爲、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、	中央土也、其帝、黃帝、其佐后土、執繩而制四方、其神爲、牛、其音、黃、龍、其、神、爲、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、
白	龍龜之蟄、以存身也、辭、龍、言、文、雲從龍、龍、言、文	官占、惟先、蔽志、昆命于元龜、鬼神、其依、龜策協從、大禹、其依、龜策協從、九江納錫大龜、禹、寧王遺我大寶龜、紹天明、即命、大	既見君子、爲龍光、雅、載見辟王、曰求厥章、龍旂陽陽、和鈴央央、頌、周公之孫、莊公之子、龍旂承祀、六轉耳耳、頌、武丁孫子、武王辟不、龍旂十乘、大禧是承、頌	左青龍、	爲政以德、譬、如北辰居天、其、所、而、衆、星、共、進、退、有、之、政、度、左、右、有、局、各、司、其、局、一、	今其水、一、勺、之、多、及、其、不、調、龍、龜、魚、龍、生、焉、	至誠之、道、可、以、前、知、見、三、手、著、龜、動、乎、四、體、	周公相武王、滅、國者五十、驅、虎豹犀象而遠、之、天下大悅、	北極謂之、北辰、何、誠、謂之、率、謂之、牽、謂之、星、其、神、爲、黃、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、	中央土也、其帝、黃帝、其佐后土、執繩而制四方、其神爲、牛、其音、黃、龍、其、神、爲、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、	中央土也、其帝、黃帝、其佐后土、執繩而制四方、其神爲、牛、其音、黃、龍、其、神、爲、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、
虎	龍龜之蟄、以存身也、辭、龍、言、文、雲從龍、龍、言、文	官占、惟先、蔽志、昆命于元龜、鬼神、其依、龜策協從、大禹、其依、龜策協從、九江納錫大龜、禹、寧王遺我大寶龜、紹天明、即命、大	既見君子、爲龍光、雅、載見辟王、曰求厥章、龍旂陽陽、和鈴央央、頌、周公之孫、莊公之子、龍旂承祀、六轉耳耳、頌、武丁孫子、武王辟不、龍旂十乘、大禧是承、頌	左青龍、	爲政以德、譬、如北辰居天、其、所、而、衆、星、共、進、退、有、之、政、度、左、右、有、局、各、司、其、局、一、	今其水、一、勺、之、多、及、其、不、調、龍、龜、魚、龍、生、焉、	至誠之、道、可、以、前、知、見、三、手、著、龜、動、乎、四、體、	周公相武王、滅、國者五十、驅、虎豹犀象而遠、之、天下大悅、	北極謂之、北辰、何、誠、謂之、率、謂之、牽、謂之、星、其、神、爲、黃、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、	中央土也、其帝、黃帝、其佐后土、執繩而制四方、其神爲、牛、其音、黃、龍、其、神、爲、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、	中央土也、其帝、黃帝、其佐后土、執繩而制四方、其神爲、牛、其音、黃、龍、其、神、爲、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、
朱	龍龜之蟄、以存身也、辭、龍、言、文、雲從龍、龍、言、文	官占、惟先、蔽志、昆命于元龜、鬼神、其依、龜策協從、大禹、其依、龜策協從、九江納錫大龜、禹、寧王遺我大寶龜、紹天明、即命、大	既見君子、爲龍光、雅、載見辟王、曰求厥章、龍旂陽陽、和鈴央央、頌、周公之孫、莊公之子、龍旂承祀、六轉耳耳、頌、武丁孫子、武王辟不、龍旂十乘、大禧是承、頌	左青龍、	爲政以德、譬、如北辰居天、其、所、而、衆、星、共、進、退、有、之、政、度、左、右、有、局、各、司、其、局、一、	今其水、一、勺、之、多、及、其、不、調、龍、龜、魚、龍、生、焉、	至誠之、道、可、以、前、知、見、三、手、著、龜、動、乎、四、體、	周公相武王、滅、國者五十、驅、虎豹犀象而遠、之、天下大悅、	北極謂之、北辰、何、誠、謂之、率、謂之、牽、謂之、星、其、神、爲、黃、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、	中央土也、其帝、黃帝、其佐后土、執繩而制四方、其神爲、牛、其音、黃、龍、其、神、爲、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、	中央土也、其帝、黃帝、其佐后土、執繩而制四方、其神爲、牛、其音、黃、龍、其、神、爲、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、
雀	龍龜之蟄、以存身也、辭、龍、言、文、雲從龍、龍、言、文	官占、惟先、蔽志、昆命于元龜、鬼神、其依、龜策協從、大禹、其依、龜策協從、九江納錫大龜、禹、寧王遺我大寶龜、紹天明、即命、大	既見君子、爲龍光、雅、載見辟王、曰求厥章、龍旂陽陽、和鈴央央、頌、周公之孫、莊公之子、龍旂承祀、六轉耳耳、頌、武丁孫子、武王辟不、龍旂十乘、大禧是承、頌	左青龍、	爲政以德、譬、如北辰居天、其、所、而、衆、星、共、進、退、有、之、政、度、左、右、有、局、各、司、其、局、一、	今其水、一、勺、之、多、及、其、不、調、龍、龜、魚、龍、生、焉、	至誠之、道、可、以、前、知、見、三、手、著、龜、動、乎、四、體、	周公相武王、滅、國者五十、驅、虎豹犀象而遠、之、天下大悅、	北極謂之、北辰、何、誠、謂之、率、謂之、牽、謂之、星、其、神、爲、黃、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、	中央土也、其帝、黃帝、其佐后土、執繩而制四方、其神爲、牛、其音、黃、龍、其、神、爲、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、	中央土也、其帝、黃帝、其佐后土、執繩而制四方、其神爲、牛、其音、黃、龍、其、神、爲、龍、其、音、宮、其、日、戊、己、

古代人の辰曜四禽に對する感想

(一)、辰曜及び四禽に對する古人感想の一斑と經藉に見る星名宮名

天文家の宇宙辰曜に對する感想は、上來粗々敘述する所の如し、今試に轉じて、古の人が、日月星辰に對しては、或は時節を料り、或は情懷を寄せ、又龍龜虎鳳の類に對しては、或は想像し、或は目撃して、其貌采性格を稱讚畏懼したる如き凡そ是等の類及び星名宮名等の經藉に見ゆる者を採録して以て左の甲乙二表を製し星名宮名の出典及び古の人の辰曜四禽に對する感想の一斑を概見するに便にす。

而も古の人の辰曜四禽等に對するや獨り之を感想詠懷せしに止まらず其象形を顯はして以て物品の裝飾に用ゐしこと亦由來久し乃ち古來凡そ鐘鼎弋戩量度の屬より泉刀璽印鏡鑑其他雜品及び衣服宮室瓦甃并に碑碣棺郭等の屬に至るまで飾るに辰曜四禽十二支等の象形を以てせし者極めて多きを以て見れば其人心に印象せし淵源深遠にして且牢固なるを知るべし。

(二)、辰曜四禽十二支等を以て裝飾せし物品表附載に就きて

次に別表を附載して以て、古來東洋人が、天上・地下・人圓・三界に互りし感想に因りて、如何に是等の物類を以て、廣汎なる事物の裝飾等に應用せし耶を徴するに便にす、蓋し古來、辰曜四禽十二支の類を以て裝飾せし物品固より多し、今前記各部屬の中に就きて、其一斑を徴する爲に、優秀にして最も珍らしき者、各々若干を擧ぐるのみ、

予天文彙考と俱に、金石四禽圖譜を撰せり、而るに昨大正十二年九月一日、大震災に罹り、挿圖並に寫真原版天文彙考と俱に一切烏有に歸せり、多少の材料家に藏する者無きにあらざるも、四禽圖譜は今復た再修せず、仍て其目次に由りて、姑らく別表を作り、附載して以て参考の一端と爲す。

附 四禽を四神と稱せし因

趙宋以來、好古の士意を博物界に致して古器物の探究採集に従事し、是に於て考古宋哲宗元祐七年西一〇九二年博古徽宗宣和一一九乃至二五年二圖録の撰あり、清代に至りては、上下交々益々尋討に勉め、其採擇亦漸く精し、是に於て朝

金石に見る辰曜四禽表 第十二表

品目	出典	品目	出典と所在
鐘鼎之屬 商雙册父乙卣 龍 周子孫卣 雙鳳	同 金 索	(二) 高麗 二十八宿鏡 龍龜蛇虎鳳 高麗時代墳墓より發掘 四神鏡 龍龜虎鳳 朝鮮開城附近古墳より發掘	東京帝室博物館 同
戈戟之屬 周龍虎節	同	(三) 日本 四神鏡 大和國北葛城郡馬見村大塚古墳傳御陵墓より發掘	同
量度之屬 漢啓封鏡 鏡形如龜	同	瓦甌之屬 漢甌 龍龜蛇虎鳳 漢四神瓦當 龍龜蛇虎鳳	石 索 大倉集古館
泉刀之屬 漢武帝白金三幣 龍幣幣幣 新王莽泉刀布 背北斗劍 同 背日月 北周錢 面雙雀 背三雀 古異錢 背龍鳳 背星官 同 背十二支	同 同 同 同 同 同 同	碑碣之屬 (一) 支那 漢李翁壺池五瑞圖 龍 漢武氏石室 龍虎 唐薛氏墓誌石 十二支 (二) 高麗 高勾麗古墳石室壁畫 龍龜蛇 高麗圓明國師石棺 雙鳥龍 高麗崔院石棺 龍龜虎鳳 花鳥	石 索 東京帝室博物館 同 東京帝國工科大学 東京帝室博物館 同
鏡鑑之屬 (一) 支那 漢日利大萬鏡 龍龜蛇 漢四神鏡 龍龜蛇 隋仙山鏡 龍龜蛇 唐二十八宿鏡 支龍龜蛇虎鳳十宿 唐四神鏡 龍龜蛇 唐四神鏡 龍龜蛇 唐四神鏡 龍龜蛇	同 同 同 同 同 同 同		同 同 同 同 同 同 同

清乾隆十四年一七四九年に西清古鑒の編輯あり、野に金索石索道光元年一八二二年の如き撰述起れり、而して是等の古器物の裝飾には、龍龜虎鳳四禽を用るし者亦尠なからず、

好古の士愛玩欣賞の餘、四禽を祝し呼びて四神と稱するに至りたり、蓋し神物四禽即ち四神禽の略言なり、而も亦此稱呼は、佛説に於て四禽を以て神物と爲せしに基づきしものにして、前記の書類に在りては、博古圖に漢四神鑑卷二十八 十八葉と記せし者嚆矢たり、但し是等の圖書類の外、支那の正史に在りては、四禽を稱して四神と謂ふは、余の寡聞なる、未だ嘗て見ざる所なり、

而も佛典にありては、直截に四禽を指して言ふ者にあらざるも、四神の語は往々見る所なり、

已能安住。四神足行。光明童子 四緣經と謂ひ、常隨順正斷。恒修四神足。守護國界主 陀羅尼經と謂ふが如き即ち是れなり。

我邦に在りては、元明帝和銅三年西七一〇年平城遷都の條に於て續日本記延暦十六年成 西七九七年平城の地勢を祝して、平城之地四禽叶圖と宣じ給ひし遷都の詔を載せし者、四禽の紀事史に見ゆる權輿なり、然れども未だ四神の稱を用るざるなり、

桓武帝延暦三年西七八四年平安奠都の條に至りて、神皇正統記興國元年西 一三四〇年に於て、むかし聖德太子蜂岡にのぼり給ひて、太秦いまの城を見めぐらして、四神相應の地なりと宣ひけるとぞ申傳へたる、と記せしもの、是れ我歴史に於て四神の名稱を見る始めなるべし。

五、十二支宮

(一)、支那に於ける十二支宮部別、干支等の配當

支那は又星天を元枋、姬警等十二支宮十二方面に分ち、是に由りて二十八宿、中外星辰を部別し、更に又七曜二十八禽を以て黃赤道に配當せり、而して十二支宮中壽星、大火、星紀、玄枋、姬警、降婁、大梁、鶉火、の名目は爾雅に顯れ、上天列宿・下十二支に應ずるの象は續漢書天文志後漢書之を記載すに見え、

黃赤道十二支宮二十八宿配當は佛說七曜攘災決及び明天志等之を評述せり、

抑も甲乙丙丁戊己庚申壬癸を天干とし、子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥を地支として、干支相配し以て歳日を記する者、蓋し陰陽五行の説に出づ、許慎の説文、劉熙の釋名、漢書五行志、其他漢の王充の論衡、明の郎瑛の七修類藹、清の趙翼の陔餘叢考の如き、古來論説も亦多し、而も其原因及び據證に至りては遂に亦適確ならず、

七修類藹天地類

夫十二支、固屬陰陽、皆於時位上見之、易卦取象亦然也、惟理義之存焉耳、如子爲陰極、幽潛隱晦、以鼠配之、鼠藏迹也、午爲陽極、顯明剛健、以馬配之、馬快行也、丑爲陰也、俯而慈愛生焉、以牛配之、牛有孺懷、未爲陽也、仰而秉禮行焉、以羊配之、羊有跪乳、寅

爲三陽、陽勝則暴、以虎配之、虎性暴也、申爲三陰、陰勝則黠、以猴配之、猴性黠也、日生東、而有西酉之雞、月生西、而有東卯之兔、此陰陽交感之義、故曰、卯酉爲日月之私門、今兔豕雉毛則成孕、雞合踏而無形、皆感而不交者也、故卯酉屬兔雞、辰巳、陽起而動作、龍爲盛、蛇次之、故龍蛇配焉、龍蛇、變化之物也、戌亥、陰斂而潛寂、狗司夜、猪鎮靜、故狗猪配焉、狗猪、持守之物也、私憶如此、未見出處、姑存於藹、
陔餘叢考卷三十四 (合十九之冊)

干支

顧寧人謂古人但以干支紀日其年月時則別有所紀按月令章句大撓探五行之精占斗綱所建乃作甲乙以名日謂之幹作子丑以名日謂之支支干相配以成六旬是干支本以紀日也

干支配五行

以干支配五行雖屬術家之學然其理甚微蓋古人通乎陰陽之故故以十干位五行之正而其中又有流行消息之理如日月疾徐有氣盈朔虛之不同故又制十二支以通其變此即河洛之精理也後世惟術家用之學者遂不復措意抑知三代以來如管子春以甲乙之日發政夏以丙丁之日發政國語晉文公乞食於五鹿野人與之塊舅犯曰十二年必得此土其以戊申午所以申土也左傳申叔儀乞糶登山呼庚癸庚西方主穀癸北方主水也月令其日甲乙其日丙丁淮南子甲乙寅卯木也丙丁巳午火也久以之協時令而參陰陽蓋非以干支配五行乃干支從五行出耳

而して甲乙丙丁等は、支那に於て太古より用ゐらる、乃ち

夏王は孔甲、癸二代、商王は太甲初二十七代皆十干を以て命名せり、

然るに十餘年前光緒二十五年明治三十二年殷の王都の故墟河南省安陽縣の西方五里の小屯也に於て、龜甲獸骨の占卜文字無慮數千片發掘せられ、考古家羅振玉の如きは、其一百餘字を明確に讀得て、明治四十三年を以て、殷商貞卜文字考を著せり、中に干支文字あり、是に於て殷商の時十干と俱に十二支の行はれしこと始めて分明に徴せられたり。

(二)、佛說十二支獸の輪廻遊行

佛典に在ては、十二支獸の出所頗る明瞭なり、

大集經虛空目分淨目品

東方海中有瑠璃山、其山有三窟、有二毒蛇住于第一窟、有一馬住于第二窟、有一羊住于第三窟、各皆修聲聞慈、又南海中有玻璃山、亦有三窟、有二獼猴住第一窟、有二雞住第二窟、有一犬住第三窟、亦各修聲聞慈、又西海中有銀山、又有三窟、有二猪住第一窟、有二鼠住第二窟、有二牛住第三窟、又北俱盧洲海中有金山、有三窟、有一獅子住第一窟、有二兔住第二窟、有二龍住第三窟、各修聲聞慈、是十二獸、常行闍浮提內、發深重願、一日一夜常令一獸遊行教化、餘十一獸安住修慈、周而復始、七月一日鼠初遊行、以聲聞乘教化鼠身衆生、令離惡業、勸修善事、如是次第至十三日、鼠復還行如是、乃至盡十二月至十二歲、亦復如是、

十二緣生祥瑞經

若復有人審諦觀察十二緣生、了達善惡愛喜得失、應畫轉輪圖寫分別、謂從無明乃至老死、月日分位次第羅剎鼠牛虎兔龍蛇馬羊猴雞犬豕十二相狀、本形轉輪、

(三)、支那・印度先覺者の鑿天附會

抑印度と云ひ、支那と云ひ、之を要するに、其先覺者、鑿天附會の教を張りし結果、後人をして長く此

陽考

星 (星 土)		星 (星 木)	
央	中	方	東
土		木	
黃		青	
宮		角	
己 (土)	戊	乙 (木)	甲
	宮 木 析	宮 火 大	宮 星
	宮 寅	宮 卯	宮
	宮 虎	宮 兔	宮
	箕 尾 心	房 氏 亢	角
	豹水 虎火 狐月	兔日 籍土 龍金	蛟木

備考

一本表は古來天文家備考等の稱道せし陰陽五行方位等の一斑、宿曜二十八禽黃道配付等を概観する爲に編製せり。
 一本表二十八宿七曜二十八禽黃道配付は天文環境に據る餘は一せず。

陰陽五行方位干支等の配當及び宿曜二十八禽黃道配付綜覽表 第十三表 (甲)

陽 太 (日)					陰 太 (月)					陽 (月)	陰 (日)																		
星 (星 土) 鎮		星 (星 木) 歲			星 (星 火) 惑		星 (星 金) 白 太			星 (星 水) 辰		星 五																	
央 中		方 東			方 南		方 西			方 北		位 方																	
土		木			火		金			水		行 五																	
黃		青			赤		白			黑		色 五																	
宮		角			徵		商			羽		音 五																	
己 (土) 戊		乙 (木) 甲			丁 (火) 丙		辛 (金) 庚			癸 (水) 壬		干 (行 十五)																	
宮 木 析		宮 火 大		宮 星 壽	宮 尾 鶉	宮 火 鶉	宮 首 鶉	宮 沈 實	宮 梁 大	宮 婁 降	宮 營 嫩	宮 枵 元	宮 紀 星	名 宮	十二支														
宮 寅		宮 卯		宮 辰	宮 巳	宮 午	宮 未	宮 申	宮 酉	宮 戌	宮 亥	宮 子	宮 丑	字用那支	二星														
宮 虎		宮 兔		宮 龍	宮 蛇	宮 馬	宮 羊	宮 猴	宮 雞	宮 犬	宮 豕	宮 鼠	宮 牛	字譯典佛	方天十														
箕	尾	心	房	氏	亢	角	軫	翼	張	星	柳	鬼	井	參	芻	畢	昴	胃	婁	奎	壁	室	危	虛	女	牛	宿八十二	黃道配付	
豹水	虎火	狐月	兔日	貉土	龍金	蛟木	蚓水	蛇火	鹿月	馬日	蹄土	羊金	犴木	猿水	猴火	鳥月	雞日	雉土	狗金	狼木	豕水	猪火	燕月	鼠日	蝮土	牛金	獬木	二十八禽	七曜

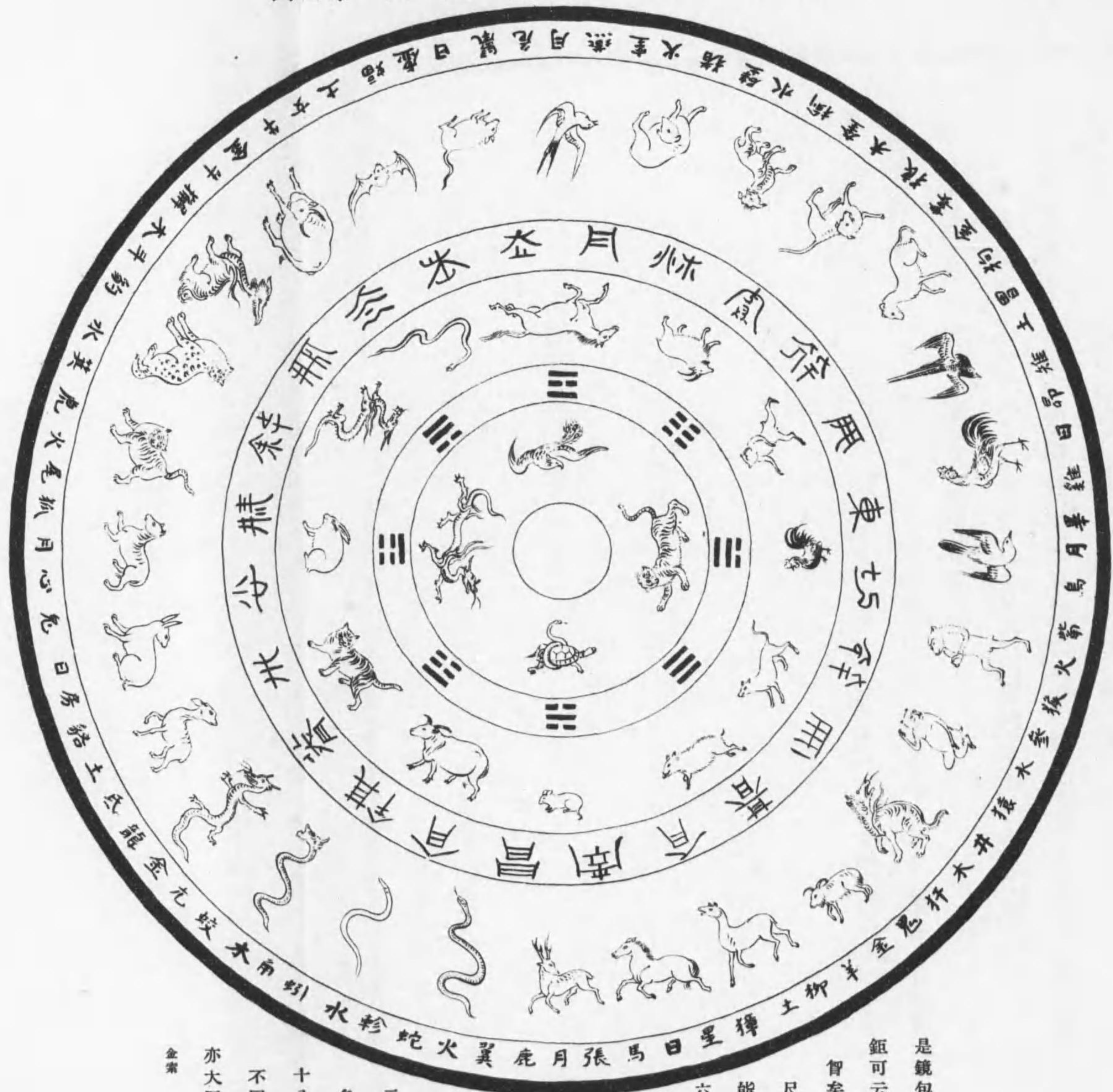
一、本表は爾雅に據る
備考

歲月名義表

第十四表(乙)

歲	名	歲	陽	月	陽	月	名
太歲在丑曰赤奮若	<small>陽氣奮迅萬物而起，無不若其性。</small>	太歲在甲曰闕逢		月在甲曰畢		正月爲陬	
太歲在子曰困敦	<small>混沌也，言萬物下，混沌於黃泉之下。</small>	太歲在乙曰旃蒙		月在乙曰橘		二月爲如	
太歲在亥曰大淵獻	<small>萬物於天深蓋藏也。</small>	太歲在丙曰柔兆		月在丙曰修		三月爲禰	
太歲在戌曰闕茂	<small>一作掩，掩言萬物皆蔽昌也。</small>	太歲在丁曰強圉		月在丁曰圉		四月爲余	
太歲在酉曰作噩	<small>一作鄂，言萬物落枝之貌。</small>	太歲在戊曰著雍		月在戊曰厲		五月爲皋	
太歲在申曰涇灘	<small>一作涇，言萬物貌，吐秀，倒垂之貌。</small>	太歲在己曰屠維		月在己曰則		六月爲且	
太歲在未曰協洽	<small>一作叶洽，言陰合，化生，萬物和。</small>	太歲在庚曰上章		月在庚曰窒		七月爲相	
太歲在午曰敦牂	<small>言萬物壯盛。</small>	太歲在辛曰重光		月在辛曰塞		八月爲壯	
太歲在巳曰大荒落	<small>一作芒，言萬物皆熾盛而大出，霽然落之。</small>	太歲在壬曰玄默		月在壬曰終		九月爲玄	
太歲在辰曰執徐	<small>伏蟄之物，皆敷舒而出，故云。</small>	太歲在癸曰昭陽		月在癸曰極		十月爲陽	
太歲在卯曰單閼	<small>言陽氣推萬物而起。</small>					十一月爲辜	
太歲在寅曰攝提格	<small>言起也，萬物承陽而起。</small>					十二月爲塗	

唐二十八宿鏡之圖第四



是鏡包括乾象制作甚
 鉅可云二十八宿羅心
 曾突面運建初尺一
 尺三寸三分書不
 能容故縮成八寸
 六分其第一層為
 四神次層為八
 卦三層為十二
 生肖四層俱
 符似字不能
 盡識五層二十
 八宿之象六層
 二十八宿星君之
 名與博古圖中二
 十八宿竟畫星文者
 不同其第四層篆文
 亦大同小異殊不可考

金案



穀中に投じて開明の氣運を硬塞するに至らしめたる者、誠に歎すべきなり、
 蓋し支那の天文家は、星座を州・國・官・宮・物類の象に取り、陰・陽・五行・干支・方位等に配し、諸の災・
 祥・吉・凶・禍・福・及び治・亂・興・亡等の事を以て星宿に引援附會し、其吉凶禍福、災祥方位等を謂ふ所、殆ど印度佛門の所説に匹似し、久うして其説
 愈々小細復雜に涉り、愈々物理定則に背馳するに至りたり、
 今陰陽五行五音五色方位干支、宿曜二十八禽黃道配付等を綜覽するが爲めに第十三表(甲)を、歲月名義を
 徴する爲に第十四表(乙)を掲げ、又二十八禽の象形を徴する爲に、唐二十八宿鏡第四圖を掲げて以て参照
 に供す。

六、星 圖

吳の陳卓の星圖

陳卓の星圖に關する管見

吳の陳卓が星圖は、三國の初、大帝の黃武二年西紀二二三年の頃の作に係り、巫咸・甘・石三家の星官を備列
 し、且二十八宿を石申の星官とせし者、然るに其製作は巫咸を距る殆んど二千年、石申・甘德共に戰國中葉の人

と假定すを距る亦五百有餘年の後ち、恰も印度天文に精しき大月氏人支謙が吳の太子傳となりて同く印度天文に明かなる印度人竺律炎と俱に吳國に在りし頃に成りしものなり、當時此の二氏が共同して摩登伽經即ち二十八宿經を翻譯せしことは、前段列宿獸帶編に記載する所の如し、

此の陳卓の圖録は、實に支那最初の星圖にして、其星官・名數、今に至る迄變易する所なく用ゐらるものなり、然れども今陳卓が星圖を以て天象に對照するに、大抵石申の星官は、視界重要な位置に在りて眼に入り易き者多く、甘德の星官之に次ぎ、巫咸の星官は、認め易き者極て少なく、數亦多からず、巫咸は、甘石等より約一千三百年前に在りて天象を窺ひし者なれば、理當さに視界重要な位置に在りて認め易き所の星を定め、甘石等は、其餘の星を定むること猶ほ西洋の星像の想定、獸帶を以て始まり、漸次其餘に及びし如くなるべきに、今然らずして之に反せり、

抑も陳卓は吳の太史令にして、巫咸・甘・石・三家を距る年代遼遠なるのみならず、其世局變遷を経る又幾何ぞ、彼れ三國分裂の時に當りて三家の星圖を聚集し特に二十八宿を并せて圖録する亦難事ならずや、豈太子傳として同廷に在る、印度歴象に精く二十八宿に明かなる支謙及び竺律炎等に謀りし所なからず耶、然らば初め陳卓は、二十八宿星象觀を支謙等より詳に傳られ、因りて周代戰國の甘・石・二氏のみならず、更に商の巫咸に遡り、乃ち此の三氏の名に假托して以て、自己理想の星圖を製作するの舉に出でしものに非ざる耶、蓋し恐らくは然らむ、

吳は四世六十年紀元二二二年にして亡び後ち五年、晋の太康六年、蜀人陳壽三國志を作る、三國志は天文志を立てず、列傳亦陳卓が傳を立てず、故に陳卓が事蹟の詳今得て攻ふ可からず、

後ち二百四十年宋の文帝元嘉十七年西四〇年太史令錢樂之、渾天銅儀を作り二十八宿中外星官を安じ、

白黒黃又朱黑白三色の珠を用ゐて、三家を殊別備列して以て、陳卓の數に合すと云ふ、

宋書天文志

安二十八宿中外官、以白・黒珠、及黃三色爲三家星、

晉書天文志

後武帝時、太司令陳卓、總甘・石・巫咸三家所著星圖、大凡二百八十三官、一千四百六十四星、以爲定規、

隋書天文志

三國時、吳太司令陳卓、始列甘氏・石氏・巫咸三家星官著於圖録、并注占贊、總有二百五十四官、一千二百八十三星、并二十八宿及輔官附座二百八十二星、總二百八十三官、一千五百六十五星、宋元嘉中、太司令錢樂之所鑄渾天銅儀、以朱・黒・白・三色用殊三家而合陳卓之數、

宋書天文志は錢樂之と同時代の天文家何承天の作に係る、然れども文簡にして、意未だ盡さざる所あり、晉隋二書天文志に至りては、記し得て頗る明晰なり、

晉隋二書天文志は唐の李淳風の獨作に係る、而して星官名數に異同あること右の如し、蓋し或は當時校正の疎漏なりしに因る乎、又前段黃裳の天文圖説に、二百八十三官一千五百六十五星と謂へる者は是れ隋書天文志に據りし者なるを知る、星官名數は、總て二百八十三官一千四百六十五星、是れを正數と爲す、

(一) 宋の雜准の星垣諸座異同論

宋の雜准の星垣諸座異同論、寔に善く陳卓が星圖を説明せり、今收めて以て本文と爲す、

古今圖書集成乾象典星辰部

論星垣諸坐異同

宋 雜 准

古今星象之書咸甘德石申所記司馬遷班固所註既已不同而張衡靈憲中外官常明者一百二十可名者三百二十爲星二千五百微星之數萬一千五百二十今往往失其傳三國時吳太史令陳卓始備列巫咸甘德石申三家之星總二百八十三坐爲一千四百六十四星後雖有知者如張子信李淳風之徒亦不敢妄注一二於其間矣且以三家星言之雖曰近日而隱遠日而顯然皆不離其次居中如穀遍入於列舍者紫微垣也散之於外如輻而翼於垣者二十八舍也起翼之初度盡軫之末度者太微垣也西離於氏東入於斗者天市垣也其他雜星皆在紫微垣之外分布於列舍之間在赤道內者謂之中官在赤道外者謂之外官星名既異去極不同入宿亦別或象天官或象庶物或主人君或主后妃或主太子或主外國其詳雖各載之本篇其大略可得而舉石申紫微垣東藩左驂樞上宰少宰上弼少弼上衛少衛上丞西藩右驂樞少尉上輔少輔上衛少衛少丞北極北斗輔星鈎陳天一太一天槍相天牢太陽守文昌天棊閣道共一十三坐計六十四星太微垣內屏五帝坐郎位常陳郎將共六坐計四十二星天市垣帝坐候宗正宗人宗星宦

者斗共八坐計四十一星列舍二十八宿並附官鈎鈴・神宮・墳墓・離宮・附耳・鉞・左右轄・共三十五坐計一百八十二星中官攝提大角天戈招搖七公梗河天紀貫索織女女牀右旗河鼓天津瓠瓜臘蛇王良附路天大將軍大陵天船天廩卷舌參旗五車天關五諸侯積水水位北河南河積薪三台軒轅少微共三十四坐計二百三十三星外官西咸騎官積卒東咸龜天江傅說魚杵天弁建龍九坎離珠壘塵陣敗臼北落師門羽林軍土司空天倉天困天苑玉井屏廁矢軍市野鷄老人狼弧矢天稷長沙南門庫樓平星共三十六坐計二百二十七星並用赤記甘德紫微垣四輔天皇大帝天柱女史柱史尙書陰德天牀內厨五帝坐・華蓋杠・六甲傳舍天厨扶筐三公天理勢內階策八穀共二十一坐計一百二星太微垣太子從官幸臣三公九卿內五諸侯謁者共七坐計一十五星天市垣斛市樓二坐計十星中官天田平道周鼎亢池帝席天乳漸臺輦道左旗敗瓜司危司非司祿車府人白杵土功吏造父雷電土公外屏右更軍南門左更積尸天阿積水月孺石天讒天街諸王天節天高天潢咸池司怪水府座旗四瀆闕丘天鑪耀酒旗內平靈臺明堂進賢共四十九坐計一百七十九星外官折威車騎・騎陣將軍・陣車日糠農丈人狗天雞狗國天田羅堰哭司命蓋屋泣霹靂雲雨八魁天淵鉄鎖天庾芻藁九州殊口天園九游軍井丈人子孫天社天狗外厨天記天廟東甌器府青丘天門共三十九坐計二百十五星並用墨記巫咸紫微垣大理御女三師天鈎共四坐計一十八星太微垣虎賁一星天市垣帛度屠肆列肆車肆共四坐計八星中官奚仲天廐天陰太尊長垣共五坐計二十四星外官陽門頓頑天輻從官鍵閉罰天籥天淵天桴十二諸國離瑜天壘城天錢天綱虛梁斧鉞天相軍門土司空共一十九坐計九十三星並用黃記其間又有名同而所記之色不同所記之色同而星數之多寡或異者兩三公各三星一在紫微垣外坐開陽之下黑記一

權星、史記天官書、權、軒、帳、前、大星、女、主、象、旁、小星、御、者、後、宮、屬、以、是、觀、之、則、難、推、所、謂、權、星、下、御、女、者、軒、帳、第、十、四、(即、ち、一、等、星、也、也、)

在太微垣之內黑。記兩土司空一在翼宿度內四星黃。記一在奎宿度內一星赤。記兩太子各一星一在太微垣之內黑。記一在紫微垣北極之下赤。記兩從官一在太微垣之內一星黑。記一在房宿度內二星黃。記兩天田一在角宿度內二星一在牛宿度內九星並黑。記兩積水各一星一在昴宿度內黑。記一在井宿度內赤。記兩御女一在權星之下一星赤。記一在紫微垣之內四星黃。記兩杵各三星一在箕宿度內赤。記一在危宿度內黑。記韓楚周秦鄭晉魏趙齊燕天市垣與十二諸國名同而所記之色不同其餘所不著者皆為無名之星自三國至國朝並遵用之皇祐所測與崇寧所測其間有分秒不同者並從崇寧為準

雜准事略 付魏了翁

右星垣諸座異同論、係魏了翁經外雜抄所載、了翁曰、雜准以進士提領造曆所演算曆書其所撰載如此余所收天文書雖不能無少異而大略則不異也余本有三家星歌及李淳風乾象賦余瑋爲之注甚詳密可愛此所述分三垣內外官而類之有條而不紊不可不記也

雜准開禧曆を演撰す

宋史卷八十二、律曆志、

開禧新曆議論始定、詔以戊辰年

開禧四年、改元嘉定元年

權附統天曆頒之、嘉定三年雜准言曆書差惑當改造、詔雜准演撰、王孝禮・劉孝榮・提督推算官生十有四人、日法用三萬五千四百四年、春曆成、無復敢言曆差者、於是開

西一、二〇〇年

禧曆附統天曆、行於世四十五年、

宋史新編卷一百六十七、儒林傳

魏了翁字華父、浦江人、登進士第、歷武學博士、開禧元年、召試學士院、嘉熙元年卒、上震悼、贈太師、

西一、二三七年

諡文靖、累贈秦國公、所著有鶴山集、九經要義、周易集義、易舉隅、周禮井田圖說、經史雜抄等書、

七、儀象

(一)、璿璣玉衡

璿璣玉衡、先儒の見解異同あり。今其二三を併掲すると共に歷代儀象の沿革を概叙せむ。

曰く璿璣玉衡は北極北斗なり。

星經曰、璿璣者謂北極星也、玉衡者謂斗九星也、玉衡第一星主徐州、第二星主益州、第三星主冀州、第四星主荊州、第五星主兗州、第六星主揚州、第七星主豫州、第八星主幽州、第九星主并州、璿璣玉衡占色、春青黃、夏赤黃、秋白黃、冬黑黃、此是常明、不如此者、所向國有兵殃起、

清曰斗七星、左輔右弼各一星、計九星、

曰く璿璣玉衡は、北斗七星なり。

史記天官書

北斗七星、所謂璇璣玉衡、以齊七政、杓携龍角、衡殷南斗、魁枕參首、用昏建者杓、杓自華以西南、夜半建者衡、衡殷中州河濟之間、平且建者魁、魁海岱以東北也、斗爲帝車運于中央、臨制四鄉、分陰陽、建四時、均五行、移節度、定諸紀、皆繫於斗、

宋書、卷二十三、天文一

夫璣玉貴美之名、璣衡詳細之目、所以先儒以爲北斗七星、天綱運轉、聖人仰觀俯察、以審時變焉、

舜典

帝曰、格、汝舜、詢、事考言、乃言底可績三載、汝陟帝位、舜讓于德弗嗣、正月上日、受終于文祖、在璣璣玉衡、以齊七政、肆類于上帝、覲于六宗、望于山川、徧于群神、輯五瑞、既月、乃日親四岳群牧、班瑞于群后、歲二月、東巡守至岱宗、柴望秩于山川、肆覲東后、協時月正日、同律度量衡、修五禮、五玉、三帛、二生、一死、贊、如五器、卒乃復、五月、南巡守至于南岳、如岱禮、八月、西巡守至西岳、如初、十有一月、朔巡守至北岳、如西禮、

尙書欄外書卷一 佐藤一齋著

璣璣玉衡、古今注家多以渾天儀當之、此解不能無疑也、唐虞簡質、縱令有之、豈亦有璣玉爲飾極工盡美、如今西洋製作測器者哉、以愚揆之、渾儀蓋創於西漢、楊雄答人問渾天曰、落下闔營之、鮮于妄人度之、耿中丞象之、是其創於漢代者可證焉、史記天官書云、北斗七星、所謂璣璣玉衡以齊七政、晉志魁四星璣璣、杓三星玉衡、則璣璣玉衡、明明是北斗矣、凡星名多取象於物、或有就二星而分三名者、如北斗是七星總名也、魁之爲璣璣、杓之爲玉衡、則其子名也、史記有明文可證、固不可動矣、抑又意君臣各有職掌、儀器測量則義和所掌也、舜何以親在察之、以代曆官之職邪、且於上下文勢、亦爲不相接、前曰受終于文祖、後曰肆類于上帝、而中間挿入舜在璣璣玉衡二句、恐不成文理、因考之、舜既受終于文祖、則宜遵天意以爲政也、今在璣璣玉衡、蓋審察斗柄所建、以爲其方之政、猶曰天意也、故次之曰肆類于上帝、如下文四時巡狩、亦七星所建之政事也、歲二月斗建卯、卯東方也、故東巡以應其方、五月斗建午、午南方也、故南巡以應其方、八月斗建酉、酉西方、十一月斗建子、子北方、皆應其方、因以爲其政、是則在璣璣玉衡以齊七政之實事、不可違越者矣、

其曰七政者、尙書大傳曰、春、秋、冬、夏、天文、地理、人道、所以爲政也、案春夏秋冬、即四時巡狩之類是也、天文、命義和掌曆象、地理、命禹爲司空、人道、命契敷五教、凡大小政事、大要不出於此七者、故帝王仰觀七星、因以齊七政、無非天意也、

說苑卷十八

辨物 古者聖王既臨天下、必變四時定律歷、考天文揆時變、書曰、在璣璣玉衡以齊七政、璣璣謂北辰勾陳星也、以其魁杓之所指、二十八宿爲吉凶禍福、天文列舍盈縮之占、各以類爲驗、夫占變之道二而已矣、二者陰陽之數也、故易曰、一陰一陽之謂道、道也者物之動莫不由道也、是故發於一、成於二、備於三、周於四、行於五、是故玄象著明莫大於日月、察變之動莫著於五星、天之五星運氣於五行、其初猶發於陰陽、而化極萬一千五百二十、所謂二十八星者、東方、曰角亢氐房心尾箕、北方、曰斗牛須女虛危室東壁、西方、曰奎婁胃昂畢觜參、南方、曰東井鬼柳七星張翼轸、所謂宿者日月五星之所宿也、其在宿運外內者以宮名別其根莖、皆發於地而華形於天、所謂五星者、一曰歲星、二曰熒惑、三曰鎮星、四曰太白、五曰辰星、機槍甚字句始柱矢蚩尤之旗、皆五星盈縮之所生也、五星之所犯各以金木水火土爲占、春秋冬夏伏見有時、失其常、離其時則爲變異、得其時居其常是謂吉祥、

清、案するに、辰勾陳樞四字、斗七の誤也、魁北斗の第一星也、杓北斗の第七星也、○北辰は北極星即ち樞星にして、勾陳星座四の第一星也(論語、爲政第北辰、注、北辰、北極、天之樞也)○宮名、東宮蒼龍、西宮白虎、北宮玄武、南宮朱雀也、

古者有主四時者、主春者張、昏而中、可以種穀、上告于天子下布之民、主夏者大火、昏而中、可以種黍、上告于天子下布之民、主秋者虛、昏而中、可以種麥、上告于天子下布之民、主冬者昴、昏而中、可以斬伐田獵蓋藏、上告于天子下布之民、故天子南面視四星之中、知民之緩急、急則不賦籍不舉力役、書曰敬授民時、詩曰物其有矣、維其時矣、物之所以有而不絕者、以其動之時也、

曰く璣璣玉衡は、測驗の器なり。

宋書、卷二十三、天文一

王蕃言、虞書稱、在璇璣玉衡以齊七政、則今渾天儀日月五星是也、鄭玄說動運爲機、持正爲衡、皆以玉爲之、視其行度、觀受禪是非也、渾儀義和氏之舊器、歷代相傳、謂之璣衡、其由來有原統矣、穿鑿之徒、不解機衡之意、見有七政之言、因以爲北斗七星、構造虛文、託之讖緯、史遷班固猶尙惑之、鄭玄有瞻雅高遠之才、沈靜精妙之思、超然獨見、改正其說、聖人復出不易斯言矣、蕃之所云如此、夫候審七曜、當以運行爲體、設器擬象、焉得定其盈縮、推斯而言、未爲通論、

元史、志卷第一、天文一
司天之說尙矣、易曰、天垂象見吉凶、聖人象之、又曰、觀乎天文以察時變、自古有國家者、未有不致謹於斯者也、是故堯命羲和曆象日月星辰、舜在璇璣玉衡以齊七政、天文於是有測驗之器焉、

付七 政

七政を以て日月五星と爲せし説亦多し。

宋黃裳天文圖説

五行之精、木曰歲星、火曰熒惑、土曰填星、金曰太白、水曰辰星、併日月而謂之七政、皆麗于天、天行速、七政行遲、遲爲速所帶、故與天俱東西入也、五星輔佐日月、幹旋五氣、如大官分職而治、號令天下、利害安危由斯而出、

元史卷五十三

夫七政、運行於天、進退自有常度、苟原始要終、候驗周匝、則象數昭著、有不容隱者、

明史卷二十五、天文

兩儀、兩儀、楚詞言、圓則九重、孰營度之、渾天家言、天包地如卵裏黃、則天有九重、地爲渾天、古人已言之矣、

七政、七政、日月五星、各有一重天、其天皆不與地同心、故其距地有高卑之不同、其最高卑之數、皆以地半徑、準之太陽最距地、南

京觀象臺、設渾天儀簡儀圭表、以窺測七政行度、

(二) 渾天儀 渾儀 渾象

又渾天儀を以て璣衡に當て儀象を謂ふ者亦多し。而して宋遼金三志尤も簡明なり。

宋史新編卷十二天文志上

璣璣玉衡、史謂起於帝嚳、或謂作於宓戲、又謂羲和舊器、非舜創爲也、漢落下闈造太初曆、用渾儀、馬融謂、即古之璣衡、宋王蕃之論亦云、渾儀之制、置天架地平、以定天體、爲四游儀、以綴赤道者璣也、置望筒橫於游儀中、以窺七曜之行、而知其躔離之次者衡也、若六合儀三辰儀與四游儀並列爲三重者、唐李淳風所作、而黃道儀者一行所增也、如張衡祖洛下闈、耿壽昌之法、別爲渾象、實諸密室、用漏水轉之以合璣璣、所加星度、則渾儀之外、又有渾象、唐李淳風梁令瓚祖之、始與渾儀並用、太平興國中張思訓創作以獻、太宗召工造於禁中、踰年而成、詔置文明殿東鼓樓下、其制起樓高丈餘、機隱於內、規天矩地、下設地輪地足、又爲橫輪側輪斜輪、定身關中關小關天柱、七直神左搖鈴右扣鐘、中擊鼓以定刻數、每一晝夜一周而復始、又以木爲十二神、各直一時、至其時、則自執辰牌、循環而出、隨刻數、以定晝夜長短、上有天頂天牙天關天指天抱天東天條、布三百六十五度、爲日月五星紫微宮、別宿斗建黃赤道、以日行度、定寒暑進退、開元遺法運轉以水、至冬凝凍遲滯、遂爲疎略、寒暑無準、今代以水銀、則無差矣、又舊法日月晝夜行度皆人所運、新制成於自然、尤精妙、以思訓爲司天渾儀丞、臣嘗歷考古今儀象之法、虞書所謂璣璣玉衡、唯鄭康成祖記其法、至落下闈製圓儀、賈逵又加黃道、其詳皆不存于書、其後張衡爲銅儀、於密室中以水轉之、蓋所謂渾象、非古之璣衡也、吳孫氏時、王蕃陸續皆嘗爲儀及象、其說以謂舊以二分爲一度、而思星度稠概、張衡改用四分、而復推重難運、故蕃以三分爲度、周丈有九寸五分之二、而具黃赤道焉、

遼史卷四十三歷象志中

象 孟子有言、天之高也、星辰之遠也、苟求其故、千歲之日至可坐而致、甚哉聖人之用_レ心、可謂廣大精微至矣盡矣、日有_二晷景、月有_二明魄、斗有_二建除、星有_二昏旦、觀_二天之變、而制_レ器以候_レ之、八尺之表、六尺之簡、百刻之漏、日月星辰、示_二諸掌上、運行已察、度分既審、於是像_二天圓、以顯_二運行、置_二地權、以驗_二出入、渾象是作_二天道之常、尋尺之中、可以俯視_二陶唐之象、是矣、設_二儀以明_二度分、管_二一衡、以正_二辰極、渾儀是作_二天文之變、六合之表、可以仰觀_二有虞之璣、是矣、體莫_レ固_二於金、用莫_レ利_二於水、範_二金走_二水、不出_レ戶而知_二天道、此聖人之所以爲_レ聖也、歷代儀象表漏、各具_二于志、太宗大同元年、得_二晉歷象刻漏渾象、後唐清泰二年、已稱_二損折不可_レ施用、其至_二中京者、概可_レ知矣、古之鍊銅、黑黃白青之氣盡、然後用_レ之、故可_レ施_二久遠、唐沙門一行鑄_二渾天儀、時稱_二精妙、未_レ幾銅鐵漸澁、不能_レ自轉、置_二不復用、金質不_レ精、水性不_レ行、況移_二之_二沍寒之地乎、

金史卷二十一 歷志下

渾象 古之言_レ天者有三家、一曰蓋天、二曰宣夜、三日渾天、漢靈帝時、蔡邕於_二朔方_一上書、言、宣夜之學、絕無_レ師法、周髀術數俱存、考_二驗天狀、多_レ所_二遺失、惟渾天、爲_レ近_二最得_二其情、近世太史候臺銅儀是也、立_二八尺體圓_一而具_二天地之形、以正_二黃道赤道之表裏、以行_二日月之度數、步_二五緯之遲速、察_二氣候之推遷、精微深妙、百代所_レ不可_レ廢也、然傳歷久遠、製造者衆、測候占察、互有_二得失、張衡之制、謂_二之靈憲、史失_二其傳、

(三) 歷代儀象の沿革

璿璣玉衡及び儀象に關する諸家の見解大約前段に記載する所の如し、今歷代の儀象に就きて概叙せむ、璿璣玉衡・儀象の權輿たり、然れども三代に用ゐられず、周禮・圭表ありて璣衡なし、其制遂に攷ふべからず、

新唐書卷三十一、天文志、

周禮、無所謂璿璣玉衡者、豈其不用於三代邪、抑亦法制遂亡而不可復得邪、不然、二物者、莫知其爲何器也、

周禮、土圭正日景以求地中、有以見日行黃道之驗也、暨于周末此器乃亡、

西漢以來儀象の制作亦多し、而して明史天文志_{卷二}云ふ、大抵以_二六合・三辰・四游重環_一湊合者、謂_二之渾天儀、以_二實體圓球、繪黃赤經緯度、或綴以_二星宿者、謂_二之渾天象、と、今其制作天文志に散見する者、年代を次第して表記すれば則ち、大抵左の如し、亦以て其沿革の梗概を知るに足らむ乎、

西漢 第一、

東漢 第二、

吳 第三、

宋 第四、

後魏 第五、

唐 第六、

宋 第七、

南宋 第八、

元 第九、

明 第十、

西漢

(一) 太初元年西紀前一〇四年の頃、落下閔・渾儀を作る、其詳書に存せず、

史記評林卷二十六、歷書第四、

至今上即位、招致方士唐都、分其天部、而落下閔運算轉歷、然後日辰之度與夏正同、乃改元更官號、封太山、

史記評林卷一百三十、

太史公自序、遷爲太史令、五年而當太初元年、十一月甲子朔旦冬至、天歷始改、

元史第十三、天文一

古之爲其法者三家、曰周髀、曰宣夜、曰渾天、周髀宣夜先絕、而渾天之學、至秦亦無傳、漢洛下閔始得其術、作渾儀以測天、厥後歷世遞相沿襲、其有得有失、則由乎其人智術之淺深、未易遽數也、

宋史新編卷四十八、天文一、

臣嘗歷考古今儀象之法、虞書所謂璿璣玉衡、唯鄭康成粗記其法、至洛下閔製圓儀、賈逵又加黃道、其詳皆不存于書、

東漢

(二) 永初延光西紀一〇七至一二五年の間、張衡銅儀を造り、四分を以て一度と爲す、凡そ周一丈四尺六寸、密室中に於て水を以て之を轉ず、蓋し所謂渾象なり、晉の義熙十四年西紀四一八年宋の高祖長安を平らげ、衡の舊器を得たり、

後ち亂に遇ひ堙滅す、

宋書卷二十三、天文一、

古舊渾象、以二分爲一度、凡周七尺三寸半分、張衡改制、以四分爲一度、凡周一丈四尺六寸、張衡爲太史令乃鑄銅制範、衡傳云、其作渾天儀、考步陰陽、最爲詳密、楊雄法言云或人問渾天於雄、雄曰、落下閔營之單于妄入度之、耽中丞象之、以此而推、則西漢長安已有其器矣、將由喪亂亡失、故衡復鑄之乎、王蕃又記古渾儀尺度并張衡改制之文、則知此器非衡始造明矣、衡所造渾儀、傳至魏晉、中華覆敗沈沒戎虜、晉安帝義熙十四年宋高祖平長安、得衡舊器、

隋書卷十九、天文上、

後漢張衡爲太史令、鑄渾天儀、總序經星、謂之靈憲、而衡所鑄之圖、遇亂堙滅、星官名數、今亦不存、

宋史卷四十八、天文一、

張衡爲銅儀、於密室中、以水轉之、蓋所謂渾象、非古之璣衡也、

吳

(三) 黃武嘉禾西紀二三二至二三六年の間、王蕃陸續皆渾儀、及び渾象を造る、其説に謂へらく、舊二分を以て一度と爲す、而して星度調概を思ふ、張衡改めて四分を用ふ、而も復た推重運し難し、故に蕃三分を以て度と爲す、周一丈有九寸五分寸の三、而して黃赤道を具ふ、馬績の説に謂へらく、天形鳥卵の小しく楕なるが如し、而して黃赤道、短長相害す、應法する能はずと、蓋し當時の智巧、未だ黃道儀制作の法を得る能はざるなり、

宋書第二十三、天文一、
 王蕃者廬江人、吳時爲中常侍、善術數、傳劉洪乾象曆、依乾象法而制渾儀、立論考度、蕃以古制局小星辰稠概、衡器傷大難可轉移、更制渾象、以三分爲一度、凡周天一丈九寸五分寸之三也、
 宋史卷四十八、天文一、
 吳孫氏時、王蕃・陸績・皆嘗爲儀及象、其說以謂、舊以二分爲一度、而思星辰稠概、張衡改用四分、而復推重難運、故蕃以三分爲度、周丈有九寸五分寸之三、而具黃赤道焉、馬續之說以、天形如鳥卵之小橢、而黃赤道短長相害、不能應法、

宋

(四) 元嘉十三年^{西四三}錢樂之銅を鑄て渾儀を造る、徑六尺八分少、周一丈八尺二寸六分少、地・天内に在り、黃赤二道・南北二極規・二十八宿・北斗・極星を立て、五分を一度と爲し、日月五星を黃道の上に置き、漏刻を置立し、水を以て儀を轉じ、昏明中星、天と相應ず、

宋書卷二十三、天文一、
 文帝元嘉十三年、詔太史令錢樂之更鑄渾儀、徑六尺八分少、周一丈八尺二寸六分少、地在天內、立黃赤二道・南北二極之規・二十八宿・北斗・極星、五分爲一度、置日月五星於黃道之上、置立漏刻、以水轉儀、昏明・中星、與天相應、
 隋書卷十九、天文上、
 宋文帝以元嘉十三年、詔太史更造渾儀、太史令錢樂之、采案舊說、采效儀象、鑄銅爲之、五分爲一度、經六尺八分少、周一丈八尺二寸六分少、地在天內不動、立黃赤二道之規、南北二極之規、布列二十八宿北斗極星、置日月五星於黃道上、爲之杠軸、以象天運、昏明中星、與天相符、梁末置於文德殿前、

(五) 元嘉十七年、又小渾天を造る、二分を以て一度と爲し、徑二尺二寸、周六尺六寸、二十八宿・中外官、經星總て二百八十三官、一千四百六十四星を安置し、白黑黃(又白青黃)三色の珠を用ゐて、殷商の巫成と、戰國の齊の甘德・魏の石申と、三家を殊別し、日月五星・悉く黃道に居る、
 右錢樂之造る所の渾儀、隋の開皇九年^{西五八}高祖陳を平らげし後ち、皆長安に入る、大業の初、^{西六〇}煬帝之を東都の觀象殿に移す、

宋書卷二十三、天文一、
 十七年、又作小渾天、徑二尺二寸、周六尺六寸、以二分爲一度、安二十八宿中外官、以白黑珠及黃三色、爲三家星、日月五星悉居黃道、
 隋書卷十九、天文上、
 到元嘉十七年、又作小渾天、二分爲一度、徑二尺二寸、周六尺六寸、安二十八宿、中外官星備足、以白青黃三色珠、爲三家星、其日月五星悉居黃道、亦象天運、而地在其中、宋元嘉所造儀象器、開皇九年高祖平陳後、並入長安、大業初移於東都觀象殿、

後 魏

(六) 天平武定^{西五三}の間、南陽の孔定銅儀を製す、雙規あり、子午を正して以て天に象り、儀の中を判ちて以て地に象る、特規あり、天腹を斜絡して以て赤道南北を候ひ、幹を植て以て二極に法つとる、其幹中を乃ち遊規窺管^{望遠鏡}と爲す、

宋史卷四十八、天文一、
劉曜時、南陽孔定製銅儀、有雙規、正規距子午以象天、有橫規、判儀之中以象地、有特規、斜絡天腹、以候赤道南北、植幹以法二極、其中乃爲游規窺管、

(七)、晁崇・斛蘭皆嘗て鐵儀を造る、其規六あり、四、常定以て地に象り、一、赤道に象り、一、二極に象る、乃ち是れ定が所謂雙規なる者にして、其制大抵定が法に同じ、唯だ南北柱曲して雙規の下に抱き、縦衡水平あり銀を以て交錯し、八尺の管を以て星度を窺ふ者、小しく舊法を變ずるのみ、而して皆黃道あるを言はず、疑らくは、其れ傳を失するなり、

周の武帝齊を平らげ、晁崇造る所の器を得、隋の文帝開皇三年西五八三年新都初めて成り、諸れを觀臺の上に置き、後ち唐又收めて之を用ふ、永徽西六五〇年頃中李淳風觀臺に於て此の渾儀を見る、而して宋の至道西九九六年頃中所鑄渾儀の如きも亦、多く斛蘭・晁崇の法に因る、蘭・崇が器、世に傳ふ亦久し、

宋史卷四十八、天文一、
晁崇・斛蘭皆嘗て鐵儀、其規有六、四常定以象地、一象赤道、其二象二極、乃是定所謂雙規者也、其制與定法大同、唯南北柱曲抱雙規下、有縱衡水平、以銀錯星度、小變舊法、而不言有黃道、疑其失傳、
隋書卷十九、天文上、
史臣於觀臺訪渾儀、見元魏太中令晁崇所造者、以鐵爲之、其規有六、其外四規常定、一象地形、二象赤道、其餘象二極、其內二規可以運轉用合八尺之管以窺星度、周武帝平齊所得、隋開皇三年新都初成、以置諸觀臺之上、大唐因而用焉、

唐

(八)、貞觀七年西六三四年李淳風銅を鑄て圓儀を造る、表裏三重、下・準基に據る、狀十字の如し、末・鼈足を樹て以て四表に張る、一を六合儀と曰ふ、天經雙規・金渾緯規・金常規あり、四極の内に相結ぶ、二十八宿を列し、一日十二辰、經緯三百六十五度、二を三辰儀と曰ふ、圓徑八尺、璿璣規・月游規・列宿距度・七曜行所あり、六合の内に轉ず、三を四游儀と曰ふ、玄樞を軸と爲し、以て玉衡游筭望遠鏡を連結して矩規を貫約す、又玄極、北・北辰を樹て、南・地軸を短し、内に旁轉す、玉衡・玄樞の間に在りて南北游仰、以て天の辰宿を觀じ、下・以て器の晷度を識る、太宗善と稱し、凝暉閣に置く、後ち用る難し、其法亦亡ぶ、

新唐書卷三十一、天文志、
貞觀初淳風上言、漢落下闔作渾儀、其後賈逵張衡亦各有之、而推驗七曜並循赤道、按冬至極南、夏至極北、而赤道常定于中國、無南北之異、蓋渾儀無黃道久矣、太宗異其說、因詔爲之、至七年儀成、表裏三重、下據準基、狀如十字、末樹鼈足以張四表、一日、六合儀、有天經雙規、金渾緯規、金常規、相結于四極之内、列二十八宿、一日十二辰、經緯三百六十五度、二日、三辰儀、圓徑八尺、有璿璣規、月游規、列宿距度、七曜行所、轉于六合之内、三日、四游儀、玄樞爲軸、以連結玉衡游筭、而貫約矩規、又玄極、北樹北辰、南矩地軸、旁轉于内、玉衡在玄樞之間、而南北游仰以觀天之辰宿、下以識器之晷度、皆用銅、帝稱善、置于凝暉閣用之、測候閣在禁中、其後遂亡、

宋史卷四十八、天文一、
唐李淳風爲圓儀、三重、其外日六合、有天經雙規、金渾緯規、金常規、次日三辰、轉於六合之内、圓徑八尺、有璿璣規、月游規、所

謂瓊璣者、黃赤道屬焉、又次曰四游、南北爲天樞、中爲游箭、可以升降游轉、別爲月道、傍列二百四十九交、以攜月游、一行以爲難用、而其法亦亡、

(九)、開元十一年西七二三年一行銅鐵を鑄て、黃道儀、並に渾天儀を造る、初め率府兵曹梁令瓚、木を以て游儀を造り、淳風の法に因りて稍新意を附す、一行之を是とし、玄宗に奏して曰く、令瓚所爲の黃道游儀、日道月交、皆自然に推歩に契合す、請ふ更に鑄るに銅鐵を以てせんと、詔して一行と得失を襍校せしむ、此に至りて儀成る、玄宗之を嘉し、自ら之れが銘を爲る、

宋史卷四十八、天文一、

率府兵曹梁令瓚、更以木爲游儀、因淳風之法而稍附新意、詔與一行襍校得失、改鑄銅儀、古今稱其詳確、

新唐書卷三十一、天文志、

率府兵曹參軍梁令瓚、以木爲游儀、一行是之乃奏、黃道游儀、古有其術而無其器、昔人潛思皆未能得、今令瓚所爲日道月交、皆自然契合于推步、尤要、請更鑄以銅鐵、十一年儀成、一行又曰、靈臺鐵儀、後魏斛蘭所作、規制朴略、不足以稽天象授人時、李淳風黃道儀、法頗難術、遂寢廢、臣更造游儀、使黃道運行以追列舍之變、因二分之一中立黃道、交于奎軫之間、二至陟降各二十四度、黃道內施白道月環、用究陰陽臍臑、動合天運、簡而易、從可以制器垂象、永傳不朽、于是玄宗嘉之、自爲之銘、高僧傳卷五、唐中嶽嵩陽寺一行傳、

釋一行、俗姓張、鉅鹿人也、本名遂、睿宗玄宗並請入內集賢院、尋詔住興唐寺、所翻之經、遂著疏七卷、又攝調伏藏六十卷、釋氏系錄一卷、開元大衍曆五十二卷、其曆編入唐書律曆志、以爲不刊之典、又造游儀黃赤二道、以鐵成規、於院製作、

唐書卷三十一、天文志、
又詔一行與令瓚等、更鑄渾天銅儀、圓天之象、具列宿赤道及周天度數、注水激輪、令其自轉、一晝夜而天運周、置于武成殿前以示百官、無幾而銅鐵漸澁、不能自轉、遂藏於集賢院、

宋

(十)、又一行に詔して、令瓚等と更に渾天銅儀を鑄せしむ、圓天之象、列宿、赤道、及び周天度數を具へ、水を注ぎて輪を激し、其れをして自轉せしめ、一晝夜にして天・運周す、武成殿前に置きて以て百官に示す、幾ばくもなくして銅鐵漸く澁り、自轉する能はず、遂に集賢院に藏す、

(十一)、至道西九九六年の頃中渾天儀を承天監に鑄る、多く後魏の斛蘭・晁崇の法に因る、

(十二)、皇祐西一〇五〇年の頃中改めて銅儀を天文院に鑄る、唐の令瓚・一行の論を用ゐて去取す、交々失得あり、

(十三)、元祐西一〇九〇年の頃中蘇頌更作する者、上・渾儀を竝き、中・渾象を設け、旁に昏曉更籌を設け、水を以て之を運し、三器・一機、躔度に膺合し、最も奇巧と爲す、

(十四)、宣和西一一二〇年の頃中又嘗て之を更作す、右宋所造の器、悉く金に歸し、後ち元之を傳ふ、

宋史卷四十八、天文一、
至道中初鑄渾天儀于承天監、多因斛蘭屍崇之法、
皇祐中改鑄銅儀于天文院、姑用令瓚一行之論、而去取交有失得、
元祐間蘇頌更作者、上真渾儀、中設渾象、旁設昏曉更籌、激水以連之、三器一機昭合躔度、最為奇效、
宣和間又嘗更作之、而此五儀者悉歸于金、

南宋

(十五) 紹興十四年^{西一〇四}宰臣秦檜に命じ提舉して渾儀を鑄造せしむ、内侍邵諤其事を領し、久うして儀成る、後ち鐘鼓院に置く、舊制望筭^{望遠鏡}の旁に白道儀あり、以て月行を考ふ、熙寧^{西一〇七}中沈括無益と爲してより之を去り、南渡の後ち更に造る、而れども亦た焉れを設けず、

宋史卷四十八、天文一、
至紹興十四年、乃命宰臣秦檜提舉鑄渾儀、而以內侍邵諤領其事、久而儀成、後在鐘鼓院者是也、舊制有白道儀、以考月考、在望筭之旁、自熙寧沈括以爲無益而去之、南渡更造亦不復設焉、

元

(十六) 至元十六年^{西一三二}郭守敬簡儀、仰儀、及び諸儀表を創造す、精妙前古に超絶すと稱せらる、初め宋、靖康の亂より、儀象の器、盡く金に歸し、元興り鼎を燕に定め、金の舊を襲用せり、而れども宋の

器は、汴京に於て造る所にして、燕と天度相符せず、是に於て守敬勅を奉じて此作あり、

元史第十三、天文一、
宋自靖康之亂、儀象之器、盡歸于金、元興定鼎于燕、其初襲用金舊、而規環不協、難復施用、於是太史郭守敬者、出其所創簡儀、仰儀、及諸儀表、皆臻於精妙、卓見絕識、蓋有古人所未及者、
明史卷二十五、天文志、
元作簡儀仰儀陶几景符之屬、制器始精詳矣、
元史卷一百六十四、郭守敬傳、
守敬首言、歷之本在于測驗、而測驗之器、莫先儀表、今司天渾儀、宋皇祐中汴京所造、不與此處天度相符、比量南北二極、約差四度、表石年深、亦復蝕側、守敬乃盡考其失而移置之、十六年改局爲太史院、以恂爲太史令、守敬爲同知太史院事、給印章立官府、及奏進儀表式、守敬當帝前、指陳理致、至於日晏、帝不爲倦、
抑も西漢渾儀を造りしより、元・簡儀諸儀表を創造するに至るまで、無慮一千四百載、儀・象・制作、大約十六回にして、時に隱顯斷讀あるが如しと雖、亦自ら相關聯すること、上來記載する所の如くにして、其制作、後・前に勝り、元に至りて最も精し、

明

(十七) 明・元を承け、洪武十八年^{西一三五}觀象臺を南京鷄鳴山に設け、二十四年を以て渾天儀を鑄、
(十八) 正統三年^{西一四一}北京觀象臺亦渾天銅儀を鑄、景泰六年^{西一四五}又内觀象臺簡儀及び銅壺を造り、成化中

西一、四七〇年の頃、又瑤璣玉衡を造り、尋て晷影堂を修し、嘉靖二年^{西一、五三}を以て相風杆及び簡渾二儀を修し、七年始めて四丈の木表を立て、以て、晷影を測り氣朔を定む、是に由りて欽天監の立運儀正方案懸晷・偏晷・盤晷・諸式、觀象臺に具備し、一に元の法を以て斷を爲せり、

明史卷二十五、天文志、

洪武十七年造觀星盤、十八年設觀象臺於鷄鳴山、二十四年鑄渾天儀、正統三年冬、鑄銅渾天儀於北京、景泰六年又造內觀象臺簡儀及銅臺、成化中造瑤璣玉衡、修晷影堂、嘉靖二年修相風杆及簡渾二儀、七年始立四丈木表、以測晷影定氣朔、由是欽天監之立運儀正方案懸晷・偏晷・盤晷・諸式具備於觀象臺、一以元法爲斷、

十九、後ち五十餘年、萬曆の初^{西一、五八〇年の頃}西洋人利瑪竇等渡來して運算を傳へ、更に渾儀及び天球地球等の器を製し、此に至りて、觀測の術、測驗の器、益々精微に入る、西漢太初元年^{西紀前一〇四年}落下閎渾儀を造りしより以來、渾儀の制作せらるるもの、此に至りて凡そ十九回なり、

明史卷二十五、天文志、

萬曆中西洋人利瑪竇、制渾儀天球地球等器、其製不外於六合三辰四游之法、但古法、北極出地、鑄爲定度、此則子午提規可以隨地度高下、於用爲便耳、

崇禎二年^{西一、六二九}以降、更に象限大儀及び諸器を制作して、測驗の器愈々多きを加ふるに至れり、今省略に從ふ、

明史卷二十五、天文志、

崇禎二年禮部侍郎徐光啓兼理曆法、請造象限大儀六、紀限大儀三、平懸渾儀三、交食儀一、列宿經緯天球一、萬國經緯地球一、平面日晷三、轉盤星晷三、候時鐘三、望望鏡三、

明史天文志曰く、夫れ器を制す、象を尙ぶ、乃ち天文家の首務、然れども、其術に精しき者、以て心に因りて作るべし、故に西洋人測天の器、其名悉く數へ易からず、内、渾蓋簡平二儀、其最も精しき者なり、其說具さに全書に見ゆ、茲に載せず、と、

八、翻 譯

天文佛典の翻譯

支那佛法を印度に求む 佛典翻譯の機運

支那にて明に印度あることを知りしは、漢の武帝の元朔六年^{西曆紀元前一三三年の頃}張騫が月氏に使用して帝に復命せし時に始る、騫奏して言ふ、臣大夏に在る時蜀布邛竹杖を見る、其來歴を問へば云ふ、身毒國^{即ち印度}より數千里ばかりなる蜀の賈人の市に得たりと、又或は聞く、邛の西二千里ばかりに身毒國ありと、騫因りて盛に言ふ、蜀より身毒に通ずるは、道便近にして又害無しと、是に於て武帝は、王然于柏昌呂越人等十餘輩を遣りて、西南に間出して印度國を求めしめしかど、是等の使者は皆昆明に至り

て閉られて、印度に通ずることを得ざりき、

古今圖書集成 邊裔典 天竺部 彙考

漢

按西南夷傳、元狩元年、博望侯張騫言、使大夏時見蜀布印竹杖、問所從來、曰從東南身毒國、可數千里、得蜀賈人市、或聞邛西可二千里有身毒國、騫因盛言大夏在漢西南、慕中國忠匈奴隔其道、誠通蜀、身毒國道便近又無害、于是天子乃合王然于柏昌呂越人等十餘輩問出西南、求身毒國至滇、滇王當羌乃留爲求道西歲餘、宋祁曰據漢史當云爲求道西此四字當屬上句作西皆聞昆明莫能通、

相傳ふ、是れより先き約百年秦の始皇の時、西域沙門室利防等十餘人佛教を齎し來ると、

佛教史林第一編第一に此説を掲げて云ふ「經錄傳はらず、今歷代三寶記一、佛祖統記三十五、佛祖通載四、等引用する所に依る」と

而して鶻月氏より還る後ち三年元狩霍去宿匈奴を撃ちて、休屠祭天金人大象を收め、武帝之を甘泉宮に列せり、是に於て佛神の事、始て世に知られたり、

史記驃騎列傳

元狩二年西紀元前春以冠軍侯去病爲驃騎將軍、將萬騎、出隴西、有功、驃騎擊天子曰、驃騎將軍、率戎士、踰鳥懸、討遼漢、涉狐奴、歷五王國、輜重人衆、餽饋者弗取、糞獲單于、轉戰六日、過焉支山千有餘里、合短兵、殺折蘭王、斬盧國王、誅全甲、執湮邪王子、及相國都尉、首函八千餘級、收休屠祭天金人、益封去病二千戶、魏書釋老志

漢武帝元狩中、遣霍去病討匈奴、至皋蘭過居延、斬首大獲、昆邪王殺休屠王、將其衆五萬來降、獲其金人、帝以爲大神、列於甘泉宮、金人率長丈餘、不祭祀、但燒香禮拜而已、此則佛道流通之漸也、及開西域遣張騫使大夏還傳其旁有身毒國一名天竺始聞有浮屠之教、

後ち約百八十年、永平中明帝、郎中蔡愔等を西域(即ち印度)に遣り、佛經佛像を得、印度沙門攝摩騰竺法蘭を伴ひて洛陽に歸り、後ち約百年、桓帝の時に至りては、印度佛神の事益々明かなり、是に於て又使を遣りて更に佛道法を問ひ、此時印度國より來り獻ぜり、是れよりの後ち支那は、佛の形像を畫き、亦頗る其道を奉ずる者あるに至れり、始皇の時室利防等來りしより、此に至りて凡そ四百年なり、其佛教々理並に天象等に關する佛典翻譯の機運到來せしこと、寔に偶然にあらざるを見るなり、

古今圖書集成 邊裔典 天竺部 彙考

後漢

至桓帝延熹二年四年順從日南徼外來獻世傳明帝夢見金人長大頂有光明以問群臣或曰西方有神名曰佛其形長丈六尺而黃金色帝于是遣使天竺問佛道法遂於中國畫形像焉楚王英始信其術中國因此頗有奉其道者後桓帝好神數祀浮圖老子百姓稍有奉者後遂轉盛

(一)、支那に於ける天文佛典の翻譯

漢の桓帝の時に當りて、佛教々理及び天象等に關する佛典翻譯の機運迫りしこと、前項に概敘する所の如し、是に於て帝の建和西紀元一四九年安息國王子沙門安清字世高舍頭諫經一名二十卷を譯せり、是れ天文に關する佛典漢譯の創始なり、後約百二十年、西晋泰始建興西二六六乃西三一三年の間に當りて燉煌竺法護舍頭諫經を重譯せり、今世に行はる、所の舍頭諫經即ち是れなり、

是れより先き約百年、明帝の永平中、月支國沙門加葉摩騰一云攝摩騰竺法蘭等、其齋す所の佛經の要を撰りて、四十二章經を翻譯せり、抑是れ佛經漢譯の權輿なり、

又大月氏の支謙字恭梵漢の學に精通し、漢末の亂を避けて同族數十と共に吳に奔り、吳主より拜して博士となり、又東宮の傅となり、安清が舍頭諫經を譯せし後七十五年、乃ち吳の太帝の黃武二年西紀二〇三年を以て、印度の竺律炎と共に摩登伽經舍頭諫經と同名異譯を譯せり、支謙は實に支那星圖の創製者太史令陳卓と同時西紀二〇〇年に同廷に在りしならむ、是れ支那星圖印度天文の接觸上關係尤も深き者なり、當時魏の文帝黃初中にして、洛陽には天竺沙門曇柯伽羅等在りて、佛法を説き天文を談ぜる盛なり、此の如く佛法は、國の首腦たる上班に早く都會に行れたるに由りて觀れば、支那に於ける佛典天文の源遠くして且深き知るべきなり、然り而して、支謙が摩登伽經の譯有りて後、梁には扶南の伽婆羅・唐には齊州の義淨・前後孔雀王經を譯し、北印度の那連提黎耶舍は、姚齊に月藏經・隋に日藏經を譯し、唐に在りては、中印度の波羅頗密多羅は寶星陀羅尼經を譯し、南印度の不空は宿曜經を譯せしこと、前段印度の條に記載する所の如くにして、是れ皆天文に屬する佛典なり、

此の餘六朝より唐の中葉に至る迄の間に於て、印度曆法に據りて、支那に於て編修せし曆書、及び翻譯せし印度天文曆算書亦尠ならず、今繁を避けて之を架説せず、

蓋し數百年來佛典より啓發誘導せられしに因りて、支那天文曆數の學術漸く精微の域に進み、李淳風が

西曆	支那天文志	翻譯天文佛典
紀元前200年	漢	
100年 91年	史記天官書、武帝征和二年、司馬遷作、	
紀元1年	東漢	
80年	漢書、章帝建初五年成、班固作天文志は後に成、	
100年 148年		舍頭諫太子經、桓帝建和二年安息國安清、初譯、(一名、二十八宿經)
200年	三國	
223年	漢書、章帝建初五年成、班固作天文志は後に成、	摩登伽經、吳大帝黃武二年、印度竺律炎共譯
266年	晉	舍頭諫經、同本異譯、大月氏支謙
313年	續漢書天文志、惠帝永康元年司馬彪作	舍頭諫經、武帝泰始二年乃至建興元年、敦煌竺法護、後譯、
300年 300年	東晉	
400年	宋	
443年	宋書天文志、文帝元嘉二十年、何承天作	
500年	齊	
506年	梁	孔雀王咒經、武帝天監五年乃至普通五年、扶南伽婆羅、初譯、
524年	陳	月藏星宿攝受品、北齊、文宣帝天保七年、北印度烏國那連提黎耶舍譯、
556年	隋	日藏星宿品、文帝開皇二年、那連提黎耶舍譯、
582年 600年	唐	
628年	晉書天文志、太宗貞觀二年、李淳風作	
629年	寶星陀羅尼經、太宗貞觀三年、中印度波羅頗密多羅譯、	
656年	隋書天文志、高宗顯慶元年、李淳風作	
700年	唐	
705年	大孔雀咒王經、中宗神龍元年、齊州義淨、後譯、	
759年	宿曜經、肅宗乾元二年、南印度師子國(錫倫)不空譯、	
800年		

隋唐以前支那天文志翻譯天文佛典年代對照表

晉隋二書天文志高宗顯慶元年西六五八年に至り其論述始めて精し、是に於て二十八宿日月五星の次舍の如きも、始めて
詳備と稱せらるゝに至りたり、

元史天文志、

及晉隋二史實唐李淳風撰、於夫二十八宿之躔度、一曜五緯之次舍、時日災祥之應、分野休咎之別、號極詳備、

今左表を掲げて隋唐以前支那天文志天文佛典七經翻譯年代を對比綜覽するに便にす、

備考

一、支那の天文志は、政事の得失反應して天象に現るゝ者と爲し、以て星變彗孛等を記す、乃ち支那天文志は、星變等に關聯して當代の政事の得失如何を觀すべき一種の歴史なり、而して其間に於て、星歷天文學術の沿革及び進歩發達の狀、亦自ら看視することを得べき者なり、然り而して今、本表に於て、史記以下天文志と翻譯天文佛典七經との年代を對照する主眼は、支那天文と印度天文との主伴の關係如何を觀するにあり、

一、漢書宋書及び晉隋二書は、天文志作者と紀傳作者と其人異り、漢書天文志は、紀傳に後るゝこと約四十年にして成り、宋書天文志は紀傳に先だつて成る約五十年なり、今、本表は、専ら天文志「作者並に作成年紀」を掲ぐ、但し其作成年紀分明ならざる者は、姑く概定に従ひて何年の頃と書す、

一、漢書宋書及び晉隋二書紀傳等の作者凡左の如し、姑く附記して看表者の參照と爲す、

漢書 建初五年西曆八十年班固撰す、其八表及び天文志未だ竟るに及ばずして固卒す、固が妹昭曹世叔妻和帝の詔を奉して踵ぎて之を成す、

後又同郡の馬融及び融が兄續、詔を奉じて昭に繼ぎて之を成す、

宋書 永明十年西曆四九年梁の沈約撰す、是れより先き約五十年元嘉二十年の頃、宋の何承天天文志を作りしこと本表の如し、

晉書 貞觀二年西曆六二八年唐の太宗撰す、

隋書 顯慶元年西曆六五六年唐の魏徵撰す、

右晉隋二書天文志李淳風の獨作に係ること本表の如し、

一、續漢書八志、西晉の永康元年西曆三〇〇年の頃司馬彪撰すること本表の如し、而して後漢書之を收載す、今、本表は欽定廿四史に従ひ、續漢書天文志と爲して掲載す、此の天文志は、梁の天監十八年西曆五一九年の頃劉昭が註補せしものなり、
 一、六朝以來初唐中唐に涉りて、天文佛典の翻譯及び曆書の翻譯若しくは著作せらるる者頗る多し(晚唐宋元明に至りては益々多し)、今表面の簡約を謀り、單に七經を擧ぐ、

九、革 命

西洋天文の傳來

(一)、西洋天文學の傳來

明の神宗萬曆の初、西紀一、五八〇年の頃西洋人利瑪竇・羅雅谷等十有餘名、前後支那に來りて大に天文學を啓發するに會し、是に於て支那數千年來陳陳乎として鬱積したる支那天文學界の氣運始て一轉に向へり、
 戰國の初、西紀前四〇〇年の頃印度二十八宿星象觀、始めて支那に傳はりしより約一千九百年、東漢の建和西紀一四九年の頃安息沙門安清が二十八宿經會頭を譯せしより此に至りて一千四百三十年、西洋天文始て支那に行はるゝに至れり、後ち五十年、崇禎の初、禮部尙書徐光啓、見えざる星約一百を既定の星座より扣除し、有名星數を一千三百四十七星とし、始めて之を六等に區別せり、西洋に於てヒツバルヒ西紀前一、二八八年が星を六等に區

別せしより一千七百五十有餘年にして此事あり、今天象に觀るに、光啓が見えずと爲せし星にして、歴として見らるゝ者固より多しと雖、其光啓が銳意學界に貢獻して、舊套を脱し實學に入るの端緒を爲せし意氣に至りては多とすべきなり、

然れども、積習の久しき、古來の思想一掃し難く、數百年後の清代に至り、仍ほ左の如き論說盛に天文學界に行はるゝを見る、

古今圖書集成、新法曆書、

紫微垣、天皇大帝、

天皇大帝一星、在鈞陳口中、其神曰耀魄寶、主出命符以授天子、主五禮・御群靈・乘萬機・握神圖、其星常隱隱不明、觀象玩占

此星爲大帝之座、不遂指爲天皇大帝、其星隱而不見、王者聰明睿智而不取用其聰明、故冕旒蔽目、黜蔽其耳、管窺弊要

亦以て支那天文家に存在する所の星辰に對する觀念及び論法の一斑を觀るべきなり、
 今左に北京徐家滙兩天文臺西洋名教士表を掲載して以て、支那天文今日の新式を用ゆるに至りし源委を徵せしむ、

北京徐家匯兩天文臺西洋名教士表 第十六表

Pères de la Compagnie de Jésus à l'Ancien Observatoire de Pékin	北京天文臺名教士	Pères de la Compagnie de Jésus au Nouvel Observatoire de Zi-ka-wei	徐家匯天文臺名教士
Matthaeus Ricci S.J.	利瑪竇西泰	Henricus Le Lee S. J.	劉德耀斌齊
Adam Schallvon Bell,,	湯若望道味	Augustinus Colombel,,	高龍鑿鎬鼎
Blasius Verbiest,,	南懷仁敦伯	Aloysius Chauvin,,	文成章雅君
Joannes Terrenz,,	鄧玉函涵璞	Marcus Dechevreus,,	能恩斯慕谷
Jacobus Rho,,	羅雅谷味詔	Ferdinandus Puntcher,,	龐超徙南
Antonius Thomas,,	安多平施	Stanislaus Chevalier,,	蔡尙質思達
Gaspar Kastner,,	龐嘉賓慕齋	Paulus Tssetsibassi,,	喬賓華瀛生
Bern. Kiliaus Stumpf,,	紀理安雲風	Bernardus Ooms,,	廣其仁本篤
Ignatius Kögler,,	戴進賢嘉賓	Prosper Paris,,	姚宗李思白
Carolus Slaviczek,,	嚴憲侯嘉樂	Aloysius Froc,,	勞積勳亦棲
Audreas Pereyra,,	徐懋德卓賢	Ignatius Lorando,,	焦賓華楚材
Augustinus de Hallerstein,,	劉松齡喬年	Josephus de Moidrey,,	馬承華雲卿
Antonius Gogeisl,,	鮑友管義人	Robertus de Beaurepaire,,	栢應時疇人
Felix da Rocha,,	傅作霖利斯	Antonius Wecklacher,,	范繼淮韓叔
Josephus d'Espinah,,	高慎思若瑟	Eduardus Pigot,,	白裘華尙素
Joannes de Fontaney,,	洪若翰時登		
Joan. Franc. Gerbillon	張誠實齋		
Dominicus Parennin,,	巴多明克安		
Joseph. Maria de Prémare,,	馬若瑟瑪理		
Petrus Jartoux	杜德美嘉平		
Petrus Vincent. du Tartre,,	湯尙賢賓齋		
Jos. Fr. Moyra de Maillac,,	馮秉正端友		
Antonius Gaubil,,	宋君榮奇英		
Joan. Jos. Maria Amyot,,	錢德明若瑟		
Petrus Martialis Gibo,,	韓國英白多		

一本表は天文問答
上海緒二十九年
に據る

備考

目
本

天文彙考

第四編 日本

一、日本の天文

天文曆數方術の成立に就て

大日本史陰陽志曰く、上古民物淳樸、機智未だ開けず、是を以て曆數占測の術、未だ其之れ有るを聞かず、三韓内屬するに至るに逮び、漢土律曆の説、夫の天文五行の術と、蓋し始て皇朝に流傳す、推古以降に逮びては、則ち曆數天文方術の學、咸な疇官の業と爲る、大寶定令に至り、凡そ天文曆數の學、風雲氣色の占、皆之を陰陽寮に掌る、而して後世に及びては、則ち天文専ら陰陽家の業と爲り、學者復た占測推歩を務めず、徒に陰陽五行の説を講じ、小數に拘泥し、妄意説を爲し、遂に曆道を紊る、惑へるの甚しき者と謂ふ可き也。

抑も皇朝異邦の曆學を傳へ、始て曆日を行ふより、下貞觀に至り、其法五改、所謂元嘉儀鳳大衍五紀宣

明是れ也、然れども是れ皆宋唐の舊法、更作する所ならず、而して疇官傳ふる所天文五行の説、亦大抵彼の土に出づ、故に復た贅せず、唯其用曆の次第、及び當時博士の議を記して、曆術の由る所を著す、若し夫れ天災地妖の類、既に本紀に見ゆる者は、省約して簡に従ひ、其未だ記載を経ざる者は、具さに搜探を加へ、陰陽志を作る」と、其曆の叙論左の如し。

(一)、曆

大日本史陰陽志曰、太祖即位元年、太歲辛酉に在り、建寅の月を以て正と爲す、朔庚辰に在り、爾後一千二百有餘年、載籍記する所歲月干支、昭然として考ふ可し、然り而して其曆術今得て詳にする莫し、若し諸れを異邦諸曆に推すときは、率ね抵牾多し、唯其干支朔望の所在に因りて、推して之を求むるときは、則ち其法具さに存す、意ふに必らず當さに一術有るべき也。

欽明帝十四年、内臣^{姓名}を遣り百濟に使す、因て敕す、其所貢の曆博士等、宜しく分番上下すべし、且曆本を送れ、と、明年百濟曆博士王保存等を貢す、依て相代るを請ふ、百濟は舊く宋の元嘉曆を用ひ、建寅を以て歲首と爲す、保存等業とする所、蓋し其法也。

推古帝十年、百濟僧觀勒來り、曆本天文等の書を上る、詔して書生を選び就て學ばしむ、陽胡史祖玉陳其曆法を傳へ、習て以て業を成す。

十二年正月に至り、始て元嘉曆術を用ふ、持統帝四年十一月、敕して元嘉曆術と儀鳳曆術とを用ゐしむ、文武帝大寶制、陰陽寮置頭一員掌曆數等事、其下有曆博士掌造曆及教曆生等、

聖武帝天平二年、太政官奏、七曜頒曆等、國家要道、不得廢闕、今諸博士年齒衰老、若不教授、恐致絕業、宜各取弟子令習業、其生徒曜曆各二人、準大學生給衣食、從之、

七年遣唐留學生下道朝臣眞備大衍曆一卷、大衍曆立成十二卷を獻ず、眞備唐に在り、曆術算數等の術に通じ、皆其蘊奥を究む、廢帝寶字七年八月、儀鳳曆法を廢し、大衍曆術を用ゐしむ、是歲大春日朝臣船主具注七曜頒曆中星四曆を造り之を上る、是に於て交蝕度に合し、節候僣はず、後相承けて以て法と爲す、光仁帝寶龜十一年遣唐錄事羽栗臣翼實應五紀曆經を獻じて曰、方今唐國大衍曆を停め、唯此法を用ふ、と、天應元年、敕して五紀曆法に據りて曆を造らしむ、時に人學習するもの無く、業を傳ふことを得ず、猶ほ大衍曆を用ふ、文德帝齊衡三年、曆博士大春日朝臣眞野麻呂奏す、大衍曆法、施行既に久し、而して今唐の開成四年大中三年の曆本を検するに、注月大小、頗る相謬る有り、其由を覆審するに、五紀曆經に依りて之を造る也、請ふ自今造曆彼の經を用ゐん、と、眞野麻呂は即ち船主の孫、曆術獨歩、能く祖業を繼ぎ、其道を相傳し、既に五世を経ると云ふ、廷議曰、國家據大衍經造曆日尙矣、去聖已遠、義尙兩存、宜相兼、不得偏用、

桓武帝延曆三年十一月朔旦冬至、以逢章旨、始行賀禮、後以爲例、平城帝大同二年詔、曆注概多虛妄、大會小會、歲對歲位、及天恩將軍等說、竝出堪輿雜誌、非舉世之典、宜據賢聖格言、一切革除、至嵯峨帝弘仁元年、公卿奏議以爲、曆注之興、歷代行用、男女嘉會、農夫稼穡、皆資其說、請因順物情、依舊具注、十一年定式、凡具注御曆分爲二卷、六月以前爲上卷、六月以後爲下卷、頒曆一百六十六卷、竝十一月一日進之、七曜御曆正月一日進奏、後仍之、

天安元年正月に至り、五紀曆法を兼用するを許す、清和帝貞觀三年、是より先き渤海貢使馬孝愼長慶宣明曆經を獻じて曰、是れ唐家用ふる所也、と、此に至りて眞野麻呂奏して曰、彼の新曆を以て大衍五紀二經に比し、且天文を祭し、且時候に參するに、二曆の術、漸く以て麤疎、合朔節氣、既に相差ふ有り、又唐の開成四年大中十二年等の曆を校するに、復た彼の新曆と相違はず、曆議曰、陰陽之運、隨動而差、差而不已、遂與曆錯、方今唐開元より以來、三たび曆術を改む、本朝天平以降、猶ほ一經を用ふ、靜に事理を言ふ、實に然る可からず、請ふ舊を停め新を用ひ、天歩に欽若はむ、と、詔して可す、六月始て宣明曆法を採用す。

醍醐帝延喜制、凡曆本進寮、具注御曆以八月一日、七曜御曆以十二月十一日、頒曆以六月十二日、竝爲期限、凡中星曆者八十二年一度造進、其用途者、博士臨事勘錄進寮、即申省請允、凡十一月一日平旦、中務輔丞二人、將陰陽寮、進具注御曆、其頒曆者、付少納言、令給大臣、大臣轉付辨官、令頒下内外諸

宋唐五曆作者并に行用年數及び皇朝採用年代對照表 第十七表

日本	唐				宋	曆名	造曆者	行用年數	採用年代	行用年數
貞享曆	長慶宣明曆	寶應五紀曆	開元大衍曆	麟德儀鳳曆	元嘉曆	文帝元嘉二十年癸未	何承天	二十年	推古帝十二年	持統帝四年迄
	穆宗長慶二年壬寅	肅宗寶應元年壬寅	玄宗開元六年戊辰	高宗麟德二年乙丑	李淳風	二十三年	持統帝四年	寶字七年迄	七十七年	
	徐昂	郭獻之	僧一行	李淳風	二十三年	文德帝天安元年	貞觀三年	四	年	
	七十七年	二十三年	三十四年	六十三	二十三年	廢帝寶字七年	天安元年迄	九十五年		
	清和帝貞觀三年	貞享元年迄	八百二十四年							

神武帝即位紀元二千三百四十三年靈元帝貞享元年甲子年改曆、明年貞享二年乙丑曆より頒布行はる

司、正月一日進七曜御曆、凡寫曆書手者、簡取諸司史生充、其頒諸國曆者、省令朝集雜掌寫之、後冷泉帝永承三年、太宰府新羅曆を進む、本朝曆と合す、但十二月大小同じからず、又宋曆を獻ず、本朝曆と符合す。

初め村上朝、賀茂保憲陰陽頭兼天文博士たり、曆道を子光榮に、天文を安倍晴明に傳ふ、是れより二氏子孫、世々其職を掌る、然れども司曆一に宣明の説を主とし、之を用ゐる數百年、其法を革むることを知らず、終に日食多く應ぜざるに至る、後世に至り、伊豆三島亦曆を造り、關東に行ふ、之を三島曆と謂ふ、其月朔往官曆と差有りと云ふ。

前項陰陽志所記の如く、推古の朝、元嘉曆術を採用せしより貞觀に至り、曆法凡そ五改せり、今左表を掲げて以て、右宋唐曆の作者、及び我が採用せし世代年數等を綜覽するに便ならしむ。

貞觀三年宣明曆術を採用せしより以降、我が編曆は、一に本法に準據して更革する所なし、如此く依然として八百二十三年の星霜を經過し、貞享元甲子の年を以て始めて新曆の頒布ありしこと本表附記の如し、是れ皇朝曆術の革命なり、此の新曆は、靈元帝の勅を奉じて保井春海が創作せし者なり、春海は此の新曆編制に先だつて、古今の曆法を尋討し、中に就き、元の授時曆至元十八年辛巳郭守敬造、貞享元年甲子を距る四百〇三年なりの根本原數を探究するに心力を盡し、爲めに疲勞して、一旦大疾に陥りしかど、一夜忽然として夢裡に其根數を發見してより元氣頓に恢復し、遂に編曆の新式を創定して以て此の曠古の偉業を成すに至りたり、

貞享改曆頭末

寛文十二年壬子^{西一六七二年}十二月、丙辰望、曆、月食を記す、而して食せず、朝野竊に改曆の議起る、保井春海最も熱心に改曆を期す、時に保科正之あり、幕府の親藩にして樞機に参畫し、天文神道を好みて春海に師事し、肝膽相照す、頗る改曆に意あり、春海乃ち正之と圖る所あり。

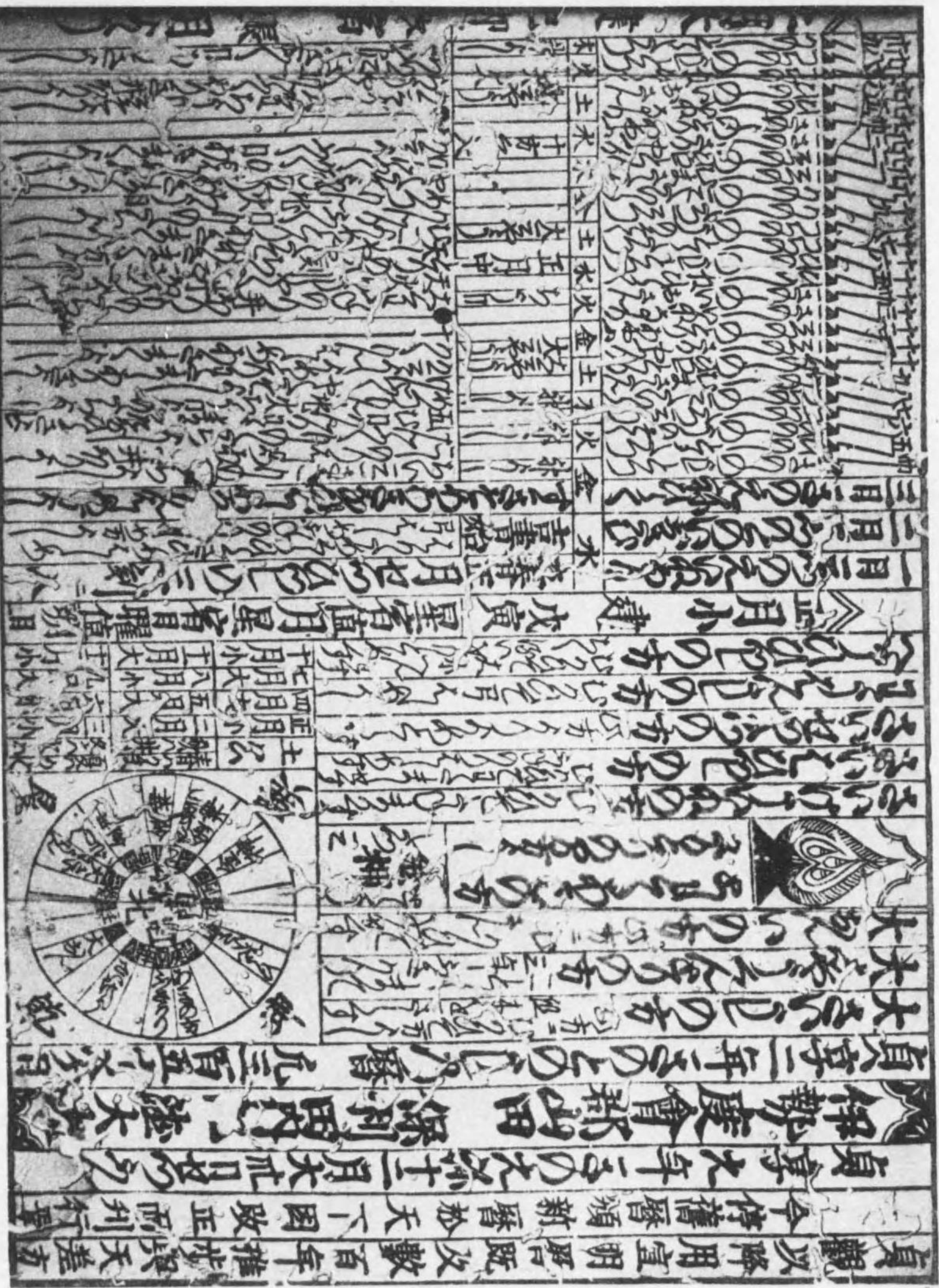
明年延寶元年六月、幕府に上表して改曆を請ふ、蓋し幕府は、此の上表を京都所司代に移牒して、之を兩傳奏に呈せしめ、兩傳奏奏聞して、禁廷の議に上るものなり、而して事決せざること十年、此間春海年々私に曆を造れり、惟ふに有司の内覽に供せしものならむ。

天和三年春海再び上表して改曆を請ふ、是に於て廷議定り、靈元帝勅して改曆を陰陽頭安倍泰福^{時に九年に}命ず、泰福之を春海に報ず、春海幕府に具狀し京都に行き、救命を拜して泰福と共に改曆の事を議す、八尺の鐵表を梅小路に立て咎影を測り、天文臺を造り、渾天儀を具へて觀測す。

明年貞享元年甲子^{西一六八四年}三月三日、改曆宣下、十月二十九日、新曆を用ゆる宣下あり、勅して名を貞享曆と賜ふ、^{春海先}先實記、明年貞享二年乙丑曆より行はる。

今右貞享新曆卷首を寫眞し、左に掲載して以て體制の一斑を觀ぜしむ。

圖五第 圖之 曆新 享貞



予別に支那日本曆術沿革考の著あるを以て、今此の新曆に關する記事は、只だ其概要を擧る耳、

(二) 天文

大日本史陰陽志曰く推古帝十年、百濟僧觀勒天文遁甲方術等の書を貢す、詔して書生を選び就て業を受けしむ、大友村主高總、山背臣日並立等、皆學びて以て其術に通ず、史始て日食雲氣等を記する者、蓋し其効なり。

中宗儲宮に在りて、親ら漏刻を造り、民をして時を知らしむ、踐祚の後ち、之を新臺に置き、時を候ひ鏡鼓を撃つ、天武帝兵を稱くる、親ら黒雲の變を卜して、天下兩分の象を曉る、位に即くに及び、始て占星臺を興す、二帝の天文方術に通ずる如此し。

大寶制、陰陽頭掌天文及風雲氣色密奏事、其下有陰陽師、占筮相地、有陰陽博士、教陰陽生、有天文博士、候天文氣色、教天文生、有漏刻博士、率守辰丁、伺漏刻之節、凡方術祕書、玄象器物、天文圖書、不得輒出、觀生不得讀占書、其仰觀所見、不得漏泄、若有徵祥災異、奏訖者、季別封送中務省入國史、所送者、不得載占言、凡大陽虧、有司預奏、皇帝不視事、百官守本司不理務、過時乃罷、天平二年、陰陽博士等、年齒漸く老するを以て、若し教授せざれば、恐くは絶業を致さむ、詔して弟子

三人を取り、大學生に準じ、衣糧を給し、其業を習はしむ。
七年下道眞備唐より歸り、測影鐵尺銅律管等を獻ず、眞備唐に在り、陰陽天文漏刻祕術雜占等を學び、皆精微を究む。

天平寶字元年勅、天文陰陽等學、國家所要、宜充公廩田、以給諸生、尋又敕、令天文生講習天官書、漢晉天文志、三色簿讚、韓揚要集、陰陽生周易、新撰陰陽書、黃帝金匱、五行大義、

弘仁中、僧泰仙工術を以て聞ゆ、漏刻を造らしむ、帝其巧思を嘉し、還俗敘位、

延喜制、凡天文博士常守觀候、每有變異、日記進寮、寮頭即共勘知、密封奏聞、其日記者、加署封送中務省、令附內記、

後世天文の學、安倍氏専ら之を掌り、遂に五行の説を混し、陰陽家の業と爲る、皆小數細術に泥み、時日方忌に拘はり、人事を捨て鬼神に任じ、適ま以て民を惑すに足る、是を以て今唯天文の異、五行の變、史籍に見ゆる者を録して、以て篇に著すと云ふ、陰陽志所記右の如し、後安倍氏の裔土御門氏相傳してより數百年、朝野天文家少なからず、而して寛文に至り保井春海大に顯はる。

二、星 圖

保井春海の星圖

方圓星圖に就て

保井春海、名は算哲、諱は順正、春海は字なり、幼名六藏、後に澁川助左衛門と稱す、父は算哲、幕府某所を預る、寛永十六年西紀一、六三九年閏十一月京都四條室町に生る、人となり聰敏明達、慶安三年年十二、江戸に出で、父老たるを以て代りて某所の職務に當る、承應元年、父歿す、是に於て、父名を繼ぎ算哲と稱す、時に年十四、後ち屢々江戸京都に往來す、神道を山崎闇齋に學び、天文曆道を陰陽頭安倍家に學ぶ、其他斯道に精しき名士を尋討し、古今の書を涉獵して研鑽し、後ち専ら元の郭守敬の授時曆法を研究して蘊奥を極む。

寛文十年西一、六七〇年渾天儀を修正して新制渾天儀を定め、又普く天星を觀測して、漢土有名の星、二百八十三官一千四百六十五星の外、新に六十一座三百〇八星を撰定して、我邦百官官名及び其類名を以て命けたり、蓋し日本國を以て、世界の中心と爲し、紫微皇極を以て、我が皇居に擬せし見地より來りしものなり。

又有名星と我が撰定せし星とを一球に圖録して天球儀を造る、後ち將軍綱吉に天文學を侍講するに當り、再び造りて獻ず、綱吉之を大成殿に置く、今東京帝室博物館所藏の天球儀若州小濱酒井家寄贈も亦春海の作に係るも

のなり。

又歐羅巴人利瑪竇の萬國圖に據り、縮圖して地球儀を造り、又別に日本輿地圖を製せり。

後に又星圖を造り、黃黑赤を以て、巫咸・甘・石・三家指定星（即ち有名星）を點し、青を以て我が撰定せし星を點ぜり、昔尹が所圖録の星圖は則ち是れなり。

貞享元年^{西一、六八四年}靈元帝の敕を奉じて春海^{時正}に於て新曆を造る、前項記載する所の如し。

帝敕感、内敕して都々茂利の號を春海に賜ひ、將軍綱吉、春海が某所役を罷めて天文官と爲す、尋て名を賜ひ、束髮して澁川助左衛門と稱す。

正徳五年^{西一、七〇五年}十月六日、病を以て江戸駿河臺邸に歿す、年七十七、所著貞享曆書、日本長曆、三曆考の外、貞享曆法通書、天文瓊統、瓊矛拾遺、神籬拾遺、武備拾遺、住吉記、自擬島記あり、此餘文章詩歌亦多し、文集題して土守文集と曰ふ、回祿烏有に歸す、惜哉。

春海力を神道天文に盡し、心を國體の重きに存せり、身匹夫にして天子將軍に知られ、恩遇優渥、名聲當時に顯れ、朝野識者に重ぜらる、後ち一百九十七年、明治四十年十一月、明治大帝、澁川助左衛門即ち春海が、國家に貢獻せし偉功を追賞して從四位を贈り賜はれり。

備考

一 天文成象方圓星圖は、保井春海が子昔尹の圖録する所に係る、同書卷首序文の後に附記あり、今左に之を抄出し、且昔尹の略歴を附記して以て看者の参考に供す。

曰、右春海所考、予圖之、天歷千載、則星移座、光爲出沒、故言天者、古今其說不一、此是春海以渾天儀觀之、詳正度數、記今所見之星象云爾、元祿十二歲次己卯春三月保井圖書源昔尹謹識

昔尹字は春江、天和三年八三年、六京都に生る、人となり明頭温柔、事業早成、元祿十二年、年十七なり、時に父春海年六十一、明年、春海幕府に請ひ、昔尹をして代りて天文職務に當らしむ。正徳五年四月四日病を以て父に先だつて歿す、年三十三。

一 方圓二十八宿朱線に該當する者其各宿の第一星即ち距星なり。第二圖

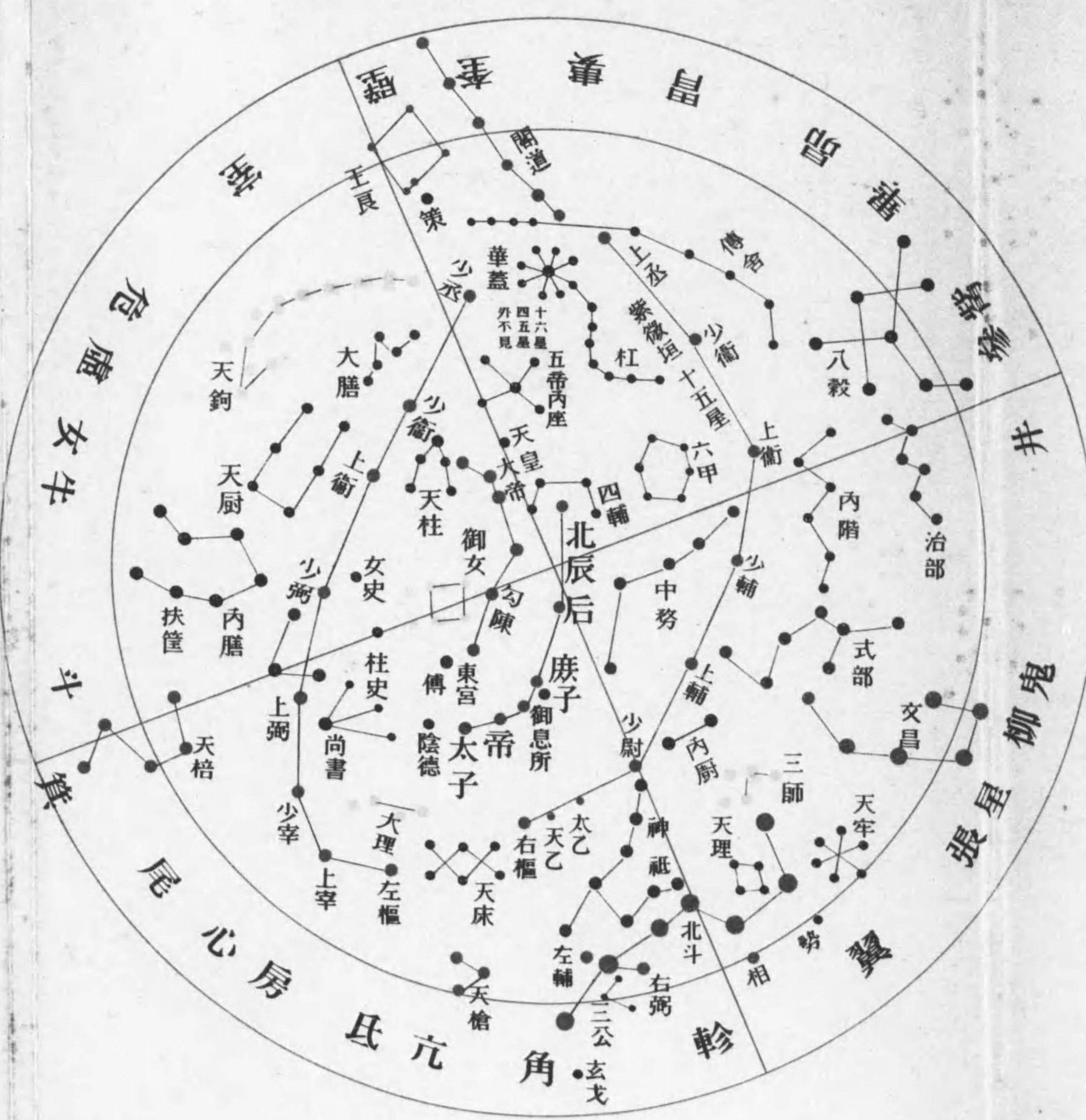
一 方圓に附載せる列宿距度は、各宿距星北極を距る度數なり。元祿年間保井春海測る所に係る。天文理統

一 方圓兩星圖四家星座・星數・左の如し

右序文所記、巫咸・甘・石・三家星數合計は、吳の陳卓が圖録に一致せり。而れども星座數は陳卓と異同あり。故に今星座數は右序文に據らず、天文要覽第七表に據りて記載せり。(但し序文所記の星座星數は、参考の爲に欄外に標記す)

序文所記の星座星數左の如し	商朝 巫咸 三十三座	百四十四星	以黃點
巫咸 四十四座	齊國 甘德 百十八座	五百一十一星	以黑點
甘德 百十八座	魏國 石申 百三十二座	八百一十星	以赤點
石申 百三十八座	合計	二千四百六十五星	
合計 三百座	日本 保井春海	六十一座	三百〇八星
(陳卓が所圖録の三家星座星數合計二百八十三座一千四百六十五星なり)	總計	三百四十四座	一千七百七十三星
			以青點

圖六第 天文成象方圓星圖



天文成象方圓星圖

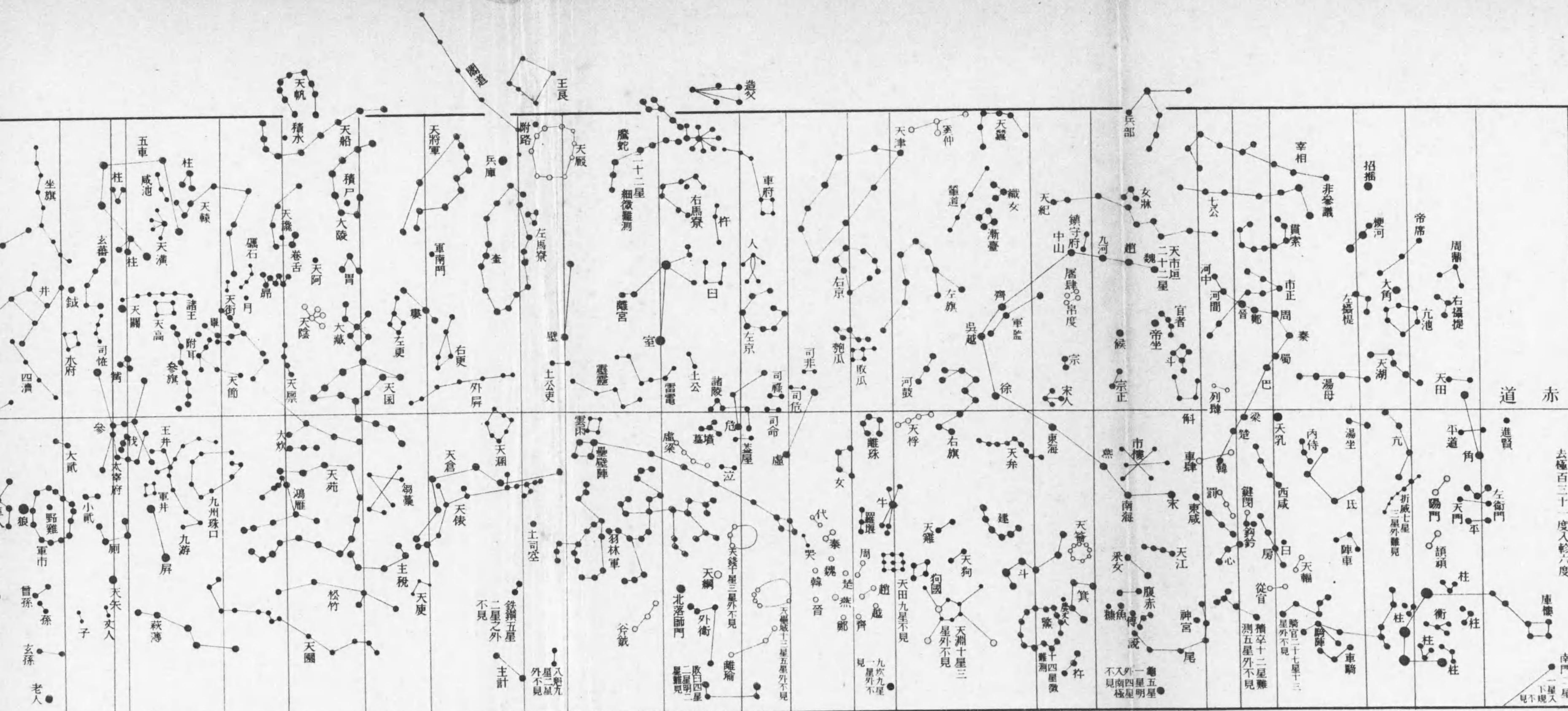
第七圖



附載 列宿距星 北極距度

角 一〇二度

亢 一〇〇度

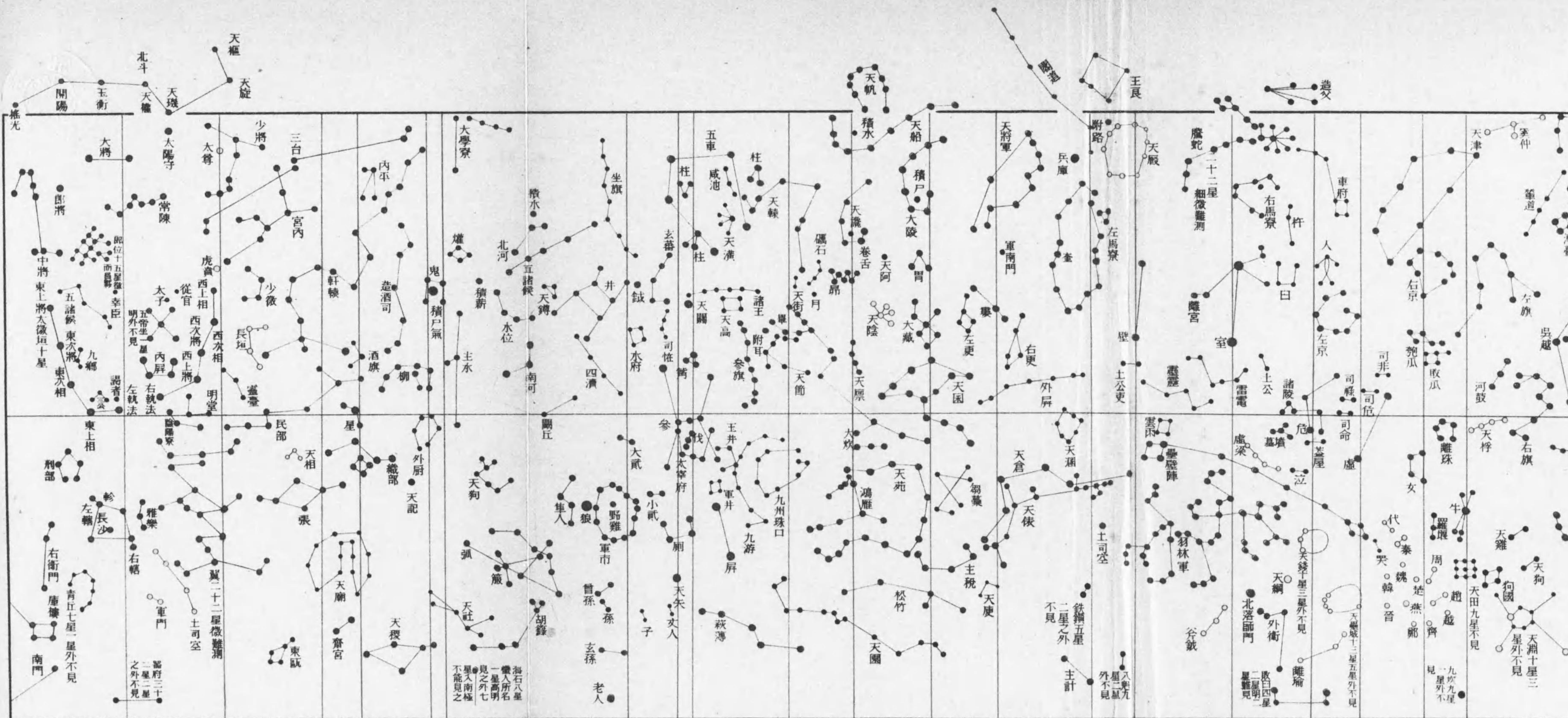


赤道

去極百三十一度入軫六度

南門二星
一星入
下星不現

井	參	畢	昴	胃	雙	奎	壁	室	危	虛	女	牛	斗	箕	尾	心	房	氏	亢	角	附載
六八度	八二度 九二度半	七二度	六八度	六五度半	七二度半	七〇度	七七度半	七八度	九三度半	九八度半	一〇二度半	一〇八度	一一九度半	一二二度半	一三〇度	一一六度半	一一七度	一〇六度半	一〇〇度	一〇一度	列宿距星 北極距度



軫	翼	張	星	柳鬼	井	參	畢	昴	胃	婁	奎	壁	室	危	虛	女	牛
一〇八度	一〇八度	一〇五度	九九度	八七度半	六八度	八二度半	七二度	六八度	六五度半	七二度半	七〇度	七七度半	七八度	九二度半	九八度半	一〇二度半	一〇八度

附 石坂常堅の星圖に就て

保井春海が星圖成るの後ち百餘年、文政九年^{西一、八}石坂常堅、欽定儀象考成表に據りて、星を六等に分ち星圖を造れり、上規^北下規^南各々直徑八寸五分、赤道帶豎一尺三寸五分、横三尺七寸五分、圖の下段に、元梶子星紀^五以下十二宮并に二十四氣節を配記し、別に二十四氣節七十二候に於ける晨昏夜半中星表を附せり、題して方圓星圖と曰ふ、常堅備後福山の人。
右附記して以て、參考に供す、圖は省略に従ふ。

三、星 表

今、巫咸・甘・石・及び保井春海が選定せし、支那日本有名星官を、先づ赤道南北に大別して、各々之を四家に殊別し、左の甲乙二表に記載して以て、一目瞭然、總覽するに便ならしむ。

備 考

一 此の甲乙兩表、星名星數は、支那日本諸天文書に據りて、記載せし者に係る。中に或は、妥當ならざる者（甲號、紫微垣内、勾

家選定殊者別四赤道帶約乃六至十北度南星表 第十九表(乙)

造酒司			
七			
		雄	
		四南河	
		積薪	
		一三	
柳	鬼	積尸氣	
八	五		
天穰		彗矢	
五		九	
天天天外 記社狗厨			
一六七六			
天相			
三			
		胡鏡	

附載

南極星表 第二十表

合計	十五座	八十七星
交白	二	蛇
孔雀	一一	飛魚
密蜂	四	異雀
金魚	四	海石
		五
		海山
		六
		十字架
		四
		南船
		五
		三角
		三
		小斗
		九
		鳥啄
		七
		附白
		二〇
		二

是れを前項第十八第十九兩表所載の星官と通計すれば凡三百五十九座一千八百六十星にして

此内

北部 二百〇三座 九百八十六星
 南部 百五十六座 八百七十四星
 なり。

附
載

天
文
彙
考
續後
編編
目
錄

天文彙考後編序

前編に於ては東西の天文を汎論せり、今此編、支那古今治曆の沿革を徴し、我が日本曆術の基く所・宋・後魏・唐・元曆の曆議・曆法を溯尋して列敘すると俱に、千有餘年間の日本四曆即ち具注・七曜・中星・頒曆の中に就きて其改曆本を採集し、之を掲載して以て我各曆の變遷沿革を分明にす、又其餘特殊曆本即ち南部官曆の如き、亦掲載して以て參考の資たらしむ、讀者若し能く前後二編を通觀せば、天文曆道に於て夫れ或は了解する所あらむ耶。

大正二年九月

小野

清誠

此の佛典翻譯家傳は刪去せり

等曆術第四項の準據せるものにして、貞享新曆第九の卦候を刪去せしは、元授曆術第四項の(七)に基づきたるを明にすると共に、七十二候名目を改作せる亦貞享新曆なりしことを看取せり、第五表

一 前述宋唐元諸曆は、我邦に於て前後千有餘年準據せしものにして、第五項又各造曆家が斯道の爲に盡したる研究の功勞亦大なり、今前編佛典翻譯家の例に倣ひ、是等諸家の傳記を其各曆下に掲載せり、第四項の(一)

余初我が古曆の基く所を徵する爲に右宋唐元六曆の下に各々其法術を摘録せり、今簡に從ひ、獨り授時曆法術を存置して以て貞享新曆の用數を觀ぜしむ、但し他五曆は、其一般法術を刪去せしかど、特に其一二の曆議若しくは法術を擧げて古曆の參考の一資に供せり。

一 中星曆、今や殆んど天下に無し、因て假りに朝鮮中星記を編載して以て姑らく我が中星曆本に代らしむ、第十

初我邦天文曆術を百濟より傳習せしこと前編一項の(二)に記載せる所の如し、故に三韓曆の法術、若し朝鮮に傳承せば、此の中星記の如き、或は我が中星曆に一致せしものならむ耶。

一 前述の如く、曆術の變遷沿革、及び支那曆日本曆の體制既に明なり、然れども、各曆に記載せらるる曆神以下建除十二直等の如き、各曆の紀事の多くは、殆んど解すべからず、而して史漢以下歷代曆志の記載する所は、曆議と曆法術とのみに止まりて他に及ばず、是に於て、曆神初め諸々の曆面紀事の解釋の如きは、正史以外の陰陽書類に求めざるを得ず、故に余は是等の書類を涉獵引用して以て曆神解を作り、後の看曆者の指南の一助に供す。

一 右の如く、曆道の沿革を徵し、又曆體制曆神解を編し、拮据從事して彙考後續二編亦今成るを見るに至りぬ、此二編の如きは、殊に蕪雜の交修すべきもの尠ならずも、姑く爰に擱筆す、後の尋討者に便する爲に、前編佛典の例に倣ひ、古曆の下に一一其所在を注記せり。

天文彙考後編

曆術沿革

總目錄

第一編 支那曆術

支那曆術の改進

支那曆法の沿革

漢三統曆

乾象曆

晉三紀曆

宋元嘉曆

大明曆

隋皇極曆

唐戊寅曆

麟德曆

大衍曆

宣明曆

宋明天曆

紀元曆

元授時曆

曆年甲子

附載 支那曆術沿革論

一 支那劉宋以降梵曆漸入の大較

天竺の慧嚴

任預

唐僧一行

敦煌の趙歐

二 支那の曆術唐に至り梵法に資りて以て始て備る

唐李淳風

隋劉焯

印度瞿曇羅

瞿曇悉達

唐陳玄奘

南宮說

印度瞿曇誤

瞿曇謙

唐楊景風

僧一行

印度瞿曇誤

瞿曇謙

第一項 曆法

後編 總目錄

▲二十四史律曆天文志有無表 第一表
二十四氣節七十二候に就て

○秦呂不韋傳

第二項 建除 避忌 宜忌

曆法中宜忌建除等刪去に關する論說

○明解大伸事略

第三項 聲律由來及び曆に配する術

第四項 宋魏唐元曆法の梗概

▲自漢至元四十四曆積年日法及び行用年數表 第二表

○宋元嘉曆

○造曆者何承天傳

(二) 後魏正光曆

正光曆議 推五行用事日 推七十二候術 推四正卦術

○造曆者李業興傳 (共造者張龍祥傳魏書に無し)

(三) 唐麟德曆

檢律候氣日術 ○造曆者李淳風傳

(四) 唐開元大衍曆

步發斂術 ○造曆者僧一行傳

(五) 唐寶應五紀曆

(六) 唐長慶宣明曆 (造曆者郭獻之傳唐書に無し)

宣明曆議 (造曆者徐昂傳同上)

(七) 元授時曆

授時曆法 步發斂術 步日繼術 ○造曆者郭守敬傳

支那天文家日月五星の運行及び歲差等の發見

漢 劉 洪 晉 姜 岌 宋 何承天

隋 劉 焯 唐 傅仁均 李 淳 風 祖 冲 之

宋 姚舜輔 唐 傅仁均 李 淳 風 僧 一 行 徐 昂

明 大統曆

清 乾隆曆 光緒曆

(九)(八) 二十四氣節 光緒十八年 曆略

日清對照 曆略

第二編 日 本 曆 術

天文歷數方術の成立に關する梗概

第五項 曆法の沿革

百濟王保存 百濟僧觀勒

大春日船主五世孫眞野麻呂

▲宋唐五曆作者并に行用年數及び皇朝採用年代對照表 第三表

曆算沿革に關する鈔本編載に就て

古曆調査表掲載に就て

▲自天平十八(西紀七四六)年古曆五種八十二本に所在調査表 第四表

○穗井田忠友小傳

陽胡史祖玉陳 下道眞備

加茂保憲子光榮 安倍晴明

附記 皇朝貞享新曆頒布

附言 晦官の勞亦多とすべし

大永天文年間の世局一斑

具注七曜頒曆中星四曆掲載に就て

一、具注曆 氣朔曆

平城帝敕して曆注一切革除すべしと命じ給へり

具注曆法三改せり

第六項 天 平 曆

天平十八年曆 天平廿一年(天平勝寶元年)己丑曆 天平勝寶八歲

第七項 承曆永保永久曆

承曆元年曆 付永保元年曆 辛酉曆

附記 日本承曆二年戊午曆(西一〇七九年)及び高麗曆、遼奉元曆(西一〇七九年)の参考書と爲る

永久三年曆

第八項 寬永壬申曆

第九項 貞享三年曆

▲授時曆、貞享曆、寶曆曆、七十二候名目異同對比表 第五表

第十項 寶曆五年曆

○氣朔曆

氣朔曆に就て

第十一項 寶曆五年氣朔曆

二、七曜曆

七曜曆に就て

第十二項 明和七年七曜曆

三、中星曆

中星曆に就て

第十三項 朝鮮英王二十中星記(日本延享元年、清乾隆九年甲子、西一七四四年)

付漏囊通義

四、頒 曆 假名曆

假名曆紀事條項漸次改革變遷せり

假名曆は七十二候六十卦を配當せず

第十四項 嘉慶長曆

嘉慶二年曆 慶長二十年(元和曆戊辰)

第十五項 寬永延寶曆

寬永十三年曆 延寶三年曆 曆傳術狂歌六十六首

第十六項 貞享天保曆

貞享二年新曆 ○造曆者保井春海傳(兼考日本第二項乙丑)

貞享以降曆法三改せり

寶曆五年乙亥曆、寬政十年戊午曆、天保十五年(弘化甲辰)曆

天保十五年曆

附載 南部官曆

天明三年曆 文久四年(元治元年)甲子曆

▲自貞享二年至明治五年十一曆首尾紀事及び改曆揭示文等綜覽表 第六表

付太陽曆頒布 明治五年壬申改曆詔

彙考後編總目錄終

天文彙考續編序

本編は體制本原歲時義例立成五門に別ち、古今一切の曆制曆注を解釋して以て前二編に續げり、然れども、抑も曆注の如きは、開明の氣運を硬塞する甚しきもの、大同の昔し夙く既に平城帝の、曆注虛妄多し一切革除すべしと敕命し給ひし所以なり、今や曆注廢せられてより約五十年、其空文亦枯骨となる、余今之に肉を附せんとするにあらず、唯其れ讀みて解すべからざるもの多きが故に、其由來事由を約說せしのみ、余固より他の曆家陰陽家等の擧に倣ひ敢て堂を下り燭を手にして、迷宮を尋ぬる者の先驅を爲すにあらず、惟ふに達觀の士、余を以て耳を塞ぎて鈴を鳴らすの徒と爲さざらん、而れども李下瓜田の諺あり、仍て一言を贅すと云ふ。

大正二年九月

小野

清識

天文彙考續編

曆體制 曆神解

總目錄

第一編 曆體制

曆體制掲載に就て

曆體制 編曆 頒布

造曆、表を立て景を測り氣節を定む

第一項

曆の本旨、曆の成立、曆の構造、曆といふ名詞の語原、及び曆の種類

曆の本旨 曆の成立 陰陽頭の自筆貞享以降は、江戸天文方に於て曆を編修し、

曆の構造 卷曆 折曆 綴曆册子 柱曆 用紙及び寸法

懷を卷曆に寓せし歌 曆といふ名詞の語原 諸國曆師

曆の種類 曆本五十種 須曆所又測量所天文臺 諸國曆師

第二編 曆神解

曆神解 上

本原

第二項 五行生尅

河圖 洛書 干支

伏羲八卦次序 伏羲八卦方位

續編 總目錄

- 文王八卦次序 第五圖
- 文王八卦方位 第六圖
- 伏羲八卦配河圖之象 第七圖
- 文王八卦配河圖之象 第八圖
- 伏羲八卦配洛書之象 第九圖
- 文王八卦配洛書之象 第十圖
- 甲歷 十干 十二支
- ▲干支紀法第一 四序 六辰
- 十二月辟卦 二十八宿配日
- 干支五行 第十三圖 第十二圖
- 五合化氣 第十四圖 五行相生相剋
- 納音五行應伏羲圖 第十五圖
- 納音五行應文王圖 第十六圖
- 納音五行分三元應樂律隔八相生圖 第十七圖
- 六十花甲納音圖 第十八圖
- 納音捷法其一 第二十九圖
- 其二 第二十一圖 第二十二圖
- 歲時
- 第三項 晝夜 氣節 十二支宮 二十八宿
- 一日十二時
- 晝夜之圖 第二十四圖
- ▲辰刻時數表 周日百刻之法 第二表
- 二十四氣節晝夜時刻 氣節
- ▲六陰六陽變合消長二十四氣七十二候配當表 第三表
- 第四項 雜節 佳例
- 八十八夜 入梅 半夏生 三伏日 二百十日 彼岸
- 土用事 土用の間日
- 五行用事土用事 社日 穗掛
- 齒固 編糝初 火水初 飛馬始 著衣初 基組始 元服 加冠
- 鋤初 種漬 作開
- 第三編 曆神解下
- 義例上

曆の紀事中由來亦久しき者あり
 或は戰國、或は漢代、或は印度に起る者あり
 二十八宿諸曆神等を日に配當せし由來及び意義
 曆日所載吉凶各神撰擇に就て

歲德天道八將神等の比喩、支那日本選を異にするに就て

- 第五項 月建 建除十二直
- 月建 宿值年 宿值月 宿值朔日
- 建除十二直 十二客 十二神 建除十二叢辰
- 佛典所載建除十二直に就て
- 第六項 具注曆首及び頒曆首に掲載せらるゝもの
- 三鏡に就て
- 三鏡 三辨寶珠 三玉女
- 歲德 第三十圖
- 歲德合 第三十二圖
- 太歲 第三十三圖
- 大將軍 第三十四圖
- 太陰 第三十六圖
- 刑 第三十八圖
- 破 第四十圖
- 歲殺 第四十二圖
- 黃幡 第四十四圖
- 豹尾 第四十六圖
- ▲八將神每歲方位表 第四表
- 金神 第四十八圖 金神遊行 土公 土公遊行 ●土符 第五十圖
- 太歲已下神煞出遊日 第五十一圖
- 第七項 具注曆每月首に掲載せらるゝもの
- 天道 天德 第五十二圖
- 天德合 第五十三圖
- 月德 第五十四圖
- 月德合 第五十五圖
- 月空 第五十六圖
- 月煞 第五十七圖
- 月厭 地火
- ▲天道天德乃至月厭每月方位表 第五表
- 附載 清曆首及び毎月首に掲載せらるゝもの

- 奏書 第五十八圖
- 博士 第六十圖
- 力士 第六十三圖
- 蠶室 第六十四圖
- 飛廉 第六十六圖
- 三元九星 第六十八圖
- 三元九星入中宮 第三十七圖
- 三元九星入中宮 第三十八圖

義例中

第八項

具注曆に掲載せらるるもの(上) 但し須曆に掲載せらるるもの亦雜出す

- 月 脈 第六十九圖
- 脈對 第七十圖
- 厭々對 厭日 厭對日 第七十一圖
- 陰陽不將 第七十二圖
- 無翹 第七十三圖

- 八會 太歲位、前對、後
- 凶會 行狼 運了 孤長 單陰 純陰 孤陽 純陽 陰陽交破 陰陽擊衝 陽破陰衝 陰道衝陽 陰位 三陰 陽錯 陰錯 陰陽俱錯

- 四耗四廢四忌四窮 第八龍七鳥九虎六蛇 四季惡日 青龍朱雀白虎玄武 第七十四圖
- 伏龍 九坎 第七十五圖

第九項

具注曆に掲載せらるるもの(下) 但し須曆に掲載せらるるもの亦雜出す

- 太白逐日遊方 逐日人神所在 十干十二支人神所在日
- 十二時人神所在 日遊神 第七十六圖
- 鶴神 第七十七圖
- 天一神 天一天上 八專 八專の間日 十方幕
- 八專十方幕配置及び天一遊二神昇降 第七十八圖
- 八專 第七十九圖
- 五寶日 寶、義、制、專、伐日 五行相生相剋 第八十二圖 伐日
- 五行生旺 第十二運 五墓 第八十三圖 十二運名目の解
- 立成 第九表
- 五性十二運配當 第十表 五性有卦無卦
- 没日 減日 ●重日 五合 五離 除神 第八十四圖
- 解神 第八十五圖

- 復日 第八十六圖
- 鬼宿日 甘露 金剛峰 羅刹 滅門
- 太過 狼籍

義例下

第十項

須曆に掲載せらるるもの 但し具注曆に掲載せらるるもの亦雜出す

- 天恩 第八十七圖
- 天赦 第八十八圖
- 母倉 第八十九圖
- さうよう日 雙曜日 大明日 神吉 三寶吉 如意寶珠
- 一粒萬倍 天間 ●天火 第九十圖 地 火即ち月 厭なり
- 血 總 第九十一圖 ●歸 忌 第九十二圖 ●往 亡 第九十三圖
- 大空亡 第九十四圖 歲下食 下食時 忌遠行 忌夜行
- 不吊人 不視病 不問疾 ●赤口日 第九十五圖
- 六壬日 大安 留連 速喜 赤口 將吉 空亡
- 六曜占 先勝 友引 先負 佛滅 大安 赤口
- 赤口值日に就て 第九十六圖 ●不成就日 第九十七圖 文殊惡日 四箇惡日
- 黑日 ●受死日 十死

立成

第十一項 年神 月神 日神 月表 三元月九星

- ▲年神隨歲千起者 第十一表
- ▲年神隨歲支順行者 第十三表
- ▲年神隨歲支順行一方者 第十五表
- ▲年神隨歲方順行者 第十二表
- ▲年神隨歲支三合者 第十四表
- ▲年神隨三元起者 第十六表

- ▲月神隨三元起者 第十七表
- ▲月神取四序者 第十九表
- ▲月神隨建旺取墓辰者 第二十一表
- ▲月神隨四序行三合者 第二十三表
- ▲月神隨孟仲季順行三支者 第二十五表
- ▲月神隨月建行陰陽六辰者 第二十七表
- ▲月神隨厭建起者 第二十九表
- 日 神 人 神
- ▲日神取一定干支者 第三十表
- ▲三元月九星 第三十二表
- ▲月神取月建三合者 第十八表
- ▲月神隨月建順行者 第二十表
- ▲月神隨月建三合逆行一方者 第二十二表
- ▲月神隨月建三合順行一方者 第二十四表
- ▲月神隨月將逆行者 第二十六表
- ▲月神隨月建生比者 第二十八表
- ▲人神所在日 第三十一表

彙考續編 總目錄終

天文彙考 大尾

天文彙考 奧書

(一) 天文彙考亦再び修述せし事

天文要覽の再編修成りしこと、該書奥書に所記の如し。
 天文彙考は、天文要覽の参考書にして、列宿獸帶編、及び、印度・支那・日本・西洋に部別し、關係頗る廣汎に涉り、而して以上の諸編、及び附録金石四禽圖譜の如きも亦、其蒐集編修せし夥多の材料、副本等、多くは家に存せず、加之のみならず、諸材料中、再び蒐集する能はざる者亦尠なからず、惟ふに再び力を編修に悉くして前稿と伯仲する書を作らむ乎、其業は、至難にして、其成功は、短時日の能くする所にあらず、寔に日暮れ道遠しの感に堪へず。
 且方今、世局一變し、而して予の頽齡、勢、獨り是等の書再修の爲に、久しきに瀰りて悠々秃筆を砥るを許さざるものあり。

是に於て、一氣呵成を旨とし、先づ列宿獸帶編を再稿し、更に餘勇を鼓して、家藏圖書、及び、其他に就き、拮据搜探を加へ、印土・支那・日本・三編を修す、初め是書を再修するに當りて、速成を期し、舊草稿の中に就きて、若干篇を選択し、又圖表を修整し、煩を避け簡に従ひて筆を起せしかど、而も亦逸漏

の憾なきに非らず、是に於て、一步を進めて、採收の範圍を廣くし、努力半歳にして、大略前稿と同じき書復た成る。仍て爰に此編修の局を結び、而して、家藏せし副本、英文列宿獸帶論は讀者の便を圖りて本書の後に收載する事となせり。

大正十三年六月

本書序文例言目次亦前稿に記載せし者に係る、今改訂せず。

(二) 西洋編及び金石四禽圖譜に關する事

今回天文彙考再修に當り、西洋編中、獸帶に屬する紀事は其第六表之を列宿獸帶編第六項に移し、究理天文諸家事蹟は、天文要覽の巻尾に收め、此餘、加耳埜亞人の天文觀察、支那星座對比西洋一百八星座綜覽表拉丁獨逸兩文等、若干紀事は、皆省略せり。
又金石四禽圖譜は、前記の如く、其諸材料、一切烏有に歸せしを以て、闕如せり、仍て其目次に據り、別に金石辰曜四禽表第十表を作りて、姑らく圖譜に代らしめ、之を支那編第四項・辰曜四禽の條下に附載し

て以て參考に供せり。

大正十三年六月

靜修 小野 清

TEM MON YŌ RAN

(天 文 要 覽)

*An Outline of Ancient
Astronomy*

By

ONO KIYOSHI

(小 野 清)

CONTENTS.

PART I.

THE CELESTIAL ENCLOSURES AND ANIMAL FIGURES OF STARS OBSERVED AND DELINEATED BY ANCIENT ORIENTAL ASTRONOMERS

I

	PAGE
Remarks on the Star-chart: General Notions on the Star-groups. . .	1
1. List of the Principal Stars of the <i>Tsa-wei</i> Enclosure and the North Seven Stars.	
2. List of the Principal Stars of the <i>Tai-wei</i> Enclosure.	
3. List of the Principal Stars of the <i>Tien-shih</i> Enclosure.	
4. List of the 28 Constellations.	

II

The Twelve Divisions of the Starry Heavens and their Designation	PAGE 3
5. List of the Twelve Mansions compared with the Twelve Zodiacal Signs.	

III

Historical Sketches of the Constellations in China and Japan. . .	PAGE 3
A. China.	
B. Japan.	
6. Table of the Constellations and the Number of the Stars observed and defined by Chinese and Japanese Astronomers.	

PART II.

ON THE TWENTY-EIGHT CONSTELLATIONS AND
THE SIGNS OF THE ZODIAC; THEIR
ORIGIN AND HISTORY

I
Ancient Astronomy PAGE 7

II
Variation of the Number of Stars and Names of the 28 Con- PAGE
stellations 8
7. Table of the Names of the 28 Constellations, Indian,
Chinese, Mongolian, etc. *The Japanese Text; P. 46.*
8. Table of the Names, Figures, and Star-numbers of the
28 Constellations or 28 Heavenly-gods frequently
appearing in the Buddhist Scriptures.
Table of the 12 Mansions compared with the 12 Zodiacal
Signs. *The Japanese Text; P. 46.*

III
Astronomical Knowledge in India: Dividing Stars into 28 Con- PAGE
stellations 8
9. Figures of the Four Animals. *The Japanese Text; P. 47.*
10. Star-Mandala in the Temple *Horiuji*. *The Japanese Text; P. 50.*

IV
The Twenty-eight Constellations in China: When were they PAGE
transmitted to China? 10

V
Bringing the Indian Star-lore into China. PAGE 12

VI.

The Twelve Zodiacal Signs. PAGE 14
11. Comparison of the Seasons regulated by the 12 Zodiacal
Signs and the 12 Mansions. *The Japanese Text; P. 62.*
12. Names of the Seven days of the Week; Greek, Indian,
Persian, and etc. compared. *The Japanese Text; P. 62.*

VII.

Intercommunication of the Old Times. PAGE 14

TEMNON YÖRAN.

PART 1.

THE CELESTIAL ENCLOSURES AND ANIMAL FIGURES OF STARS.

I.

Remarks on the Star Chart: General Notions on the Star-Groups.

The fundamental ideas of ancient oriental astronomers by the medium of which they observed the starry heavens within their range of sight, seem to be as follows:

First the imperial palace is marked out, second the government, and third the city; these make three *Yüan* 垣 or enclosures respectively named *Tsa-wei* 紫微, *Tai-wei* 太微, and *Tien-shih* 天市. Thus the star configurations are imagined to correspond to the state organisation.

The group *Wang-liang* 王良 and *Kê-tao* 閣道 lying at the rear of the imperial palace or *Tsa-wei-yüan* are considered to be the principal protectors and supporters of the whole firmament. Hence comes the name of the *Tailao* 大老, the veteran ministers.

The figure *Pê-tou* 北斗 or north ladle lying in front of the palace is thought to defend the latter from the enemy. The seventh star of the group is called *P'ê-chun* 破軍, the destroyer of the enemy's army.

Amongst those stars scattered in all directions over the sky, eight and twenty constellations are recognized. The frontier stars of each constellation, together with the equator, the ecliptic, the

latitude and the longitude, make the landmarks for measuring the position of the sun, the distance of the moon and the motion of the five planets.

The twenty-eight constellations are imagined to be stationed so as to surround and protect the three *Yüan* in the forms of a dragon, tortoise, tiger, and phoenix.

The four quarters, east, north, west, and south, take the four respective colours of blue, black, white, and red.

In the eastern quarter, the seven constellations, *Chiüè* 角, *K'ang* 亢, *Ti* 氐, *Fang* 房, *Sin* 心, *Vei* 尾, and *Chi* 箕, compose the Blue-
Dragon 蒼龍. To the northern quarter, lies the Black Tortoise 玄武, consisting of the seven constellations, *Tou* 斗, *Niu* 牛, *Nü* 女, *Hsü* 虛, *Wei* 危, *Shih* 室, and *Pi* 壁. The White Tiger 白虎 in the west is made up of the seven groups of *Kuei* 奎, *Lou* 婁, *Wei* 胃, *Mao* 昴, *Pi* 畢, *Tsui* 觜, and *Tsan* 參; while the seven groups of *Tsing* 井, *Kuei* 鬼, *Liu* 柳, *Sing* 星, *Chang* 張, *Iu* 翼, and *Chên* 軫, form the Red Phoenix 朱雀 of the south.

Let us notice here that the names of these constellations were adopted some from goods and things, some from ancient symbolic characters, the forms of which were thought to be similar in outline to the imagined figures of the constellations.

The twenty-eight constellations lie scattered all over the firmament to the north and south of the ecliptic. At a glance they appear quite promiscuous, but if you look them steadfastly having the four gigantic creatures in your mind, they may be brought under a system at once beautiful and magnificent.

Our chart represents those four figures and the three *yüan* together with the other stars of the first magnitude and two or three other constellations, such as *Pê-tou* 北斗, *Wang-liang* 王良, etc.

In addition to that, the twelve signs of the Zodiac are given to facilitate the readers making comparisons between the ideas of oriental and occidental astronomers.

In order to prevent the Tiger's face from being confused with the Taurus' and the Dragon's tail from falling on the Scorpion's

body, the positions of the Taurus and Scorpion are a little separated.

Though the ideas of oriental observers seem to differ much from those of occidental ones, they both agree in putting some landmarks by which to recognize easily the positions and motions of celestial bodies.

We are well aware that such a work as this illustration of the ancient constellations is not so great a help to the progress of modern science, but it is also true that often new knowledge is obtained from old learning. It is our humble belief that this little labour of ours will not be entirely worthless for those who find some interest in such matter as old astronomy.

II.

The Twelve Divisions of the Starry Heavens and their Designation.

The starry heavens afterwards were divided into twelve quarters by old oriental astronomers, in order to mark the longitude and latitude of fixed stars exactly; and to those twelve divisions were given the twelve animals' names: the rat 子, the ox 丑, the tiger 寅, the rabbit 卯, the dragon 辰, the serpent 巳, the horse 午, the sheep 未, the monkey 申, the cock 酉, the dog 戌, and the wild boar 亥.

For astronomical purposes, however, the following names were more frequently used instead of the twelve animals' names: *Yüan-hsiao* 元枵, *Sing-chi* 星紀, *Si-mu* 析木, *Tai-h'uo* 大火, *Shou-sing* 壽星, *Ch'un-vei* 鶉尾, *Ch'un-h'uo* 鶉火, *Ch'un-shou* 鶉首, *Shih-chên* 實沈, *Tai-liang* 大梁, *Hsiang-lou* 降婁, and *Tsü-t'zu* 娵訾.

The relative positions of the twelve Divisions and the twelve signs of the Zodiac are given in the fifth schedule.

III.

Historical Sketches of the Constellations in China and Japan.

A. China.

About the year 223 A.D. (the 2nd year of *Huang-wu* 黃武 of the

Wu 吳 Dynasty), an astronomer named *Chên-cho* 陳卓 attempted to put the stars on a chart, which had been observed long before by *Wu-hsien* 巫咸 of the *Shang* 商 Dynasty, *Kan-tê* 甘德 of the State *T'si* 齊, and *Shih-shên* 石申 of the State *Wei* 魏. The latter two were contemporaneous in the fourth century, B. C.

The number of the stars *Chên-cho* at first put on the chart, amounted to 1465. They were grouped into 283 figures, and designated after men and things, such as a King, Queen, Prince, State, etc.

In the year 440 A. D. (the 17th year of *Yüan-chia* 元嘉), *Tsien-lê-chih* 錢樂之 of the *Sung* 宋 Dynasty made a copper globe 2 *ch'ih* 尺 2 *tsun* 寸 (1,19 ft.) in diameter and 6 *ch'ih* 9 *tsun* in circumference. He put down on it the twenty-eight constellations and the other star groups in the northern and southern sections of the heavens. They were marked out in colours, yellow, black, and white, in order to differentiate the three authorities, and were made to agree with *Chên-cho's* representation in the number and groups of stars.

B. Japan.

In the 10th year of *Kwanbun* 寬文 (1670 A. D.), *Yasui Shunkai* 保井春海 newly arranged 61 groups containing 308 stars, which he called after the officials of the Japanese Imperial Court.

The constellations, which had been observed and defined by Japanese and Chinese Astronomers, numbered 344, and the stars amounted to 1773.

Yasui also made a celestial globe and a chart, and the stars of *Wu-hsien*, *Kan-tê* and *Shih-shên* were marked out in their respective colours, yellow, black, and red. The stars he observed himself were represented in blue.

A table of stars is appended for enabling the reader to discriminate the observations of *Wu-hsien*, *Kan-tê*, *Shih-shên*, and *Yasui Shunkai*. Thus the stars and groups recognized in China and Japan are to be seen at a glance.

Remark. It is generally believed that the first astronomer who defined the twenty-eight constellations was *Shih-shên*, and we have, according to this tradition, classified them among the star groups he defined. But as to this point, we have a different view, which is fully expressed under the heading, "On the Twenty-eight constellations together with the Signs of the Zodiac, their Origin and History."

I. List of the Principal Stars of the *Tsa-wei* Enclosure and
the North Seven Stars.

(1) *Tsa-wei* Enclosure.

Names of the Stars.	Translation.	Number of Stars.	Astronomical Designation.
Shi-bi-yen 紫微垣 (Tsa-wei-yüan).	Imperial Palace.		
<i>Sei-han</i> 西藩 (Si-fan).	Western Enceinte.		
<i>Yu-shu</i> 右樞 (You-ch'u).	Pivot of the Righthand (Minister of War.)	1	α Draconis.
<i>Shō-i</i> 少尉 (Shao-wei).	Second Commandant (Magistrate of Justice.)	1	κ „
<i>Jō-ho</i> 上輔 (Shang-fu).	Grand Councillor.	1	λ „
<i>Shō-ho</i> 少輔 (Shao-fu).	Second Councillor.	1	d Ursae-major.
<i>Jō-yei</i> 上衛 (Shang-wei).	Grand Guard.	1	43 Camelopardalis.
<i>Shō-yei</i> 少衛 (Shao-wei).	Second Guard.	1	9 „
<i>Jō-jō</i> 上丞 (Shang-ch'êng).	Grand Coadjutor (Minister of the State.)	1	„
<i>Tō-han</i> 東藩 (Tung-fan).	Eastern Enceinte.		
<i>Sa-shu</i> 左樞 (Tso-ch'u).	Pivot of the Left (Minister of War.)	1	ι Draconis.
<i>Jō-sai</i> 上宰 (Shang-tsai).	Superior Governor (Prime Minister.)	1	θ „
<i>Shō-sai</i> 少宰 (Shao-tsai).	Inferior Governor (Vice Prime Minister.)	1	η „
<i>Jō-hitsu</i> 上弼 (Shang-pi).	Superior Councillor.	1	ζ „
<i>Shō-hitsu</i> 少弼 (Shao-pi).	Inferior Councillor.	1	ν „
<i>Jō-yei</i> 上衛 (Shang-wei).	Grand Guard.	1	73 „
<i>Shō-yei</i> 少衛 (Shao-wei).	Second Guard.	1	π Cepheis.
<i>Shō-jō</i> 少丞 (Shao-ch'êng).	Second Coadjutor (Vice-minister of the State).	1	23 Cassiopeae.
<i>Hok-kyoku-sei</i> 北極星 (Pè-chi-sing).	Polar Star.	1	α Ursae-minoris.
<i>Tei</i> 帝 (Ti.)	Emperor.	1	β „
<i>Kō</i> 后 (Hou).	Empress.	1	4 „
<i>Tai-shi</i> 太子 (Tai-tzu).	Prince Imperial.	1	γ „
<i>Go-tei-nai-za</i> 五帝內座 (Wu-ti-nui-tso).	Interior Seats of the Five Emperors.	5	Cepheis. Cassiopeae.
<i>Roku-kō</i> 六甲 (Lu-chia).	Armors, or the Form of Crown.	6	Camelopardalis.
<i>Ka-gai</i> 華蓋 (Hua-kai).	Baldachin.	16	ψ A 49 Cassiopeae.
<i>Wo-ryō</i> 王良 (Wang-liang).	Grand Chancellor.	5	α β γ δ ϵ Cassiopeae.
<i>Kaku-dō</i> 闕道 (Kê-tao).		6	
<i>Hoku-to-ha-gun-sei</i> 北斗破軍星 (Pè-tou-p'ê-chun-sing).	Army Destroyer.	1	η Ursae-majoris.

(2) *Hoku-to* 北斗 (*Pe-tou*), Seven Stars of the North

Names of the Stars.				Indian Names (From the Buddhist Sacred Books translated into Chinese)			Chinese Names.		
1	Dubhe.	α	Ursa-major.	<i>Don-ro</i>	食狼 (<i>Tan-lang</i>).	Greedy Wolf.	<i>Ten-shu</i>	天樞 (<i>Tien-ch'u</i>).	Celestial Pivot.
2	Merak.	β	"	<i>Ko-non</i>	巨門 (<i>Ch-men</i>).	Huge Gates.	<i>Ten-sen</i>	天璇 又天璿 (<i>Tien-suan</i>).	Celestial Rotation, or Celestial Jewels.
3	Thekda.	γ	"	<i>Rok-son</i>	祿存 (<i>Lu-'sun</i>).	Pension Existence.	<i>Ten-ki</i>	天機 又天璣 (<i>Tien-chi</i>).	Celestial Trigger (of a catapult), or Celestial Gems.
4	Megrez.	δ	"	<i>Mon-goku</i>	文曲 (<i>Wên-shü</i>).	Literary Crookedness.	<i>Ten-cen</i>	天權 (<i>Tien-chüan</i>).	Celestial Balance.
5	Alioth.	ϵ	"	<i>Ren-jo</i>	廉貞 (<i>Lien-chêng</i>).	Angulanty and Clustity.	<i>Gyok-ko</i>	玉衡 (<i>Yu-heng</i>).	Stone Beam (of a Balance)
6	Mizar.	ζ	"	<i>Mu-goku</i>	武曲 (<i>Wu-chü</i>).	Military Crookedness.	<i>Kai-yo</i>	開陽 (<i>Kai-yang</i>).	Opening of the Good Season.
7	(Benetnasch.) Alkaid	η	"	<i>Hagin</i>	破軍 (<i>Pe-shün</i>).	Army Destroyer.	<i>Yo-ko</i>	搖光 (<i>Yao-Kuang</i>).	Effulgent Rays.

II. List of the Principal Stars of the *Tai-wei* Enclosure

Names of the Stars.	Translation.	Number of stars.	Astronomical Designation.
Tai-biyen 太微垣 (Tai-wei-yüan).	Government.		
<i>Sei-han</i> 西藩 (<i>Si-fan</i>).	Western Enciente.		
<i>Yu-shütsu-ho</i> 右執法 (<i>You-chih-fa</i>).	The Chief public prosecutor-General.	1	β Virginis.
<i>Sei-jo-sho</i> 西上將 (<i>Si-shang-tsing</i>).	Grand General of the West.	1	σ Leonis.
<i>Sei-ji-sho</i> 西次將 (<i>Si-l'zu-tsiang</i>).	Second General of the West.	1	ϵ "
<i>Sei-jo-sho</i> 西次相 (<i>Si-l'zu-siang</i>).	Vice-Minister of the West.	1	θ "
<i>Sei-jo-sho</i> 西上相 (<i>Si-l'zu-siang</i>).	Grand Minister of the West.	1	δ "
<i>To-han</i> 東藩 (<i>Tung-fan</i>).	Eastern Enciente.		
<i>Sa-shütsu-ho</i> 左執法 (<i>Tso-chih-fa</i>).	Superior Justiciar of the Left-hand.	1	η Virginis.
<i>To-jo-sho</i> 東上相 (<i>Tung-shang-siang</i>).	Grand Minister of the East.	1	γ "
<i>To-ji-sho</i> 東次相 (<i>Tung-l'zu-siang</i>).	Vice Minister of the East.	1	δ "
<i>To-ji-sho</i> 東次將 (<i>Tung-l'zu-tsiang</i>).	Second General of the East.	1	ϵ "
<i>To-jo-sho</i> 東上將 (<i>Tung-shang-tsiang</i>).	Grand General of the East.	1	ν Coma-beren.
<i>Go-tai-za</i> 五帝座 (<i>Wu-ti-tso</i>).	Seats of the Five Emperors.	5	β Leonis.
<i>Tai-shi</i> 太子 (<i>Tai-l'zu</i>).	Prince Imperial.	1	ϵ "
<i>Ro-i</i> 郎位 (<i>Lang-tee</i>).	Chamberlains.	15	$\nu\chi n$ Coma-beren.
<i>San-ko</i> 三公 (<i>San-kung</i>).	Three Councillors.	3	Virginis.
<i>Kyu-tee</i> 九卿 (<i>Chiu-ching</i>).	Nine Nobles.	3	β γ δ Coma-beren. ρ d Virginis.
<i>Go-sho-ko</i> 五諸侯 (<i>Wu-chu-hou</i>).	Five Dukes.	5	β γ δ Coma-beren.
<i>Yeh-shu</i> 謁者 (<i>Yeh-cheh</i>).	Grand Master of Ceremonies.	1	c Virginis.

III. List of the Principal
Eenclos

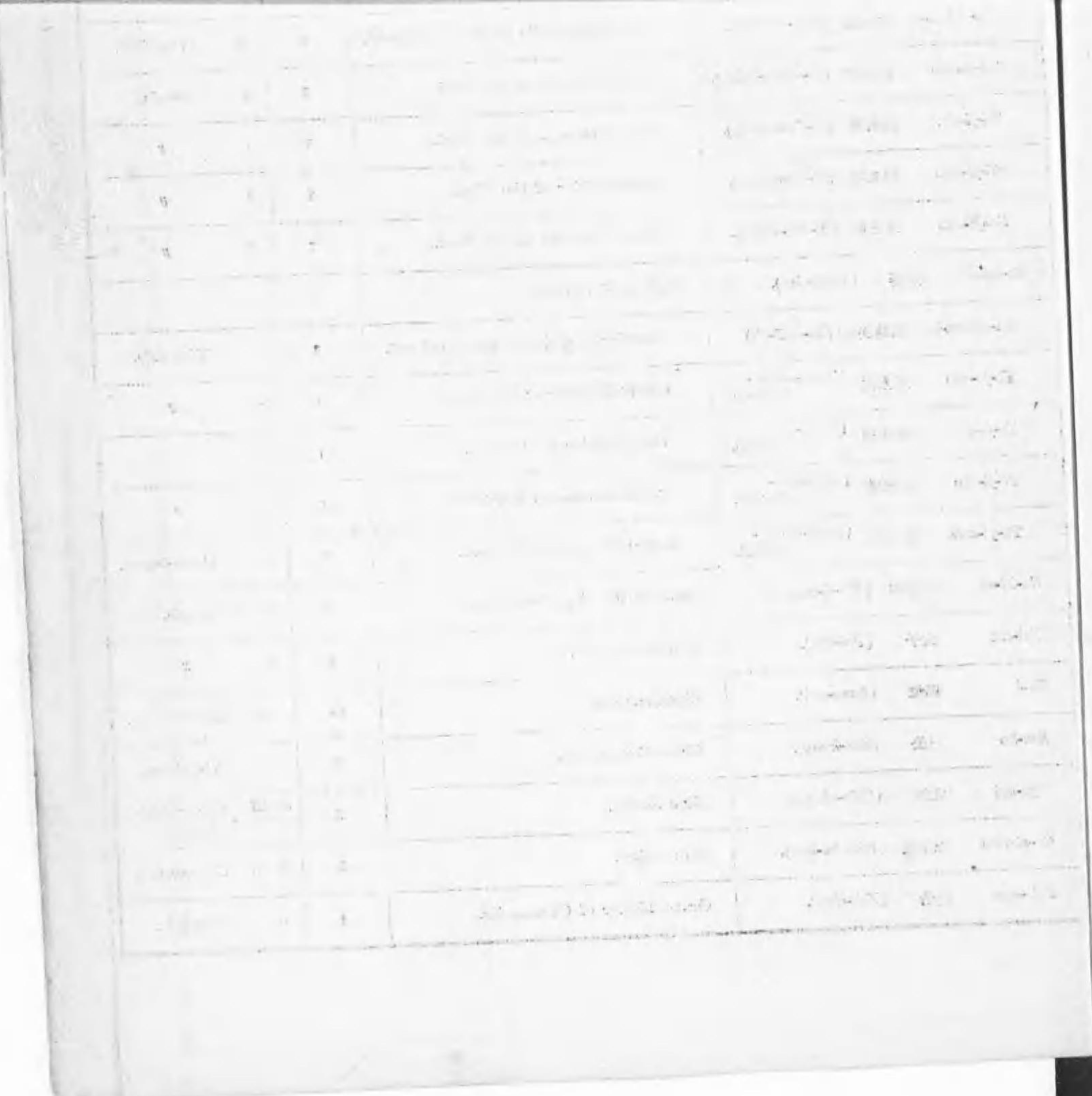
Names of the Stars	Tr
Ten-shi-yen 天市垣 (Tien-shih-yüan).	Market-Place,
<i>Sei-han</i> 西藩 (<i>Si-fan</i>).	Western Encin
<i>Kan</i> 韓 (<i>Han</i>).	Princes of the
<i>So</i> 楚 (<i>Ch'u</i>).	
<i>Ryo</i> 梁 (<i>Liang</i>).	
<i>Ha</i> 巴 (<i>Pa</i>).	
<i>Shoku</i> 蜀 (<i>Shu</i>).	
<i>Shin</i> 秦 (<i>T'sin</i>).	
<i>Shū</i> 周 (<i>Chou</i>).	

III. List of the Principal
Eenclos

Names of the Stars	Tr
Ten-shi-yen 天市垣 (Tien-shih-yüan).	Market-Place,
<i>Sei-han</i> 西藩 (<i>Si-fan</i>).	Western Encin
<i>Kan</i> 韓 (<i>Han</i>).	Princes of the
<i>So</i> 楚 (<i>Ch'u</i>).	
<i>Ryo</i> 梁 (<i>Liang</i>).	
<i>Ha</i> 巴 (<i>Pa</i>).	
<i>Shoku</i> 蜀 (<i>Shu</i>).	
<i>Shin</i> 秦 (<i>T'sin</i>).	
<i>Shū</i> 周 (<i>Chou</i>).	

III. List of the Principal Stars of the *Tien-shih* Enclosure

Names of the Stars	Translation	Number of Stars	Astronomical Designation
Ten-shi-yen 天市垣 (Tien-shih-yüan).	Market-Place,		
<i>Sei-fan</i> 西藩 (<i>Si-fan</i>).	Western Enciente		
<i>Kan</i> 韓 (<i>Han</i>).	Princes of the designated States	1	ζ Ophiuchus,
<i>So</i> 楚 (<i>Ch'u</i>).		1	ϵ "
<i>Ryo</i> 梁 (<i>Liang</i>).		1	δ "
<i>Ha</i> 巴 (<i>Pa</i>).		1	ϵ Serpens.
<i>Shoku</i> 蜀 (<i>Shu</i>).		1	α "
<i>Shin</i> 秦 (<i>T'sin</i>).		1	δ "
<i>Shü</i> 周 (<i>Chou</i>).		1	β "
<i>Tei</i> 鄭 (<i>Chêng</i>).		1	γ "
<i>Shin</i> 晉 (<i>Tsin</i>).		1	χ Hercules.
<i>Ka-kan</i> 河間 (<i>Hê-chien</i>).		1	γ "
<i>Ka-chü</i> 河中 (<i>Hê-chung</i>).		1	β "
<i>To-han</i> 東藩 (<i>Tung-fan</i>).		Eastern Enciente.	
<i>So</i> 宋 (<i>Sung</i>).	Princes of the designated States.	1	η Ophiuchus.
<i>Nan-kai</i> 南海 (<i>Nan-hai</i>).		1	ξ Serpens.
<i>Yen</i> 燕 (<i>yen</i>).		1	ν Ophiuchus.
<i>To-kai</i> 東海 (<i>Tung-hai</i>).		1	η Serpens.
<i>Jo</i> 徐 (<i>Su</i>).		1	θ "
<i>Go-yetsu</i> 吳越 (<i>Wa-yüeh</i>).		1	ζ Aquila.
<i>Sei</i> 齊 (<i>Si</i>).		1	110 Hercules.
<i>Chu-san</i> 中山 (<i>Chung-Shan</i>).		1	θ "
<i>Kyu-ka</i> 九河 (<i>Chiu-hê</i>).		1	μ "
<i>Cho</i> 趙 (<i>Chao</i>).		1	λ "
<i>Gi</i> 魏 (<i>Wei</i>).		1	δ "
<i>Tei-za</i> 帝座 (<i>Ti-tso</i>).		Imperial Throne.	1
<i>Ko</i> 候 (<i>Hou</i>).	Astronomer.	1	α Ophiuchus.



Ryo	梁	(Liang).	Princes of the designated States	1	ε	Serpens.		
Ha	巴	(Pa).		1	α	"		
Shoku	蜀	(Shu).		1	δ	"		
Shin	秦	(T'sin).		1	β	"		
Shū	周	(Chou).		1	γ	"		
Tei	鄭	(Chêng).		1	χ	Hercules.		
Shin	晉	(Tsin).		1	γ	"		
Ka-kan	河間	(He-chien).		1	β	"		
Ka-chū	河中	(He-chung).	Eastern Enceinte.					
To-han	東藩	(Tung-fan).	Princes of the designated States.	1	η	Ophiuchus.		
So	宋	(Sung).		1	ξ	Serpens.		
Nan-kai	南海	(Nan-hai).		1	ν	Ophiuchus.		
Yen	燕	(yen).		1	η	Serpens.		
To-kai	東海	(Tung-hai).		1	θ	"		
Jo	徐	(Su).		1	ζ	Aquila.		
Go-yetsu	吳越	(Wa-yüeh).		1	110	Hercules.		
Sei	齊	(Si).		1	ο	"		
Chu-san	中山	(Chung-Shan).		1	μ	"		
Kyu-ka	九河	(Chiu-ka).		1	λ	"		
Cho	趙	(Chao).	1	δ	"			
Gi	魏	(Wei).	Imperial Throne.			1	α	Hercules.
Tei-Za	帝座	(Ti-tso).	Astronomer.			1	α	Ophiuchus.
Ko	候	(Hou).	Prince Regent.			2	βγ	"
So-sei	宗正	(Tsong-chêng).	Imperial Princes.			4	πχρ	"
So-jin	宋人	(Tsong-jen).	Cereal Measure.			4	ιχ	"
Koku	斛	(Kioh).	Liquid Measure.			5	ωη	Hercules.
To	斗	(Tou).	Stuff Measure			2	102 96	"
Haku-dō	帛度	(Pē-tu).	Butcher's Shop			2	109 95	"
To-shi	屠肆	(T'u-sfu).	Shops in a row Market of Precious Stones.			2	λ	Ophiuchus.
Retsu-shi	列肆	(Lieh-szu).	Carriage Market.			2	20 ν	"
Sha-shi	車肆	(Chū-szü).	Municipality.			6	μ τ	Ophiuchus.
Shi-rō	市樓	(Shih-lou).					ι ρ	Serpens.

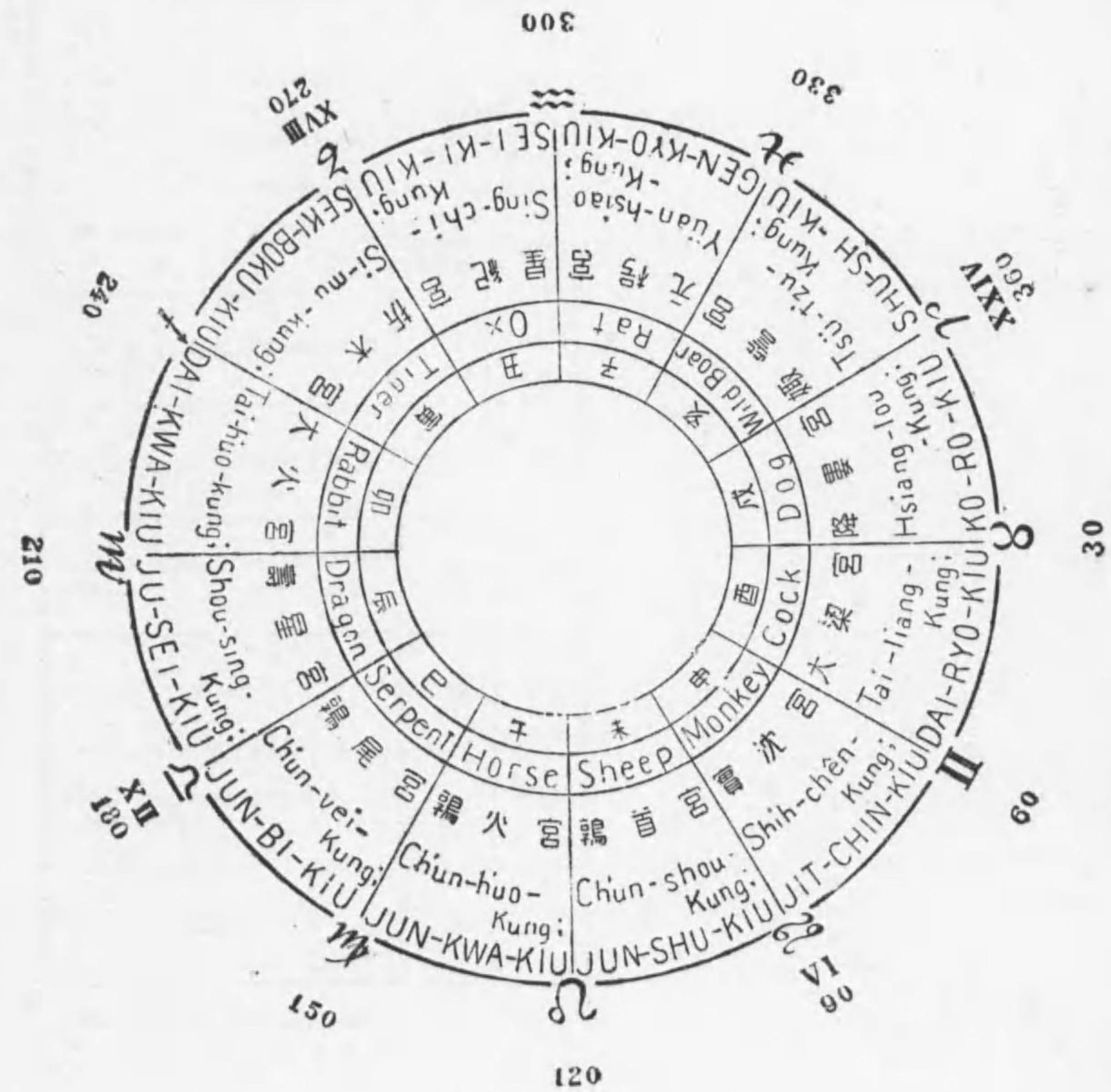
It is signified by this enclosure that an Emperor visits a City attended by his Nobles (晉書天文志).

IV. List of the Twenty-eight Constellations.

Names of Stars.	Number of Stars.		Total.	Frontier Stars.	After the Forms of various Objects.	After the Forms of Characters.
	a	b				
IV. 蒼龍 (蒼龍 T'sang-lung) The Seven Eastern Constellations.						
1 Kaku. 角 (角 Kioh)	2			α Virgo; Virginis.	Horn (of the Dragon.)	
2 Kō. 亢 (亢 Kang)	4			χ "	Gorge (of the Dragon.)	
3 Tei. 氐 (氐 Ti)	4			α Libra; Libræ.	Bottom.	臣
4 Bō. 房 (房 Fang)	4	9	(13)	π Scorpius; Scorii,		房
5 Shin. 心 (心 Sin)	3	6	(9)	σ "	Heart (of the Dragon.)	心
6 Bi. 尾 (尾 Wi)	9			μ "	Tail (of the Dragon.)	
7 Ki. 箕 (箕 Ki)	4			γ Sagittarius	Fan.	
V. 玄武 (玄武 Hsüan-wu) The Seven Northern Constellations.						
8 To. 斗 (斗 Tou)	6			φ Sagittarius	Ladle.	斗
9 Giu. 牛 (牛 Niu)	6			β Capricornus		牛
10 Jio. 女 (女 Nü)	4	4	(8)	ε Aquarius		女
11 Kio. 虛 (虛 Hü)	2			β "	Emptiness.	
12 Ki. 危 (危 Wei)	3	10	(13)	α "		危
13 Shitsu. 室 (室 Shih)	8	3	(11)	α Pegasus.	Pavilion.	
14 Hei. 壁 (壁 Pih)	2			γ "	Partition-wall.	
VI. 白虎 (白虎 Pê-hu) The Seven Western Constellations.						
15 Kei. 奎 (奎 Kuei)	16	6	(22)	η Andromedæ.		奎
16 Bō. 胃 (胃 Lau)	3			β Arietis.	Dawn.	
17 L. 胃 (胃 Wei)	3			35 " (Musca)	Stomach.	
18 Bō. 昂 (昂 Mau)	7	4	(11)	δ Taurus (Plejaden)	Tuft of linded wool (A kind of pennon.)	
19 Hitsu. 畢 (畢 Pih)	8	5	(13)	ε "		畢
20 Shi. 觜 (觜 Tsui)	3			λ Orionis.	Muzzle (of the Tiger.)	觜
21 Shin. 參 (參 Tsan)	10	11	(21)	ζ "	Form the Tiger.	
VII. 朱雀 (朱雀 Chu-tsiè) The Seven Southern Constellations.						
22 Sei. 井 (井 Tsing)	8			μ Geminorum		井
23 Ki. 鬼 (鬼 Kwai)	5			Cancer	Ghosts.	
24 Riv. 柳 (柳 Liu)	8			δ Hydræ.	Willow.	
25 Sei. 星 (星 Sing)	7	13	(20)	α "		星
26 Chō. 張 (張 Chang)	6			ν "	Tension.	張
27 Yoku. 翼 (翼 Yih)	22	7	(29)	α Crateris.	Wings (of the Phoenix).	翼
28 Shin. 輪 (輪 Ch'in)	6			γ Corvus.	Whipple-tree (of a Wagon).	

1) In the Column "a" is put the number of stars determined by the Chinese astronomers, and in "b" the stars which I newly supplemented, in order to make the figures of the constellations clearer.
 2) The first star of each constellation is regarded as the Frontier star.
 3) According to the ancient Indian calendar, Tien-t'uan 天關 (ζ in Taurus) took the place of Tsui 觜, Tsan of to-day being the head star of Tsan 參. (The astronomical part of the 古今圖書集成乾象典星辰部)

V. Table of the Relative Positions of the Twelve Mansions and the Zodiacal Signs.



The relative positions of these twelve Mansions (*Kung; Kiu*) and the zodiac are recorded in detail on the table 5 and the chart 2 of the annexes in Japanese. The Roman transcriptions of these twelve Mansions are both Chinese and Japanese pronunciations, and it is likewise also with the names of the constellations and stars on the other tables.

VI. Table of the Constellations and the Number of the Stars Observed and Defined by Chinese and Japanese Astronomers.

Astronomers.	Shi-bi-yen. 紫微垣 (Tsa-wei-yuan.) (Imperial Palace.)		Tai-bi-yen. 太微垣 (T'ai-wei-yuan.) (Government.)		Ten-shi-yen. 天市垣 (T'ien-shih-yuan.) (Market-Place.)		二十八宿等 28 Constellations etc.		Other Scattered Stars.				Total.	
									Northern part.		Southern part.			
	Constel- lations.	Number of Stars.	Constel- lations.	Number of Stars.	Constel- lations.	Number of Stars.	Constel- lations.	Number of Stars.	Constel- lations.	Number of Stars.	Constel- lations.	Number of Stars.	Constel- lations.	Number of Stars.
Wu-hsien 巫咸 of the Shang 商 Dynasty.	4	18	1	1	4	8			5	24	19	93	33	144
Kan-tê 甘德 of the State T'si 齊.	21	102	7	15	2	10			48	184	40	200	118	511
Shih-shên 石申 of the State Wei 魏.	13	64	6	42	8	41	35	182	34	203	36	278	132	810
Total.	38	184	14	58	14	59	35	182	87	411	95	571	283	1465
Yasui Shunkai 保井春海 of Japan 日本.	8	38	3	18	3	12			20	126	27	117	61	308
Total.	46	222	17	76	17	71	35	182	107	537	122	685	344	1773

The name of each constellation and number of its stars are recorded in detail on the tables 18 and 19 in the chapter 3, the part IV of the Annexes in the Japanese text.

PART II.

ON THE TWENTY-EIGHT CONSTELLATIONS TOGETHER WITH THE SIGNS OF THE ZODIAC; THEIR ORIGIN AND HISTORY.

CHAPTER I.

Ancient Astronomy.

The origin of astronomy is very old. When the 12 Zodiacal signs were first defined by the Caldians (about 1000 B.C.), the four constellations, Antinus (右旗, 天桴), Berenice (郎位, 郎將), Plejaden (昴宿), and Hyaden (畢宿), were already known. In India, astronomy seems to have existed before Sakya-muni (about 4000 B.C.); for it was recorded that, in the time when the moon met with the constellation *Kuei* 鬼, Gautama was born. In China, we read in the *Shooking* 書經, the oldest of the intelligible Chinese scriptures, that the Emperor Yao 堯 gave instructions to his four scholars, *Hsi-chung* 羲仲 and *Hsi-hsü* 義叔, *Ho-chung* 和仲 and *Ho-shü* 和叔, to regulate the dates of midsummer and winter, and of the spring and autumn equinoxes, by observing the four constellations, *Niao* 鳥, *Huo* 火, *Hsü* 虛 and *Mao* 昴 (2361 B.C.); and such an astronomical office is said to have been in its existence since the early time of the Emperor *Chan-yü* 顓頊 (about 2509 B.C.).

From the facts that, in India, China, Mongol etc., the 28 constellations prevailed, while Caldia, Babylon, Arabia and India alike adopted the Animal Belt, well might it be inferred that even in those old times the distant scholars and philosophers had some means of intercommunication and exchanged knowledge and wisdom between them.

CHAPTER II.

Variation of the Number of stars and names of the 28 constellations.

Those ancient nations did not always conform in the names of the 28 constellations and the number of stars thereof, and even in the mansions themselves. As the astronomical knowledge was adopted by the nations, the 28 constellations were perhaps introduced in crude forms, each mansion being represented by one or two chief stars. By some nations, the constellations thus adopted were called in their own words retaining the original ideas, while by others they were given the names of entirely new signification. In neither case of which the number of stars remained always unchanged.

As regards the names of the constellations, those in Mongol are the same as in the Middle India, whereas China and Mantchu coincide in their initial sounds, the latter evidently borrowing them from the former. It is also noticeable that, in China, most of their names symbolize the imaginary star-figures by means of the ideo-graphical characters. In Parthia (安息國), *Yüeshi* (月支國), Penan, Ceylon etc., the constellations had each a particular name different from the original, although astronomical knowledge was first imported from India.

CHAPTER III.

Astronomical knowledge in India: Dividing stars into 28 constellations.

It was perhaps by the Indians that the starry heavens were first divided into eight and twenty parts. In a Sutra, we read of some discourses made upon them by Buddha and the Brahmins, though not without surmises and far-fetched ideas. In the ages before Buddha, only the constellation *Kuei* 鬼 was yet known, as was already mentioned; and it was not before Buddha taught his disciple Ananda in the city *Sitrabat* 室羅伐, that the 28 constellations were all brought to light and given names. Once *Kuangwei* 光味, ascetic from the Himalaya, saw Buddha in Benares, and, discoursing on the constellations, tried hard to prevail over Buddha, only to be convinced by him. Again, *Kharostha* 佉盧虱吒 in the Kharot mountain

is said to have discoursed on these constellations and the 12 Zodiac. Both *Kuang-wei* and *Kharostha* were perhaps most ardent star-gazers in those times.

Gautama, during six years of his ascetic life in the mountains, which he spent chiefly in metaphysical study and meditation, naturally betook himself to the habit of observing the starry heavens, and became versed in all the star-lore of his day, especially in the 28 constellations, which served, so to speak, the land-marks for astronomical observers in measuring and determining the position of the sun, the distance of the moon, and the revolutions of the five planets. Even after he had got a clear vision of the way of life, Gautama sometimes alluded to them in his teaching to his disciples. So with the spread of the Buddhist religion, the astronomical knowledge was also diffused throughout the Five Nations of India, over Central Asia, and even to the far eastern nations.

One or two more remarks as to the Indian origin of the 28 constellations. A numerical term of fourfold seven is one of those used habitually by the Buddhists, as in the *twenty eight* captains under the Four Celestial Kings, *Vaisravana* 多聞, *Dhrtarastra* 持國, *Virūd-haka* 增長 and *Virupākṣa* 廣目.

That the 28 constellations were divided into the four quarters, East, West, South and North, for each of which the Four Animals, Dragon, Tortoise, Tiger (or Lion) and Peacock were respectively applied, seems to have been an Indian invent. The four animals used to be looked upon as the four mystical things by the Buddhists, who came gradually to believe they were guardians of their religion. The *Mandala* of the North Seven Stars (the Great Bear), a symbol of star-worship, had, as a rule, the Four Animals drawn in its four quarters. The four sides of a sarcophagus, or the walls of a tomb were generally painted or sculptured with their figures, which were supposed to guard the soul of the departed eternally.

The Star-mandala in the Temple *Horiūji* is also to be regarded as an evidence of the Indian origin of the 28 constellations. The

Star-mandala, an exhibition of the real phasis of the universe, representing in figures and images the Northern Stars, the Nine Stars, the twelve Animal Belt and the 28 constellations with the Buddha Amida in their centre, was no doubt drawn from the Buddhist conception of nature as a manifestation of the truth, which naturally led them to look upon the heavenly bodies as heavenly patron-gods.

CHAPTER IV.

The 28 constellations in China: When were they transmitted to China?

The 28 constellations, which China introduced from India, were but rudimentary, each constellation defined only by one or two important stars. May be the Chinese students of the heavens, observing them, and circumscribing each constellation by an imaginary figure, gave it a new name, symbolizing its star-figure by their ideograms. Its number of stars was also newly determined. Thus established were the 28 constellations in China.

We have seen that China owed the 28 constellations to India, but the precise date of their importation is not yet known. Perhaps it might not a great mistake to surmise that it was about the beginning of the *Age of Confusion* 戰國 (about 400 B.C.). If I am not much in the wrong, the first mention of the 28 constellations is found in the chapter devoted to the "description of twelve months" 十二月紀 of the *Lüshi-Chun-ch'iu* 呂氏春秋, a sort of miscellaneous records, written perhaps about the latter part of the *Chow* 周 Dynasty. It is to be found also in the *Li-chi* 禮記, or Book of Rites, which seems to have been compiled by the brothers *Tai* 載 in the later period of the *Age of Confusion* (between 200 and 100 B.C.). Besides, we read the names of the constellations in the *Êch-ya* 爾雅, a sort of ancient Chinese etymology. In the Historical Record 史記, a great historical work by *Ssu-ma ch'ien* 司馬遷 of the *Western Han* 西漢 Dynasty, we see the grand firmamental figures of the 28 mansions with principal stars exposed in an astrological sense and arranged into other several departments according to the terrestrial order of the states and districts of the large China.

As was related in my *Temmon Yōran*, it was *Ch'ên-cho* 陳卓, a distinguished scholar of the heavens in the *Wu* 吳 Dynasty, who, for the first time, made star-maps according to the authority of his three great predecessors, *Wu-hsien* 巫咸, *Kan-te* 甘德 and *Shih-shên* 石申. Two hundred years after this, *Ch'ien-lê-chih* 錢樂之 of the *Sung* 宋 Dynasty made a celestial globe, on which he exhibited the stars defined by the three astronomers with small balls of three different colours, yellow, black and white, great care being taken to have the constellations and number of stars conformed to those given in *Chên-cho's* maps. *Li-shung-fêng* 李淳風 of the *T'ang* 唐 Dynasty, in his *Astronomical Chronography*, though the context is somewhat ambiguous, seems to have put the 28 constellations outside of the stars of the three astronomers. However, they are yet generally known and transmitted as *Shih-shên's* delimitation, perhaps because it was he who gave new names to, and stated new star-numbers of, the new constellations that had been just imported from India. *Shih-shên* is also known as the most eminent of the compilers of calendar.

About eighty years before *Chên-cho* made starmaps, towards the last period of the *Eastern Han* 東漢 Dynasty, *An-tsing* 安清, a Buddhist from Parthia, who was an astronomer, a Sanskritist, well versed in the Chinese writings, translated the Sutra *Syatokan* 舍頭諫, a discourse on the 28 constellations, into Chinese; of which *Chên-cho* in his preparation of his work of map-making, perhaps availed himself. In the *Age of the Three Kingdoms*, there lived in the Kingdom of *Wu* 吳 *Chih-chien* 支謙, a contemporary with *Chên-cho*, as a tutor to the royal prince. He was a Buddhist from the *Yüe-chi* 月氏國, as much skilled in Sanskrit and Chinese language as *An-tsing*. An Indian astronomer called *Chü-lü-yen* 竺律炎 was also staying with him. The two scholars, in their joint effort, completed the new Chinese translation of the Sutra *Matokha* 摩登加 (the same book as the *Syatokan* 舍頭諫, only different in name). There is some reason to believe, that *Chên-cho* was personally acquainted with them, and that from them was obtained much of his star-lore; aspiration

thus taken hold of him to have the first-hand knowledge of astronomy achieved in China against the Indian. After much study and deep research, he is said to have succeeded in the makeup of starmaps upon the basis of the works of his three predecessors, *Wu-hsien* 巫咸, *Kan-tê* 甘德 and *Shih-shên* 石申. But it might well be suspected that *Chên-cho* ascribed to his three predecessors what was really his own discovery, that it might be held in the greater importance. It was about this time, the period of the *Three Kingdoms* 三國 (about 223 A. D.), that all the Indian astronomy together with the rules and methods of reckoning and arranging the divisions of time was introduced to China.

In the beginning of the *T'ang* Dynasty, astronomical scholars were often invited from India and made directors of the Imperial Observatories, in order to make astronomical observations and calculations the more accurate and precise. So we see the remarkable advance in the astronomical knowledge of the *T'ang* Dynasty.

The star-maps of *Chên-cho* embrace 283 constellations and 1465 stars in all, of which no modification has ever been dared to make by any scholar ever since. The names of stars or constellations, for the most part, seem to have been given in the times of the *Ch'in* 秦 and *Han* 漢 Dynasties; as are discerned from those on the Celestial maps of the *Sung* Dynasty, copies after *Chên-cho's*.

CHAPTER V.

Bringing the Indian Star-lore into China.

It would not be out of place now to take a little geographical view of the passage of the importation of the Indian star-lore into China. The powerful state of *Ch'in*, on the western frontier of China, which gradually vanquishing and absorbing her rival states, succeeded in founding a large unified Empire, had, from the earlier time, some commercial affairs carried on with the various tribes beyond the frontier. Lying far to the west was the Great *Yüe-chi* 大月氏國, a high cold land. Beyond the *Ts'ung-ling* 葱嶺 mountains on the west of it, there lies India, then a land of brilliant civilization. This being the case, *Ch'in*, among other states in China, was

in the most facilitating position of coming in contact with the Indian culture. No wonder, that the names of the 28 constellations originated in India are found, as was mentioned above, in the *Lu-shi Chun-ch'iu* 呂氏春秋, which *Lü-pu-wei* 呂不韋, a great minister to the State of *Ch'in*, is said to have invited the great savants of the day to compile.

The stream of Indian civilization flowed into China through, so to speak, a cultural channel of the *Yüe-chi*. There was a certain place in that land, which served for a temporary reservoir for the flow of the civilization. It was that place which afterwards got the name of *Tun-huang* 燉煌 in the time of the *Han* Dynasty. In the course of time, by evaporation or somehow, it was changed into a waste buried over by sand, and for long almost forgotten by men remained un-explored. The curiosity and investigation of some of modern archaeologists led them to the excavation of the supposed ruins. The discovery of many volumes of Buddhist scriptures, religious paintings and utensils, and many other artistic things, on which even the Greek influence is to be traced, was the rewards of their adventurous undertakings. Among the excavated things, there were those which belonged to the *Han* Dynasty. So it might be well inferred that, even in the earlier times, there must have been the transmission of civilization from India to China through the medium of *Tun-huang* 燉煌; and that, by that road, too, the astronomical ideas of India were first brought into *Ch'in*, whence to be diffused all over China.

CHAPTER VI.

Zodiacal Signs.

The Zodiac is supposed to have been invented by the *Caldians*. It was divided into twelve signs and appropriated for the twelve months of the year. They are each symbolized by a well-known animal, and are extending on each side of the ecliptic; so that they comprise the apparent paths of the sun, moon and principal planets. It was perhaps on the basis of this Zodiac that *Hipparchus*, the great-

est of the Greek astronomers (about 238 B. C.) and Ptolemy in Alexandria (about 130 A. D.) greatly developed astronomy and could make the catalogue and maps of stars.

In India, the 12 Zodiacal signs were thought to be so many heavenly patron-Gods like the 28 constellations, who kept watch over the life of the whole human race.

CHAPTER VII.

Intercommunication of the Old Times.

On the whole, India, in ancient times, was, so to speak, a rallying spot of star-lore, sending out the 28 constellations of her own creation to the East; and bringing in the Zodiac from the West, again to send it out to the East. Thus India was in some ways the central point in communication and interchange of the Western and Eastern culture and knowledge.

Intercourse between the distant civilized parts in Asia having been opened from the early times, it would easily be imagined that Buddhist priests, astronomers and other scholars of India and China, who devoted their lives to the betterment of the world, travelled far, for all their wants and toils, over the dreary mountains, across broad rivers and boundless deserts, with no other objects in their minds than to satisfy their cravings after knowledge, or to impart their store of wisdom.

As even the wondrous civilization of today is but an increase of the continual flow of human culture, it can safely be said that it owes much of its glory to the self-sacrificing efforts of those high-souled and stout-hearted men who, being always above the world for the world, did their best to better human life, trying in many ways to lead the world in the true way. Great be our praise and deep our gratitude for those pioneers of truth!

大正十四年十月三十日印刷
大正十四年十一月三日發行



發賣所

天文要覽 奧附
定價 金拾貳圓

發著者 兼 野 清
行作 者 小 野 清

印刷者 井 上 源 之 丞
印刷所 東京市下谷區二長町一番地
凸版印刷株式會社

東京市日本橋區數寄屋町九番地
六合館 林 平次郎

電話大手 七七六番・七七九番
振替貯金口座東京 一三七一番

正 誤

頁 九 九 三 六 五 六 九 百 九 百 九

行 七 九 一 一 十 一 八 二 十 二

誤 郡將 事績 壞を 標・雜 標識 維才 又談 遷化

正 郎將 事蹟 壞を 標・雜 標識 維才 父談 遷死

脱 (一三) 年(下)

540
96

終